
空闘飛走スカイライナー

呉璽立児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空闘飛走スカイライナー

【NZコード】

N3223V

【作者名】

吳璽立児

【あらすじ】

人間自身が空を飛ぼうという概念が生まれなかつた世界。

人々はHSA^{ハイサ}と呼ばれる人造機人で空を走るという手段を生み出した。

飛走都市スカイレール　　ここはHSAが2RBと呼ばれる競技を盛んに行う都市である。小さな工房で働く少年・クリュウは、エリート競技者^{ライナー}を輩出するアカデミーで期待されながらも、岐路に立たされ中退した過去を持つ。夢をかなえられずに燐つっていたクリュウが今、『飛走』する！

2体の機械が空を走る。それは鳥のように羽を使って飛ぶ訳ではない。意味の通り、2つは空を走り駆けぬけているのである。

機械は、人型をしている。目を引くものが一つある。人間で言うと踝に車輪がついている。

車輪は高速で回転して、空を伸びる線を走っている。

その昔、魔法使いと言つ者達がいた。魔法使い達は空に自分達の目的地まで線を引き、そこまで空を渡つたとされている。現在はその線”スカイレール”を引く技術を利用し、その上を機械の**人形**：“High - Speed A 110 y 通常 ハイサ HSA”と呼ばれる者達が疾走している。後ろに客車をつけた運送用や荷物を運ぶ運搬用……そして、HSAを駆るのはライナーと呼ばれる人間である。

「つらあ！！」

「フン」

一つの拳が、空でぶつかる。人々の歓声が起る。ぶつかり合つた2機のHSAはそのままお互いの向かっていた方向へと駆け抜けていく。

Race Rail Battle 2RB用と呼ばれるHSA達の空走バトルである。あれらは、己が空を走るスピードを競い、テクニックを競い、そして、動力から生み出されるEngine of Magic EOMをぶつけ合う。

「……スピードが落ちるが仕方ねえ」

片方のHSAがスピードを下げる。

観客達がどよめき始める。スピードを落とすという」とは、HSAがEOMを使う時の前動作である。2RB用のHSAは、速さを追求する為に一つの機関しか積まない。EOMを使う為には、どうしても車輪を動かす為の動力をカットしなくてはならないのである。

「炎射 バースト・フレイム！！」

炎のE.O.M^{エオム}が、対戦相手のH.S.A^{ハイサ}へと襲い掛かる。

「雷壁 エレクト・ウォール」

だが、炎は展開された雷によつて防がれた。

『お互いの、E.O.M^{エオム}が衝突！！ これは互角か？！』

「互角？ 冗談じやない。攻撃と言うのはこいつやる物だ」

雷を使つた方が早くスピードを取り戻す。

そして、拳を握る。ほとばしる雷光。

「サンダー・パワー」

雷のE.O.M^{エオム}が拳に宿る、そして炎を使つたH.S.A^{ハイサ}へと叩き込まれた。

叩き込まれた方は、スカイレールが消失した。スカイレールを走れないH.S.A^{ハイサ}は物理法則の元、落ちるのみ。

『勝負合つた！！ 連戦連勝！！ やはり、新機関を搭載したH.S.Aを倒すことは出来ないのか！！』

「くわい……やつぱりギドレー・マイルは強えなあ

「これも雷魔^{らいま}駆動のおかげなのか？」

「ここは飛走機都市・スカイレールの[工業地区]にある、小さな町工場。昼休み男達が、テレビの前で白熱していた。

「いや、それもあるがやつぱりギドレーの飛走技術は本物だ。クリュウの言つことは本当だつたな」

クリュウ・イワザキは、同じ工場で働く少年であった。クリュウは、ギドレーと2RBライナー・アカデミーという、2RBに用いられるH.S.Aライナーの教育学校の同級生であった。クリュウは途中で学校を続ける資産がなくなつたので自主退学したが、当時のクリュウはギドレーと飛走技術を競り合つていた。

「おい、お前ら！－ 昼休みはもう終わりだ－！ いつまで仕事サボつてやがる！－」

オーラス工房の工場長であり社長である、アドウ・オーラスが皆

に発破をかける。

「つたく、オメエらは人の目が無いと仕事も出来んのか！！」

工房は僅か5人しか働き手はない。それでも、小さな仕事場なのでそれぞれがやるべき仕事を行えれば、きつちりと回るのである。

「クリュウを見習らわんか！！」

「へいへーい」

アドウは工房の中を見渡す。今請け負つてある仕事は、とあるHSA^{イサ}の組み立てであつた。

小さな町工場の中には全高6メーヤほどの人型の機械が鎮座している。成人男性の平均身長が1・7メーヤだとするとおよそ4倍の大きさがある。これがHSA^{ハイサ}である。これほどの巨体が空を走るのである。

「……いい機体だなあ」

パーティを磨きながら、クリュウはそう思つ。

クリュウはライナーとしての資格を持つていて、この工場では技者の真似事をしているが、本来はテストライナーとして雇われている。確かにHSA^{ハイサ}に乗ることが出来る、がライナーとしてはやはり自分自身のHSA^{ハイサ}が欲しいと思う。そしてこのような名機を持つて2RBに参加したい、そんな思いがいつも突き刺さつていて。

「是非とも乗つてみたいなあ」

工房のHSAを見上げる。

「ふーん、アナタにこの子のよさなんて分かるの？」

透き通るような高い声。一部例外もあるが、汗と油臭いそんな工場には相応しくない声がクリュウに問いかける。

「……何だ？ このガキンチョは……」

「ガキンチョって何よ！ あたしは……つてどこ掴んでるのよ。離しなさい！！」

クリュウは容赦無く、少女……といつよりも更に背が低い女の子の首根っこを掴む。

「何ガタガタ騒いでやがる！」

アドウが騒ぎを聞きつけて怒鳴りつける。

「親方あ、こんな所に女の子が」

クリュウは女の子を高く掲げる。

「そんなもの摘み……ッ！」

少女の姿を見た瞬間、アドウは声にならない驚き声を上げた。いつもはどつしりと、貫禄を見せて歩いているアドウがこのときばかりは、まるでコマ送りでもしているコントのような勢いで掛けてくる。

「ツ――――！」

クリュウの頭に鉄拳が振り落とされた。

「バカ野郎！この方を誰だと思っていやがるんだ！！」

アドウは摘み上げられていた少女をクリュウの手から搔つ攫うと丁寧に地面に下ろす。

「は、誰ってただのガキ……」

「オメーはそれでもライナーか！――」の方はあのアイザ・ヨーだぞ

アイザ・ヨー それは2RBにおいて知らぬものはいない天オライナーである。様々な重賞を勝ち取りもはや並ぶものはいないとされるライナーである。

「は？ コレがアイザ・ヨー？」

クリュウはパチクリと目を開かせる。

クリュウとて、アイザを知らない訳ではない。だが世界のアイザと田の前の幼女はどう考えても結びつかないのである。

「このアホンダラ、なんで彼女の容姿を知らねえんだ！ アイザ・ヨーといえばその腕前もそうだが”天駆ける天女”とまで言われるアイドルだろうが！」

何故この田の前のカナズチが恋人という比喩が相応しい油ギッシュな中年男はそこまで詳しいのだろう……それともクリュウが知らないだけでなのか。

「……まあいいわ」

地面に下ろされたアイザは、乱れた長髪を手で梳く。

「どう? 」この《ホープ》は

「ほぼ完成だ。世界一と言わねながら、まだ貴女の機体を弄らせてもらひえるとは思つて無かつたよ」

「ふふふ。アドウの腕は知つているもの」

アドウは自分を褒められ恥ずかしそうに頭を搔く。

「まあ、そういわれちゃ仕方ねえ。この老いぼれと言えど新しい技術に着いていくしかねえつてこつた」

「そうよ、老け込むにはまだ早いわ」

ただ腕は良くても客足は途絶える一方であった。大企業が開発、販売、修理を全て請け負いライナーは自分の飛走技術のみを磨く、それが今の2RBの主流であった。

「昔は、色々な所の部品をかき集めて、そして自分だけのHSAを作り上げたもんだ。だから、部品屋も工場も技術を競い合つたもんだ。

それが、今はどうだ……。今のライナーと来たら。型に流されたHSAを使ってそのマシンに会つた2RBをしやがる」

アドウはため息をつく。

「この街 飛走都市スカイレールまでそうなつてしまつたら2RBは面白くなくなるわね

「まったくその通りだ」

「でも このあたしがいる! そんなHSAに劣りはしないわ」「ハツハ、天下の天才ライナー様にそう言つていただけるなら、この老骨も身体に鞭を打ち続けるしかないつてもんだ」

「それで、実際はどの段階まで来てるの?」
アイザは世間話に区切りが付くと自分のHSAの話へと移る。
「実際、テスト飛走の段階までは来てる。この先どうするか相談しようと思つてたんだ」

(とうとう、来たか)

クリュウは心躍らせる。この工房でテストライナーとして雇われている以上テスト飛走はクリュウの役割である。その役割を幾度と無くこなしてきたクリュウは当然自分がやるものだと思っていた。

「テスト飛走のライナーだが……」

「もちろんあたし自身が乗るわ」

なんの迷いも無くアイザはそう言つた。

「え!?」

クリュウは出鼻を打ち砕かれた。

「いや、だがな今回は初回のテスト飛走だ。アンタが乗らなくとも

……」

「あら、いつになく弱気じやない。アドウいらしくない」

アイザはアドウを挑発する。

「なんだと!! わうわう、それなら好きにしろ! テメエが乗ればいいじゃねえか」

売り言葉に買い言葉、喧嘩口調でアドウは言つ。

「HSA^{ハイサ}は手足も同然、このあたしは乗りこなして見せるわ

笑いあう一人を尻目に、落ち込むのはクリュウである。

「そんなん……」

落ち込む声は聞こえてはいないが、その落胆振りはアイザも見て取れた。

「そういえば見ないヤツだけど、なんなの?」

「ああ、クリュウのことか? そういえば見るのは初めてだつたか。アイツは新しく雇つたテストライナーだ。たまたま教習場で走っている所を見かけてな見るものがあるから声を掛けたんだ。まあ、一言で言つてしまえばHSA^{ハイサ}馬鹿だ」

アイザがは「ふーん」と考えた素振りをする。

「アドウがそんな風にいうなんて意外ね」

アドウは経験と私見がある人間である。アイザはアドウがそう評価するクリュウという存在が気に掛かった。

「クリュウは中退したらしいんだがアカデミーに通っていたらしい。その時の同期があのギドレー・マイルだ。在籍中は主席を競いあつたそうだ」

ギドレーの存在はアイザも当然知っている。期待の超新星と謳われるライナーの名を聞きアイザは田の色を変える。ギドレーは大企業のクロバ工業が誇る最新鋭の HSA^{ハイサ}を駆る専属ライナーとして記憶していた。アイザの彼に対する評価は、確かに飛走技術は眼を見張るものがあるが、それ以上に気に喰わない、その一言に尽きた。それに対して田の前のクリュウという少年はどうだろうか？ アイザは考える。一見すると年齢は遙かにアイザの方が年下だが、HSA^{ハイサ}に乗れる、乗れないで一喜一憂するクリュウは子供っぽく見える。

（でも、そういうの嫌いじゃないわ）

アイザはそう思つ。そして、ある面白い考えが頭に浮かんだ。

「ちょっと、アナタ……！」

「へ？」

落ち込んでいたクリュウがアイザの呼びかけで顔を上げる。

「あたしのテスト飛走の相手をしなさい」

「え！？」／「は！？」

クリュウとアドウは同時に驚きの声を上げた。

「本當か？ オレを HSA^{ハイサ}に乗せてくれるのか」

クリュウの心は躍つた。

テスト飛走で何度か 2RB 用の HSA^{ハイサ}に乗ったことはあるが、アイザの言い振りから、いつものただ飛走を行うのではなく、実践形式の相手をするように言われている。

2RB 形式の飛走なんていつ以来であるが、クリュウは思つ。

「おいおい、オメエいきなり2RBする気が……」

アドウが声を上げる。

通常HSAは、組み上がってから何度もテストを重ねて調整をする。まずHSAの調整を行い事故が無いように手を加える、次はライナーがHSAの乗り方を学ぶ為のテストを行う。

それをアイザは2段階目から行おうとしているのである。

「だつて自信があるんでしょ？」

「何があつても知らんぞ……」

ハアとアドウはため息をつく。

アドウからの許可が出た。クリュウの胸が高鳴る。

「楽しみだ」

「ええ、本当にね」

クリュウとアイザをお互いに見つめあつ。

クリュウは、天下のアイザと戦えることに感動に近いものを感じていた。そんなアイザからは強者の余裕のよつなものが感じられる。「互いにHSA馬鹿なのは分かるがな……クリュウ、オメエ肝心なHSAはどうする気だ？」

「そういわれクリュウは我に返る。そう言われば、テスト用のHSAに乗せて貰えないということは自分には乗るものがない。」

「ぐおおおおお」

HSAが無いこと、どうしてもアイザと2RBをしたい、そんな

葛藤がクリュウを苛む。

（どうしよう……こんな機会は滅多にない。今まで貯めてきた金を使つてどこから借りてこようか）

HSAを借りるとしたらそれには貯めた費用をかなり使わなくてはいけなくなる。

だがそれいたら自分のHSAを持つといつ夢はかなり先へと遠ざかる。

2RB用のHSAを借りるといつの通常誰もが行うことではない。

行う人とすれば我が身一つで2RBを覗むる賞金稼ぎみたいな者だけ

であった。だからレンタル費用とこりの何があつても良いよつこ
高く設定されていた。

「そうねえ……」

クリュウの横でアイザも何か考えたそぶりをしている。
「変な2RBをして面白くなくなつても困るわ。あたしのHSAを
貸すわ。今連絡したら3日後ぐらいには到着するでしょう。3日後
にテスト飛走……それでいい？」

「本当に！？ ありがとう！！」

クリュウはアイザの手を握り感謝した。その行動にアイザは顔を
赤らまで動搖したが、すつと手を切るとクリュウ、アドウに背を向
けた。

「ふ、ふん。いい3日後よ。逃げずに待つていなさい
びしつと指差しアイザは歩き出す。

その背に向かってクリュウはひたすら手を振つていた。

転機（後書き）

いきなりですが続きます。チャンネルはそのままーーー！

空を走れ！！

「うひゅーすげえ！！」

クリュウ達オーネクス工房の一昧は、アイザの招きで飛走都市スカイレイルにあるスタジアムを訪れた。HSAが走るスタジアムの構造はその場所ごとに違う。飛走都市スカイレイルのスタジアムは全てが海に面しておりHSAが走る場所は海の上となつていて。

「さすが一流ライナーとなればテスト飛走にスタジアムごと借り切つちまうのか」

クリュウは感動に近いため息をこぼす。

「よく逃げずに来たわね」

スタジアムの上段でアイザが仁王立ちをしている。

「あつたり前だろ？。」こちは昨日なんか興奮して寝れなかつたつていうのに」

「まったく、子どもねえ」

実年齢と背格好を見ればアイザにそう言われるのは普段であれば文句の一言も出るであろう。

だがクリュウは目の前のRBを前にアイザの軽口こまくじらを立てる気も起きなかつた。

「……お嬢様」

いつからそここいたのか、アイザの横にはいつの間にか執事であろうかピリッとしたタキシードの青年が立つていた。

「あら「ゴンド……遅かつたじゃない」

「はつ。お嬢様のHSA、『スカイ』を整備してからこちらに向かいました所、遅くなつてしましました。申し訳ございません」
身なりもそつだが、今のアイザからは優雅さの様な物が感じられる。

「そつ、じゃあ『スカイ』を彼へ。準備なさい」

「お、お嬢様、今何と！」

執事の「ゴンドは驚嘆とも言つべき顔を浮かべた。

HSA ^{ハイサ} 大空の名を冠する《スカイ》といえば、天才ライナー・
アイザの愛機である。彼女をライナー界の頂点に押し上げたと言つ
ても過言ではない。

「お嬢様、それはあんまりです。お嬢様の《スカイ》をこんな野良
犬に貸し与えるなど」

これにはさすがにクリュウもむつとした。だが彼らの会話にクリ
ュウが口を挟む余裕はなかつた。

「お嬢様は《スカイ》に乗つても最速です。今更何を……」

「ゴンド、あの子はね……もうあたしについて来れないのよ。だか
らあたしは《ホープ》を作つた。だから、あたしは《スカイ》を降
りて更なる高みを目指す」

「もしそうであつたとしても、何も別の輩を《スカイ》に乗せなく
ても」

「ゴンドは食い下がらない。《スカイ》を貯蔵するよう説得する。
なんて、HSA ^{ハイサ} を愛している人たちなんだろう、クリュウはそう
思う。ゴンドは、アイザと共に天駆けた友を汚されたくないそう思
つていることが分かる。濃い日々をともにしたモノだからこそ他の
者に乗つて欲しくない。そう言つ気持ちはアイザには無いのだろう
か。」

「ゴンド…… HSA ^{ハイサ} は走る為にあるの。もしこの試合で《スカイ》
が壊れてしまつても、あたしも《スカイ》も後悔はしない」

アイザは言い切る。

「それにね……」

クリュウは背がビクつと震える。

クリュウとアイザの目がぶつかる。

「あたしが乗る性能は上でも不完全な《ホープ》と、性能が下でも
調整が完璧な《スカイ》。いい勝負になるかもしれない、そう思わ
ない？」

アイザはクリュウを挑発する。

そこには、

お前の腕など考慮するに当たらない

と、

「Jの飛走が2RBらしいものになつたとしたとしても、それはお前の腕ではなくHSA^{ハイサ}の性能によるものだとそう言つているように感じられた。

「……上等だ」

小声でクリュウは呟く。

この2RB……ただのテスト飛走では終わらせない。アイザの一言が、ただ子どものよつこはしゃいでいた、クリュウの心に火を付けた。

『いいか、余計なことは考えるんじゃないぞ……』

HSA^{ハイサ}『スカイ』の操縦席。外からの通信でアドウがそう言つ。アドウは、クリュウのいつもとは違つ雰囲気を感じ取つたのだろうか、何度も釘を刺す。

『いいか、このテスト飛走は『ホープ』の性能、ならびにEOM^{エオム}の精度を確かめるためのもんだ。だから、テメエはただ『ホープ』の前を走つていればいい』

「わかつてるよ」

そう口では言つものの一度点いた火は中々消すことは出来ないし、消そうとも思わない。

『準備はいいかしら?』

「ああ」

スタート前の背中を電流が駆け巡るような独特的の緊張感をクリュウは感じる。

『シフト カラーズ』というスタートの合図を前にその一瞬が長くも感じ、また短くも思つ。

電光灯に明かりがともる。赤が青に変わった瞬間に2RBは始ま

る。

HSA^{ハイサ}を動かす為の　自分の意思を伝達して動かす操縦石に当てた手が汗ばむ。

この瞬間何度もアカデミーでテスト飛走で体感したが慣れることは無い。こと、今回に至っては、いつも以上に緊張していることがクリュウ自身良く分かっている。

信号が　青に……

『スカイ』の視界を現すモニターに” GO - Shift C O L O R S ”と記される。

「シフト！カラーズ」／「シフト、カラーズ！」

2人の声が響いた。

互いのHSA^{ハイサ}が動き出す前に、海上に2本のスカイレイルが引かれる。そして動き出す同時に、

『火速　ブーストアップ！…』

クリュウのEOM^{エオム}を発動させる詠唱が聞こえた。

「なつ！？」

これには百戦錬磨のアイザも驚いた。2RBは確かに高速で一見するとスピードを競う競技に思える。だが実際、競技者ライナーからすれば印象は異なる。一瞬で追いつくことが出来るHSA^{ハイサ}の性能、もしくは『スカイ』が使用したような瞬発的に加速を行うEOM^{エオム}をえあれば極端なスピードは必要無いのである。

この火速のEOMも通常ならば『スカイ』に搭載された剣で接近戦を行う為に使用することが殆どであった。

HSA^{ハイサ}にはクラスと言つものが存在する。これはそれぞれのHSA^{ハイサ}の戦闘スタイルに合わせて、接近戦に特化した”ファイター”、相手の攻撃を防ぎその隙をカウンターで狙う”ディフェンダー”、EOM^{エオム}による攻撃を重視した”ソーサラー”に分類される。それぞれのクラスにあつた武器を装備している。

『スカイ』は分類上、『ファイター』に値するが、実際はどんな戦闘も可能とするオールラウンダーな性能を持っている。

『スカイ』は、先手で加速を駆けたことにより、"逃げ"に徹していることが分かる。

2RBでは前を行く者は、不利となる。これは、ドッグ・ファイトという名前からも分かる。前を行くモノは獲物、後を追うモノが捕食者なのである。

前を行く者が"ディフェンダー"か"ソーサラー"なら状況は違うが、"ファイター"が前を行くのは理に反している。そもそも、"ディフェンダー"や"ソーサラー"は加速のEOMを搭載していること事態が稀なのだが。

"ファイター"が前に行くことに不利がつくのはこれだけではない。"ファイター"は接近戦を得意とする故に、重要なのは武器を抜いて切りかかるまでのスピードである。これは、それまでに走ったスピードを生かしたり、EOMを用いてスピードを底上げするという2つの方法がある。この通り、後方のHSAは敵に攻撃するのにその分のスピードを無駄にすることが無い。だが前方のHSAは、反転しなくてはいけない。これは、今まで走ってきた距離を無駄にすることになる。2RBのHSAはそれほど長距離を飛走することは出来ない。距離を走ればその分燃料を消費し、EOMを使えば燃料を消費しただけ更に走れる距離が短くなる。

だからライナー達は戦術に気を使う。それは、空のスカイレールとなつて現れる。戦術に考えがなくい者は引くスカイレールが乱雑である。それを引く者を揶揄する、"スペゲッティ・タクティクス"というような皮肉めいた言葉があるくらいだ。

あれだけ炊けつけておいて、それでもテスト飛走に徹しこのよつな戦術を取るのならば、

(つまらないヤツ……見込み違いだつたかしら)

アイザは前を行く『スカイ』を見てそう感じた。

「よし！！」

クリュウは手ごたえを感じていた。

（すごい機体だ）

決して新しい機体とはいえない《スカイ》。だが、幾度と無く改修を繰り返してきた《スカイ》からは洗練された性能を感じた。

（お前、すごいよ……だけど）

《ホープ》の性能は《スカイ》より更に上を行つていて。

それは、近くで《ホープ》の組み立てに携わったクリュウ自身良く分かっている。同じゼロからスタートしたのでは、《スカイ》が《ホープ》の前を行くことは不可能であった。

（《ホープ》の売りは、燃費の良さ……そして加速性能）

（だけど、こちらとこちらではHSAの経験が違う）

HSAにはライナーをサポートする”OS” オペレーション・システムというものが搭載されている。これは瞬時の加速、そしてEOM使用に消費するエネルギー等を経験に基づいて算出、実行するものである。OSの精度が経験に関係する分、まつさらな《ホープ》に対して《スカイ》には分がある。

だが弊害もたしかにある。乗っているライナーが違う分、すぐに思つたような行動を取つてはくれないのである。

先ほどの火速のEOMもそうであった。本来ならばあれほど距離を離す必要はなかった。これはアイザの戦術に影響されているのであろう。

（コイツにあつた戦術を取らないと）

クリュウは次の行動に移す。

《ホープ》に接近させない。中距離を保つ。そのために、スカイレイルをHの字に描く。

《スカイ》が《ホープ》に優っている部分がもう一つある。

それはペンドュラム機構というものを搭載することで、ローナリ

ングを得意とする部分であつた。

通常であれば、現在の『スカイ』のスピードのままの字に「一ナリングするのは自殺行為である。

これは、スカイレールの上を飛走する文字通りの綱渡りである。

「曲がれええ！」

腹部のコックピット部分が横に倒れる。

ちょうどそこへ『ホープ』のスカイレールが横に引かされた。

『スカイ』と『ホープ』はすれ違うように入れ違つた。

『曲がれええ！』

そんな声と共に、『スカイ』は後方へと走り抜けていった。

「そう……そうよ。それがその子の正しい乗り方よ！」

アイザは歓喜した。

まさか『スカイ』をそのように乗れる者が他にもいたとは思わなかつた。

（面白い……面白いわ、クリュウ！）

クリュウは決してつまらないライナーなどではなかつた。

アイザはここ最近感じてこなかつた、強敵との対決に興奮を感じた。

（でも、ここまでテクニックを持ちながら何故逃げるの）

『ホープ』はスピードを殺さないよう大きな弧を描いて曲がる。

『スカイ』はそれに同調させるように再び 今度は直角にコーナリングする。

（もう、逃げさせなんかしない）

アイザは『ホープ』を『スカイ』と平行に飛走するように走らせる。

（貴方はあたしの背格好は知らないても、あたしのRBは見て來たのよね。さあ……どうするの？）

『ホープ』は『スカイ』の後継機、同じくオールラウンダーに戦

えるようになつてゐる。

(つまり”ソーサラー”の真似事ぐらい出来るのよ)

(まずい……)
『スカイ』と『ホープ』の位置関係。今のは”ソーサラー”の攻撃態勢ともいえる。アイザは『スカイ』を駆つて過去に何度もこの態勢からE₀Mを放つてゐる。

(来るか?)

中盤でこの態勢に持ち込まれると……特に今のアイザは危険だ。『ホープ』は『スカイ』よりもオールラウンドに戦える性能が向上している。この状態で打ち合つても勝ち目は無い。

『炎射 ショートフレイム』

詠唱と同時に『スカイ』に向かつて小さな炎が飛んでくる。

(これはブラフだ)

クリュウは瞬時に察知する。

これを避けたと同時に、避けた地点に向かつて伸びたスカイレールから飛走する位置を予測して、強力なE₀Mが飛んでくる。

考える時間は無い。

クリュウは『スカイ』を曲げる。

でも、ただ曲げるのではない。

スカイレールが前もつて螺旋状に上へと……そう描く。

”スパイラル・アップ” この飛走はそう呼ばれている。

本来儀礼用の見せる飛走技術であつた。アカデミー在籍中に幾度と無く挑戦し出来るようになつた。2RBである以上この飛走はスパゲッティ・タクティクスと言わざるを得ないだろう。そしてこのスピードで螺旋状に昇るのは至難の技であつた。

さすがのアイザも意表を付かれたのである。 ”スパイラル・アップ” によって2打目のE₀Mを交わすことには成功した。本来であればこれほど強力なE₀Mを使用した以上、HSAは減

速するものである。だが、『ホープ』にはそれを補う機構が搭載されている。

それは”ハイブリット”と呼称されていた。HSAの車輪部に電魔駆動のモーターを設置しているのだ。通常は魔油によるエンジン駆動で『ホープ』は動いている。だが、今の状況のような火のEO^{エオ}を使用し、エンジンに再び火が灯るラグを電魔駆動によつて補うのだ。このときの電魔駆動のエネルギーはエンジンによつて走ることで発電される為に、一つの機関を動かす為に燃料を一つしか積めないという、2RBのルールに違反することも無い。

『やるわね』

アイザがクリュウを賞賛する。

『さあ、上を取つたつことは攻めてくるんでしょう』

「当然」

今度はクリュウが攻めに移る番である。

2RBでは上位を取つたものが攻撃の際に有利になる。これは下つて攻撃をする際に慣性の法則により速度が増すからである。また、下ることによつて消費するエネルギーも抑えることが出来る。

故に2RBにおいてライナー達は互いに上を指し、そして上を取られないように飛走するのである。

アイザの意表をつき、上を取つたクリュウは今有利な立場についていた。

後でアドウに怒られるかもしれない。

それでもクリュウは剣を抜く。

『ホープ』も迎撃する為に剣を抜いた。

『スカイ』が下降を始める。

アイザであればここで剣撃をおとりにしてEOMで攻撃を仕掛けるのである。OSもEOMの使用準備を完了している。

だがクリュウは 使わない。

純粹に剣撃のみで仕掛ける。

こちらに向かつて昇つてくる《ホープ》が避けるには機関で加速するにしろＥＯＭを使うにしろ労力が必要になる。

『火速 ブーストアップ！！』

《ホープ》はＥＯＭを使って加速した。

《スカイ》と《ホープ》が交叉する。

金属どうしがぶつかる、火花を散らす、音を鳴らす。そのまま鎧迫り合いをするでなくお互いは切り抜けた。そして立場が逆転する。

《ホープ》が上位に立ち、《スカイ》が下方にいる。

『甘いわね。攻撃が甘すぎるわ。せっかくな有利な状況を無駄にしたわね』

「クツ」

確かに、《ホープ》にほとんどダメージを与えることが出来なかつた。出来たとすれば、《ホープ》にＥＯＭを使わせたぐらいであつた。確かに《ホープ》は《スカイ》に対抗する為に多量のエネルギーを消費したであろう。だがそれまでの飛走を鑑みると《スカイ》の方が多量にエネルギーを消費していた。

実際、下る時には《スカイ》の燃料は残り30%を切つていた。クリュウはこれ以上を下らせないように舵を切つた。

『早い、早すぎるわ』

（あー！）

クリュウはここで始めて自ら飛走ミスを犯した。

舵を切るのは上位の相手が舵を切るのを見てからで良かつたのだ。下位が先に曲がればそれに合わせて、上位の相手もそちらに曲がる。これは決定的なミスであつた。

《スカイ》が先に舵を切らなければ、アイザは昇り続けることしか出来なかつたはずであつた。

《ホープ》が下り始める。

《スカイ》には先ほど《ホープ》が行つたような芸当は出来なかつた。

それを行うほど燃料が、無いのだ。

ここで加速してもあまり意味は無い。

クリュウには剣を抜き相手を迎撃つ他なかつた。

『雷装 エレ・エナジー』

ここにきて『ホープ』は下る際に駆動を雷魔駆動に変えていた。当然E.O.Mも雷属性に変わつてゐる。

『ホープ』の刃が雷を帯びる。

『ホープ』が剣を『スカイ』はそのままの剣で受け止める。剣を通して、電気が『スカイ』にダメージを与える。それだけでなく、『スカイ』の剣にヒビが入る。

(まずい!!)

クリュウは、瞬時にE.O.Mを使つよつにOSに指示を出す。想定されていなかつた分、少しラグが生じたが……E.O.Mが使用可能になつた。

「火速 ブースト・ブースター!!!」

アイザは鍔迫り合いになることを想定したのだろう。剣を押す力が増した。

だが、

『に、逃げた!!!』

クリュウは剣を捨てて、ブースト・アップより優る瞬発力で離脱する。

(何故、ここに来て逃げるの!?)

本来あの場面であれば、ブースト・ブースターによつて鍔迫り合いに持ち込むのが正しかつたはずだ。

『ホープ』の電魔駆動もアイザが思つたより性能が低く、馬力が出ていなかつた。

ブースト・ブースターは瞬発力が高い分、その加速時間は短い。逃げるには使うしかなかつたとはいえ、どうして、倒すという選択

肢を行わないのか……。

アイザは悪寒に近いものを感じる。

(何！－何をしようとしているの？)

長年の2RBにおいて感じたことの無い嫌な予感をアイザは感じる。

『火速 ブースト・アップ！－！』

(ここにきてまた、火速ですって！？)

『スカイ』に乗っていたアイザだからこそ分かる。『スカイ』の燃料は、その飛走距離を考えるにもう底を尽きかかっている。

それを分かつていながら、クリュウはEOMを使用した。温存するのではないという露骨な選択をした。

アイザはありえない1つの勝利条件が頭に浮かんだ。

(まさか……オーバーラン……)

オーバーラン 2RBにおいて定められた距離を走りきることによって勝利するということを意味していた。だが現在において廃れていた勝利条件でもあった。元々、お互いに力が互角であり勝負がつかなかつた際にこの距離を走りきつた者を勝者としよう、と制定されたルールであり、超攻撃力、短期決戦が主流の現2RBにおいて、この勝利条件を満たした者はここ十年いはずである。

もし、初めからオーバーランをクリュウが目的としていたのならば、最初の走り方からして合点がいく。

「それは……！」

エンジンに火を灯し『ホープ』がスピードを上げる。

「させない！！！」

EOMを使用し、最後の攻撃を仕掛ける。

燃料が底をついた『スカイ』は攻撃を防ぐ手段も無く、脱線し、海に墜落した。

「お嬢様、お見事でした」

『ホープ』を降りた、アイザは汗だくであった。

見ていた立場からすれば、それほど接戦したようには見えないのであろう。アイザの疲弊している様子をみてゴンドは不思議そうな表情をしている。

「……データを」

「はい、こちらに」

ゴンドはすかさず『ホープ』の飛走データをアイザに手渡す。

「これじゃないわ、『スカイ』との戦闘データは！」

「それは……ございません。申し訳ございません」

本来これは、『ホープ』の飛走テストである。旧機のデータは取つているはずが無かつた。それでも、主の期待にこたえられなかつたことを悔いゴンドは真摯に頭を下げる。

アイザも当たり前のことに気がつき冷静になる。

（危なかつたわ、本当に後数メーヤで……オーバーランだつたかもしない）

見れば引き上げられた『スカイ』からクリュウが降りてきているところだつた。『スカイ』はボロボロでこれではゴンドの言つとおり表面だけ直して貯蔵するしかないかもしれない。降りてきて早々クリュウは、アイザと出合つた当初のように頭をぶたれていた。

だが、彼の表情には悔しさのようなものが浮かんでいた。

（正面から……しかも、ヨー・アイザに……しかも、オーバーランで勝ちに来ようなんて）

ギャアギャア騒いでいる工房の一面を見ながらアイザは思つ。

（面白い、なんて面白いヤツなの、クリュウ・イワサギ）

アイザは堂々たる舞台で、クリュウが駆る彼のHSA^{ハイサ}と戦いたい。

そう思つた。

空を走れ！！（後書き）

いきなり2話投稿です。

今回はバトルシーンまで、連続で投稿しました。

楽しんでいただけたら幸いです。

今回2個目のオリジナル小説になります。練りに練ったネタを放出した形となりました。ジャンル的にも前作よりも受け入れられやすい物になっていると思います。

これからよろしくお願いします。

(HSAはキレイ)^{ハイサ}

油臭い工房^{ハイサ}通りながら、サリナはそう思う。
サリナはHSA^{ハイサ}が嫌いだた。はたから見ればありえないことかもしれない。サリナほど、子どもの頃からHSA^{ハイサ}に関わり続けた者もいないだろう。

「嬢ちゃん、おかえり！」

工房の古株、ハタが学校帰りのサリナに声を掛ける。

「ただいま、ハタさん」

この工房で働く人は皆親みたいなものだつた。でも一人だけ気に入らない者もいる。

(ライナーはもつと嫌い……)

最近、この工房で働き始めた……HSA^{ハイサ}の話となると、子どもの様にはしゃぎだす少年。サリナは彼が喉に刺さつた骨の様に感じていた。

「……いい機体ね」

サリナはハタにそう言った。

嫌いでも、子どもの頃からHSA^{ハイサ}ばかり見ると自然と見る目も養えて来る。

「だろ……いいHSA^{ハイサ}だよなあ！」

サリナの言葉に、ハタではない少年が口を挟む。

「……」

「いいなあ、こういうHSA^{ハイサ}が欲しいなあ」

少年は目を輝かせてそう言つ。

(この目……)

何か、面白くない。

「うん、どうした?」

少年は話を中断してサリナの様子を伺う。

「……フン」

「サリナはまるで少年が目に入らないかのように工房を後にする。
「私は、HSAもライナーも大っつ嫌い！」

「なんだってんだよ」

捨て台詞を残して去つたサリナに対してクリュウはさういほす。

「……ボウズ、サリナちゃんに嫌われるなあ」

ハタはクリュウを哀れむ。

「あんなにいい娘が、なんでボウズだけを……ハツ……」

ハタが何か思いついた様だつた。

「……ボウズ……お前、嬢ちゃんに何か疚しいことしたんじやねえ

だろうな！」

「いや……」

「テメエ、俺の孫……いや子どもみてえな嬢ちゃんに手を出してみろ！！ 三途の川を3回渡してやる」

工房の面子は皆サリナを猫可愛がりしていた。だから、何かあつた時には誰もが必ず気づく。

「誤解だ！！ なんでオレがあんな奴を……」

「あんな奴……だと……」

「しまつた！！」

これは失言だつた。

「テメエ……嬢ちゃんのどこが気にくわねえつんだ！！」

「オレにどうしろつていうんだよ！！」

クリュウはハタに胸倉を掴まれながら思わずそう叫んだ。

「相変わらず、ここは賑やかね」

そんな騒ぎの中、上品な声が工房に響いた。

「おお、いらっしゃい」

「どう？ 調整は」

アイザがHSAに乗る時とは違う、お嬢様然としたドレスとも取

ハイサ

れる私服姿で現れる。

「バツチリでさあ。とはいっても御嬢の方が絶好調だがな」
アイザは《ホープ》に乗り換えて以来、素晴らしい戦果を上げて
いた。中には2RBにならなかつたとすら言われる試合も多々ある
ほどに。

「そうね。この子は最高ね」

アイザは満面の笑みでそう言った。

その笑みがチクリと、クリュウの心に刺さつた気がした。

「どうしたの？ ムツとした顔して」

アイザがクリュウの顔を年相応の表情で覗き込む。

「なんでもねえよ……」

クリュウはアイザから視線を逸らす。

「御嬢、コイツあさつき女に振られたばつかでね」

ハタが、クックと笑う。

「あら、まあ」

冗談と分かつて、アイザも笑う。

「違げえよ！――！」

だがクリュウは大声で怒鳴つた。

ハタもアイザも目を大きくして驚いた。

「チツ」

クリュウはバツが悪くなり、その場を後にする。

「なんだかなあ……」

クリュウは一人になつてそう漏らす。

最近アイザは、よく工房を訪れる。《ホープ》の調整として何度もアイザは工房にHSA^{ハイサ}を持ち込んだ。その度にクリュウはアイザと相手を行つた。

その度に自分でお金を出すことなくHSA^{ハイサ}に乗れて、しかも報酬を多く貰えた。

だがそれなのに、最初の《ホープ》と《スカイ》の2RB以来、回を増すごとにHSA^{ハイサ}に乗つても満足することは無くなつてしま

まつていた。

「はあ……」

クリュウのため息は増すばかりであつた。

ハタとの会話後アイザはアドウの元を訪れた。そこにはゴンドの姿もあった。

一
おお
御嬢上

アエリ、アエリヤを見てセハエ、と手を振る

アトガと二ントはせんべと決算をしてしる様子であつた。それも普通の光景とは大分違つた。

「ですから、受け取ってください」

伊豆を渡り、多めに費用を支度するが、この間、伊豆の

ପାତାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

そのように立場が逆転していった。

「御嬢、これは受け取れねえよ

最後にアドウは、アイザに向かつてそういった。

「そう……、確かに、これは貴方のブレイブを傷つけるものだつたつよ。」

アイザイの真摯

「そんなんじやねえんだよ。これはただの下らない老人の意地なん

九

「それはそうと、調子いいじゃねえか」

アドウは話題を変える。

「アーッ。やうなのよ。あの子の走りつけたり……くうくう

!

身悶えるようなアイザの素振りにアドウと「ハンドは苦笑する。「調整は完璧。テスト飛走の相手も悪くない……いや、そこら辺の

ライナーに比べれば格段に上……」

そう言つた所でアイザはハツとする。

「そりやあ、最近の彼おかしくないかしら？」

付き合いが長い訳ではないがアイザが抱くクリュウの印象は、常にHSAの前では子どもの様にはしゃいでいる少年だった。ところが最近の彼は、まるで膨らんだ風船が張り裂けそうな……、そう感じていた。

「そりやあ、そうだる」

アドウは既に理解しているようであつた。

「どうして？」

「おめえさん自身がHSAハイサに乗れるが2RBハイサが出来なつたらどう思つ？」

そんなこと考えられる訳が無い。

「何をバカな……あつ！」

その訳が一瞬で氷解する。つまり、彼は目の前に入参をぶら下げられた馬状態。HSAハイサには乗つているのに2RBに出れない、だから気持ちが空転してしまつていてるのだ。

「と、とんだHSAハイサ馬鹿ね。しかも、ガキじゃない」

自分の気持ちも律する事が出来ないなんて、とアイザはクリュウをそう評価した。

「ブツ」

するとアドウが噴出した。

「ハツハハハハ！」

それはもう、部屋中に響く大声だつた。

見ればゴンドもアイザから顔を逸らして口を隠して、笑つてゐる。

「な、何よ……」

アイザはむくれた。

「ヒツヒビ。いや……腹が……揺れる」

苦しそうにアドウがそう言つ。

「元祖お子様HSAハイサ馬鹿のおめえさんがそれを言つたか。はつはつは

は

アドウの爆笑はしばらく収まりそうになかった。

アイザが再び飛走都市を離れて、何時もどおりの工房のある田、
「…………ってーーー！」

アドウの怒鳴り声と共にゲンコツがクリュウの頭に落ちた。
「テメエ、今日何回田だーー！」

余りにもミスが立て続けアドウが鉄槌を下したのであった。
「もういい、オメエは明日来るな

（ク、クビー？）

クリュウはこの世の終わりが来たように落ち込む。
「何おちこんでやがるんだ。久々の休みだろうが、羽を伸ばして来

い

「え…………は…………ははは、休み…………か」
ホツと胸を撫で下ろす。

「なんでも中古のハイサHSA市があるらしいじゃねえか。そこにでも行
つて自分の身の丈でも理解して来い」

アドウは戒めるつもりでいつているのだが、等の本人は、
「親方、それ本当ーー？」

飛び上がらんばかりに浮かれていた。

（そりかー中古かー）

中古のハイサHSAならひょっとすれば手が届くかもしれない、そうクリュウは心躍らせた。

で、翌日。

「「」「、ドコ？」

クリュウは、街の中で迷っていた。

飛走都市スカイレイルは、大きく分けると工業区、居住区、スタジアム区と3つに分けられる。それぞれ3つは迂回することなく行

き来が出来る。

だが、今回HSA市^{ハイサ}が行われるのはスタジアム区と居住区の間のイベント開催であった。

居住区を通つて、イベント開催地にショートカットしようと思つた末の悪策が裏目でた。

思つてみれば、クリュウはこの飛走都市スカイレイルに来て以来、工業区とスタジアム区以外行つたことがなかつた。

ものの見事に迷子だつた。地図を片手に歩いているものの、居住区はレンガ造りの2～3階の建物が入り組んでいるのでまったく頼りにならない。

「キヤツ」

「うお！」

地図にばつかり目がいつてしまつた為か、曲がり角で人にぶつかつてしまふ。

「ご、ごめん」

「どこ見て……つて新入り！？」

ぶつかつた人物は、顔見知りの少女であつた。この人物がクリュウにはこの瞬間神にも見えた。

「さ、サリナちゃん……」

「うわ、何泣いてるのよ……」

突然涙を浮かべた、クリュウにサリナは動搖した。

「道に迷つたつて馬鹿じゃないの」

サリナはそう言つて切り捨てる。

そう口では言つもののサリナは学校帰りだと言つのにきちんと道案内をしてくれていた。どうやら学校は今日午前中で終わりだつたらしく、それにクリュウは救われた形になつた。

「なんだつて私がHSA^{ハイサ}なんかのところに……」

そういうサリナの後ろ姿は、明らかに不満に満ちていた。クリュウはそう言つサリナに一つの疑問が浮かんだ。

(どうして、そんなに HSA を嫌うんだらう) サリナはアドウの孫である。もし自分が常に HSA と関わる環境にいたならば嫌いになる要素は全くない。

「どうして、サリナちゃんは HSA が嫌いなんだ?」
聞いてみるが、

「……」

無視されてしまったようだ。

「ほら……着いたわよ」

明らかに、嫌々案内しました、と言つた態度でサリナは言つ。

「うおおお、すっげええ!!」

見ればそこは、HSA だらけ。^{ハイサ} クリュウからすれば天国の様な場所であった。

「もういい? 私は帰るけど

そう踵を返そうとする。

「待つて!」

そういうクリュウは、サリナの手を掴んだ。

「ちょ、な、何よ」

「帰り道……分からない」

サリナに案内されている間、考え方をしていたので道順などまったく覚えていなかつたクリュウは縋り付く。

「分かつたわよ!! 待つてればいいでしょ!!」

サリナはヤケクソ氣味にそう言つた。

(ハア……子どもは良いいなあ。お氣楽で)
サリナはベンチに腰掛けて頬ずえを付く。

正直こんな所にいたくもなかつた。

(でも放つて返つたら、じいちゃんに何言われるか分かんないし)
クリュウといえば先ほどから色々な HSA を見て回つては大はしゃぎをしては落ち込んでいる。

すっごえ、このHSA^{ハイサ}欲しい！！

そして、

「 ゲエー！！ 高けえ……

(大方、そんなとこなんだらうけだ)

その姿は挫けては立ち上がる、まるでダルマのようだつた。

「ふつー、女子一人おいてうるちよるする？」「

ぼそつと愚痴がこぼれる。

見れば意外とカッフルも多い。平田と叫うこともあり、RBが行

われないので、こういうとこしか見るとこりがないのかもしれない。

(ああいう、甲斐性の一つでも見せればいいのに)

見れば制服を着たカッフルが仲良さそうに歩いている。

「いやいや、ムリムリ」

一瞬、クリュウとそうして歩いている姿が田に浮かんでその光景を、一蹴した。

「あ、喧嘩してゐる」

サリナが少し田を離した隙に、さつきまで仲が良かつたカッフルは瞬時にして仲違い……お互い背を向けてしまつていた。

(所詮恋愛^{ハイ}こか)

ふつと、分かれた娘の方と田が会つ。

「あれ、サリナやないか～。どないしたん、こんなとこひど」

「なんだ、ソラか」

それはクラスメイトの一人だつた。

「なんやん、珍しいなあ」

「それより、いいの？ 彼氏放つておいて」

「ええのええの、どうせ頭冷やしたら帰つてくるやう」

ソラはあつけらかんと笑う。

「なんや、HSA^{ハイサ}のライナーになりたい、喧^ケうから、アンタならなれるんぢやう？、つて言つたら急に怒り出しちもつてな。難しいなあ、男の子は……」

「男子なんて皆ガキよ」

クリュウを思い浮かべてそう。」

「そこが可愛いやんか」

ソラがそう言つ意味は、サリナには全く分からなかつた。

「もういや、サリナはそういうことに興味ないん？」

「別に……」

「でも、……ほら、あそこで男の子がひたひた向かつて手を振つと
るよ」

サリナが顔を上げればクリュウがこつちに向かつて手をブンブン
と揺らしていた。

顔色が変わつたのをみて、ソラがちやかす。

「やっぱ、アンタも虫付きやつたんやないか。ほら、手を振りかえ
してあげな」

「違う違う、そんなんじやないって」

本当に違うのだから、サリナは焦る。

「あれは……その……そつ、飼い犬の散歩みたいなもんよ」

祖父が雇い主なのだから、間違ひではないだろ。

「うわっ！ ワンワンプレイかいな。やるやん、サリナ。そないな
風には見えんかったわ」

「わわわわ、違う違う違う……」

クリュウとサリナは年も似ている。考えて見ればそつそつ風に取
られてしまつてもしかたがなかつたかもしれない。

「それより、ええの？ 行つて上げなくて？」

「だから、違うんだってば……」

いい加減にしてくれ、そつサリナは思つ。

「うわ！！ なんかグラサン掛けたのが、一一ちゃんと話しかけと
るで、行かなくてええん……？」

ソラのその言葉にサリナも目を向けてみれば、クリュウと似たよ
うな顔をしたサングラスの男がクリュウと話している。

「い、いいのよ。犬なんだもの、自分で勝手に何とかするでしょ」

サリナはフイフイと顔を背けた。

(知らない、知らない……)

そう無視を決め込むつもりでいた。

「ほ、ホントにええん? ニーちゃん懐から札束取り出したで……」

その言葉を聞いて、サリナは全速力で駆け出した。

「おひ、任せとせな」

「頼んだぞ」

クリュウはすっと手を離す。

そこへ、

「どりゃあああ! ! !

そんな張り上げ声と共に、クリュウに向かつてドロップキックが飛んできた。

クリュウは悲鳴を上げる間もなく横薙ぎに飛ぶ。

クリュウが倒れこむとその上に馬乗りになるようにサリナが着地する。

「グフッ……」

「ちつ外した」

そうサリナが舌打ちする。

「なんだか分からんが、じゃあな……」

そういうとサングラスの男は背を向け逃げるように立ち去る。

「あ、こらー! ! 待ちなさい! !

そういって、サリナはサングラスの男を追いかけようとする。

「わわ、サリナ待ちーな。このニーちゃん白目向いとるでー。」

サリナの後を追いかけてきた、ソラがあわててそう言つ。

「ちょっと、何気絶してるのでー。早く追いかけないとーー。」

クリュウを掴みガクガクと振る。

「振つたらアカン! ! !

その場でクリュウが目を覚ます」とはなかった。

体のいたるところが痛い。頭部に鈍痛、腹部に激痛。クリュウはうつすらと目を明ける。

日はいつの間に傾いたのだろうか。空は赤く燃えていた。下は草むらなようだ。青臭い匂いがする。それでいて、首筋はほんのりと温かく心地よかつた。

痛いところを摩るような感覚がある。

「……サリナちゃん？」

どうやら、自分はサリナに膝枕をされていることに気が付く。あのサリナに膝枕をされていることに驚き、起き上がるうとする。「待つて！！」

サリナはそう声を出す。

実際起き上がるうとしただけで、眩暈がした。

「……もう少しあわつしていなさい」

「……ごめん……」

「なんでアンタが謝るのよ。悪いのは「みひつちよ」

サリナがふてくされた顔になりフイッと顔を背ける。「それにしても、なんであんなにお金持ち歩いてるのよ」「なんであつてそりや、HSAハイサを買つ氣でいたからさあ」「……呆れた。そんなんだからカツアゲになんか会うのよ」（カツアゲ？）

疑問に首を傾げそうになつて、頭に痛みが走つた。

「こら！！ 大人しくしなさい」

サリナはそう言つてクリュウの頭を戻す。

「……アレ、アンタの全財産でしょ？ HSAハイサを買つために貯めてきた」

サリナは悲痛そうな顔をしている。

そこでクリュウはサリナが勘違いをしていることに気が付く。

「サリナちゃん違うんだ」

「へ？」

「アイツ、あれ？ 名前なんつたかな、まあいいや。アイツ、タヌキってあだ名で呼ばれてる、昔なじみでさ。まあ、金にガメツイ男なんだけど、アイツがHSAハイサ譲つてくれるって言つてさ」
ようやく、痛みが引いてくる。少しふらついたが唖然とするサリナの膝から頭を上げる。

「それでも、ありがとう。心配してくれたんだな」
クリュウはサリナを立ち上がらせる為に手を出す。
「ば、ば、馬鹿じゃないの！？ 心配して損した」
トイツと顔を背けた。

「でも、心配されたってことは嫌われてた訳じゃないんだな。オレ、てつきりサリナちゃんに何かしたんじやないかつて……」

「き、嫌いよ。大嫌いよ！！」

サリナはクリュウの手を借りずに立ち上がる。

「……帰るわよ」

「ああ」

クリュウはサリナの後を追うように歩く。

「……ところで、新入り？」

「うん？」

「アンタ、HSAハイサを買つたつて置き場所はどうする気？」

「あ、つ！」

確かに6メーヤもする巨体その辺においそれと置いておけるものでもない。

「やっぱ、早く帰つて親方に相談しないと」

ひょつとしたら空いてるハンガーの一つぐらい借りられるかもしれない。

クリュウは早く帰るつと走り出す。

「ま、待つて。アンタ帰り道も知らないくせにどう帰るつもりよ！？」

クリュウとサリナは大声を出しながら家路に着く。

赤く燃える夕日が一人の間にあつた距離を少し縮めたようであつ

た。

こんばんは。

3話投稿です。『J覧になつてくださつた方、どうもありがとうございます』
いました。

ドラマの時からですが1話毎に新キャラを出す癖が抜けない気がします。

次回、とつとう主人公のHSA^{ハイサ}が登場です。

皆さんの感想をお待ちしております。

「きたきた」
HSA中古市でタヌキに会つてから3日後。タヌキに手配された配達業者が、輸送用の2機のHSAが貨車にブルーシートの掛かった荷物を運んでいる。

「あそここのトタンの建物に入れてくれ」
クリュウは、配達員に指示を出す。

指示を出したそこはアドウ工房の旧ハンガーである。元々廃材置き場となっていた一角をクリュウはアドウから借り受けた。もちろん無条件ではない。賃貸料は少しであるが給料から天引きされるし、工房の面子は誰一人として力を貸してはくれない、という条件の下であった。

だがクリュウは、燃えていた。元々、HSAに関することは中退したアカデミーで習つていたし、わずか半年ではあるがこの工房で働き、修理に携わっていた。

ハンガーに2機のHSAに持ち抱えられるよう、ブルーシートで覆われたクリュウのHSAが運ばれていく。

「よし、やつてやる」

運びこまれるHSAを見てクリュウは覚悟を決める。人生初の自分だけのHSA。これで心が躍らない訳が無い。

しかし、ここから始まる苦難にこの時のクリュウはまだ気がついていなかつた。

「お母さん！ 新入りの『ご飯は？』
「そこにあるわよ」

工房の一角には併設するようアドウとその家族が住む家がある。サリナは母親に言われた『ご飯をトレーに乗せる。

「あら、珍しいわね。サリナがクーちゃんに『ご飯を持つていくなんて』

サリナの母であり、アドウの義娘でありながらサリナと並んでも姉妹にしか見えないルリは、クリュウのことを「クーちゃん」と呼んでいた。

「別に……、ただアイツこっちにも戻つてこないからさ。もし餓死なんかしてたら、こっちが困るじやん」

「ブツ」

母は含み笑いをする。

「何よ！？」

「別にう。ただ、サリナが珍しくクーちゃんに優しいなあつて」

「もう、そんなんじやないんだてば」

HSAの中古市的一件以来皆が、サリナとクリュウはこのようにからかわれていた。ハタにいたつては、鬼の形相でクリュウを問い合わせていたほどであった。

当の本人クリュウにいたつては、HSAが到着して以来、仕事と自分のHSAの修理に追われ、下宿しているこの家には一切帰つてこない。そういう日々がもう5日も続いていた。

ただ、そういう彼を見ているとただの子どものような人物ではなかつたことを思い知らされた。HSAに向かつては一直線、よく言えば真摯であった。浮かべる表情はサリナがいつも見ていたような、子どものようなものだけでなく、とても真剣で言葉をかけることが躊躇われる。そんな様子も多々見受けられた。

（少しほは応援……つて訳じやなくて、協力してあげてもいいかな）

サリナは少しそう思つようになつていた。

「新入り！！ ほら、『ご飯ぐらい食べなさい』よ

サリナが旧ハンガーにやつてきてクリュウを呼び止める。

「うーん、ああ」

クリュウはいまいち氣乗りのしない返事をする。

「ちょっと、新入り？」

「うお、サリナちゃん！？」

「なによ……」

サリナは膨れる。

「いや、いると思わなくて……あーびっくりした」

「わざわざ、晩御飯持つてきたのに、その間に草は何よ……」

「いや、ごめんごめん」

クリュウは平謝りをする。

「そんなにHSAの方が大事なの？」

「うーん、なんていうか早くコイツを動かしてやりたくてさあ」

クリュウは熱く語る。

「はいはい、HSA馬鹿はもういいって。ほら、洗い物片付かないから食べちゃいなさいよ」

クリュウは急かされて食事に手をつける。

その間にサリナは、クリュウのHSAを見てくるようである。

「ちょっと、新入り……これ本当に動くの？」

クリュウは自分のHSAに目をやる。

ハンガーに置かれているHSAは、確かにみすぼらしい。

HSAと呼ばれる人造機人はその名の通り、人の形をしてくる。と、いうよりもHSAは人の形をしていなければ動かすことは出来ないとする言われている。

「HSAつてや……」

クリュウは食事の手を止める。

「……実をいふと、直すのは恐ろしく簡単なんだ」

「え、そうなの？」

サリナは意外そうな顔をする。

「HSAを動かす為の技術つて言つのはもつ一世纪近く変わつていないんだよ」

「そんなの嘘よ」

HSAの技術は日々進歩している。そして常に現れる目新しい新技術が2RBのファン達を魅了する。それがHSAの魅力と言われている。

「普通そう思うだろ？だから、オレもこのことを知ったときは驚いたんだ」

クリュウは爛々として語る。

それに対してもサリナは面白くなさそうであった。

「もつたいくふらないで早く言いなさいよ」

「ごめんごめん。

HSAが、2つの力で動いているって事は知ってる？」

これは、HSAに関わる人間でしか、知らない知識かもしけない。実際、サリナも疑問を浮かべた顔をしている。

2RBのルールにHSAにあらかじめ搭載する動力源は一つでなくてはいけないと定義されている。これが誤解を招く一つの要因となっている。

「それじゃあ、サリナちゃんはHSAを2つに分けるとしたらどういとどこで分ける？」

「そうね……人の形をしている部分と車輪かな」

サリナのいうその回答は正解であった。

「そうその通り。そしてね、普通の人はA110y部分……って人の形をしているところが重要だと思うだろ？でも、そうじゃないんだよ。一番重要なのは、車輪を動かす為の動力なんだよ」

「どうして？走っているのはそのA110yの部分でしょ」

HSAは確かに、空を滑走する。だが走っているのはA110y 人造機人なのは変わらない。ローラースケートに乗っている人間とスケートどちらが走るのに重要かと問われれば、もちろん人間だろう。

「でも、そこが違うんだよ。HSAには、魔油液と呼ばれる一般的なディーゼル機関と最近登場した魔雷駆動の電気機関があるだろ。この2つが違う点はどのエネルギーで車輪を動かしてたかってだけ

なんだ

「つまり、Allody部分の構造は一緒つてこと？」

「そりそり。」で、どうして動力と車輪を動かすことが重要かつて言うと、HSAのA110y部は実は車輪を動かすために作り出した時に生まれる、”魔素”^{まそ}という力によって動いてるんだ。

「これで分かってたでし。つまりHSAはエネルギーによって動力を生み出さないと”魔素”が生まれなくて、A110yが動かないんだ」

そうクリコウは、子どもが母親に新しい」とを発見したことを語るまつに喜んでいた。

「それなら、このオンボロ直すのも簡単なんじゃないの?」

「セリ一 セリなんだよ」

た。

一問題はそこなんだよ。何で動いてたのかまるで分からんんだよ
頭を抱える、クリコウ。HSAを見上げると、コレがただのHSA
Aで無いことがよく分かる。通常、2RBのHSAは軽量化に勤め
ている。これは、軽いほうが減速、加速が容易になるからである。
2RBは戦況が移り変わる競技があるので、身が軽い方がメリット
が多い。

それに比べてこのHSAはそこが違う。例えば”ディフェンダー
”と呼ばれるクラスのHSAは、相手の攻撃を被弾することがある
為、”ファイター”、”ソーサラー”に比べれば装甲が厚い。この
HSAはその”ディフェンダー”が鎧を着ているかというほど装甲
が厚かった。

それだけでなく、更に特異点とも言える部分がある。HSAの胸から腹の部分にかけて、動力部分 ここには全ての機体に動力が積んである。このHSA^{ハイサ}とて例外ではない。だが、その円筒状の動力部が明らかに飛び出しているのであつた。

この様なHSAをクリュウは見たことが無く、そのことでも3日も

の間、手を焼いていたのであった。

「あ！ ちょっと新入り！！ まだ『飯食べてないの！？』

「『めん』めん。今食べるから」

サリナに怒られ、クリュウは再び食事に戻る。

一通り食べ終わると、お茶を飲み、湯飲みをトレーの上に置いた。

「それにしても、サリナちゃんつてさ」

「何よ」

食べ終わつて一息ついた、クリュウは今気がついたことをサリナに投げかける。

「サリナちゃんつて、自分で言つほど ハイサ HSA が嫌い……つてこうなり、好きじゃなくないでしょ」

サリナはその一言で口を大きく開かせた。

「はつ！？ なんでそんなこというのよ」

「だつて、嫌いだつたらこんな話聞いてくれないだろ？ ほら嫌いじゃないじやん」

クリュウにとつてみれば、HSA も 2RB も嫌いになる要素はまったく無い。だから、このように好きなことを前提に考えてしまつ。「な、何を馬鹿なこと言つて……るのよ。私は嫌いよつ！！ ハイ HSA も……ライナーも……大つつ嫌い！！」

サリナは、食事を運んできたトレーを持つとまるで逃げ出すよつに立ち去つてしまつ。

バタンと思いつきり、ハンガーのドアを閉じられてしまつ。それはサリナの心情を表していよいよつであった。

それから、僅かに時間を置いて、

「ありやりや、クリュウ……おめえとんでもねえ地雷踏んだなあ」
サリナと入れ替わるよつにハタがやつてくる。

「ハタさん？」

「クリュウよ。おめえは餓鬼だから……なんつーんだつたか……
そうテリバーーが足りねえんだよ」

「……ハタさん……それを言つなら『リカシー』だろ」

そういうと問答無用でゲンコツが飛んでくる。

ハタもアドウより少し若いぐらいなのに、その力はその年を思わせないぐらい強く脳天に強く響いた。

「つたくよ！」

ハタはポケットから紙巻タバコを取り出すと火を付けた。

「なんでも、嬢ちゃんが最近おめえと仲いいから、心配になつて覗きに来たら……結局、嬢ちゃんは嬢ちゃんのままだつたな」

ハタは紫煙を吐き出し、なんともいえないような、いまいち感情が分からぬ顔をする。

「それにしても、どうやって嬢ちゃんと話出来るようになりやがつたんだおめえは！！」

そういうハタはタバコを地面に投げ捨てる、クリュウの首に腕を絡めて絞める。

「な、なんもして……て、ちょっと、ギブ、ギブ」

「HハイサS Aなんか買つてきやがつ、て……」

絞まつていた腕が急に緩む。

「クリュウ、おめえ……「オイツが何なのか分かつてるとか？」

「つ！！」

その言葉をクリュウは聞き逃すことが出来なかつた。

「ハタさん！！ 何か知つてんの！？」

「いや……まあな」

動力が分からなくて頭を抱えていたクリュウはその言葉に飛びつきそうになつた。

「あああ！！ でも、親方から工房の人に手助け貰うなつて言われてるんだよなあ……」

クリュウは再び頭を抱えた。

ハタは無言でクリュウと、そしてこの鎧色の壊身を眺めた。

「親方あ。入つていいかい？」

工房に隣接するように建つアドウ宅。ハタはクリュウのハンガーを尋ねた後、アドウに会う為に夜も遅いがアドウの部屋を訪れた。

「入んなあ」

肯定の言葉を受け、ハタは扉を開ける。

そこでアドウは一人で晩酌をしていた。

「ハタさん、久しぶりだなあ。まあ、ここに掛けなよ」

ハタが椅子に腰掛けると、アドウは机に置いてあつたもう一つのグラスをハタに寄越す。

「悪いね。これ親方の取つて置きだろ？」

ハタは瓶を傾けて、質の良い紫色の液体を自分のグラスに注ぐ。そして、グラスが空きかけていた親方の方にも注ぐ。

2人は、チントグラスをぶつけ合うとグラスに口をつけた。

「いやあ、年寄りになると小便も酒の切れも悪くなつていけねえ」

「はつは、違いない」

机上にある酒の瓶の隣にはいくつかの書類が置いてあつた。

「親方、これは？」

ハタが書類を手に取る。

それは、2RBの日程表であった。それも実力者が出るようなAランクやBランクの試合ではなく、Cランクのものであった。

ライナー達にはそれぞれ格付けされており、それはS、A、B、Cと分けられていた。Cランクとは、ライナーが始めに格付けされ、いわゆる出発点となるランクであった。そして、Cランクではもつとも多く2RBが開催されている。だがそれでありながら、実際ライナーの出発点となる2RB自体は少ないのが実情だった。

「今は、学校出て……そのまま学校が主催の試合にでてデビューするライナーが多いからなあ」

ではそれ以外の2RBがどうなつてているかというと、2RBの主催者自体がお気に入りのライナー達を集めたり、莫大な出走料が必要であつたり、知名度が必要であつたりした。新規のライナーには、とても門が狭いのである。

「年を取るとと、これがいけねえ」

アドウは嘆く。

「実力のある若モンを見るとすぐに応援しちまいなくなる。自分で手伝うな”、といつておきながら情けねえ」

アドウはグラスの中の酒を一気に煽った。

（親方……きっと、それだけじやねえよ）

その理由についてはハタもいまだに口にする気になれず、結局重く口を閉ざす。

だがそれとは別にハタはアドウに申し送らなければいけない、言葉があった。

「それは、そうと親方。アンタ、クリュウのHSAは見たかい？」

「いや、見てねえよ」

きっと、そうだろうとハタは思っていた。

「それなら、親方自身が助言してやつたほうがいい」

そのほうがクリュウも納得するだろう、ハタはそう考えていた。クリュウは変にHSAハイサに頑ななところがある。恐らくハタが言つても言つことを聞かないだろう。

「いや、絶対に行かねえ。アイツは実力がある分、今のうちに苦労しとくべきだ」

酒の入ったアドウは何時も以上に頑固であった。だがそれ以上にアドウには予感があった。クリュウはライナーとして2RBをした以上必ず何かをしでかす奴だと。実際、アイザとのテスト飛走を取つてみてもそうだった。実際にアドウは気がついていた、あの2RBでクリュウが何をする気だつたかを。

「……親方。一つ言つておくが、あのHSAハイサは走れない。そして絶対に勝てない」

ハタはそう断言する。

「馬鹿な。アイツなら4流、5流のHSAハイサに乗るうが勝てるだろ」クリュウは荒削りだが、Sランクのアイザ、Aランクのギトレーといった名だたるライナー達が持つような実力を秘めている。一度

その道に飛び込んだなら才覚を表すだろう、そりアドウは思つていた。

それに対しても、ハタはまったく逆の考えを持つていた。今、クリュウにあのHSA^{ハイサ}を諦めさせないと、その才覚を潰すことになりかねないと。

「なら言つがな、アイツが買つてきたHSA^{ハイサ}は……どいで手に入れたのか知らんがな、とんでもないものだつたぜ」

今度はハタが酒を一気に煽る。

「一目見てすぐ分かつた。あのオンボロは、”S系”だ。まったくどこで騙されて買ったんだか……」

その言葉を聞いて、アドウはあまりの驚きの余り言葉がでなかつた。

鎧色の壊身（後書き）

とうとうクリュウ専用機の登場です。
だが、その機体には様々な問題が……この後の展開にご期待ください。

ご意見感想を募集しています。

友人から1、2話の特に戦闘シーンが分かりにくいという意見を
いたいたのでこれに対する修正も考えています。これが単に修正
するのかそれとも新話で補うのかはまだ決まっていませんので決ま
り次第ご報告します。

現在主流になつてゐるHSA^{ハイサ}の原動力は2つある。

一つは、魔油液といわれる液体状の化石燃料を燃料とするディーゼル機関である。これは、略称として”D系”と呼ばれている。”D系”的HSA^{ハイサ}は現在もつとも主流となつてゐる。このHSA^{ハイサ}は燃料を燃やし、エンジンを駆動させるものである。そして、その過程で発生した”魔素”によつてA110yを動かすことが出来る。使用するのが化石燃料ということもあり燃料が軽く、沢山積むことが出来る。またD系が使用することが出来るEOM^{エオム}は火を用いたモノになる。

二つ目が最新技術を用いた、通称”E系”電気を用いた電魔駆動のHSA^{ハイサ}である。バッテリーと言われる貯電設備を用いることによつて燃料を用いるD系よりも軽量化に成功している。電気は、発見された当初”魔素”が発生すること無いエネルギーであつた。その為、近年までHSA^{ハイサ}の原動力として利用することが出来ない、とされていた。だが、魔油液等の”魔素”を含むエネルギーにて発電された電気には”魔素”が含まれていることが分かつた。この電気を魔雷と呼ぶ。

また、EOM^{エオム}がHSA^{ハイサ}の動力に依存するので、E系のEOM^{エオム}は電気となる。

魔雷を原動力とするE系HSA^{ハイサ}はD系に比べて優れている点がいくつある。それはD系に比べ、ラグが少ないことである。最もHSA^{ハイサ}の性能に差が出来るのが動力部分である。D系HSA^{ハイサ}が加速を行つにはエンジンに魔油液を送り込み燃料を燃やすことによつて加速を行う。それ対してE系は魔雷をモーターに流すのみで速度を生み出すことが出来る。この過程が性能の差を生みす。この僅かな差が勝敗に左右するほど2RBの世界は過酷であつた。

「S系だと……！」
アドウが目を開く。

D系HSA^{ハイサ}が生まれる前にもHSA^{ハイサ}は存在した。それは2RBと呼ばれる競技の黎明期でもあった。ライナーも、RBという言葉もまだ無く、HSA^{ハイサ}乗りと呼ばれる物たちが自分の飛走技術を競い合っていた。

そんな時代に存在したHSA^{ハイサ}が”S系”である。

S系HSA^{ハイサ}はアドウ達が若者と呼ばれた時代には既に姿を消しつつあった。現在S系HSA^{ハイサ}を見ることはまず無いだろう。

主なS系HSA^{ハイサ}の原動力は、魔炭石と呼ばれる固形状の化石燃料と水を使つ蒸気機関である。蒸気機関はボイラで魔炭石を燃やし蒸気を発生させ、それをシリンダーと呼ばれる筒に導き、蒸気の圧力でピストンと呼ばれる棒を動かし車輪を動かす機構である。D系と比べても加速までの手順も多く、最高速度も出ない。現環境でS系とはデメリットばかりしかないHSA^{ハイサ}であった。

長年、HSA^{ハイサ}に関わり続けてきたアドウが驚くのも頷ける。「じゃあ、何か。あのボウズは札束叩いてガラクタ買つて来たってことか」

アドウは両手の手頭を右手で摘む。

そう諦めにも近い声を出した。

元々立ち聞きするつもりは無かつた。

ただどうして自分の祖父がクリュウにあれほど頑なに力を貸す気が無いのか気になった、本当はそれだけであった。

だから、アドウとハタの話を聞いたとき、どうしても聞く耳を立ててしまった。

『じゃあ、何か。あのボウズは札束叩いてガラクタ買つて来たってことか』

ドア越しにその言葉を聞いてしまったとき、足が勝手に動いた。

クリュウはまだハンガーにいた。

「ご飯を食べ、体力も気力も回復したクリュウは、まず構造が分からぬ動力部を後回しにし、A.I.I.O.Yから手をつけ始めた。装甲部分の腐食から比べると中の状態は思った以上に非常に良かつた。

クリュウは一つずつ装甲を剥がして行く。錆びてるのでなかなか外れない部分もある。

奮闘することよつやぐ、「飯を食べる前から着手していた右足の足首部分をすべて剥がし終える。

思ったより、いや思った以上に中の腐食は少ない。「下手をすれば、今すぐにでも動きそうだ」

そんな言葉が出るほど、表側と内側の落差が大きかつた。ともあれやはり問題があるとすれば動力部分であろう。こればかりは何か分からぬので手をつけることは出来ない。

「おい！ ボウズ！！」

ハンガーのドアが開きアドウが大声を上げる。

「親方、どうしたんですか」

「ここに、サリナ来なかつたか？」

クリュウは見てない、と首を振る。

「工房にもいなみてえだ」

ハタが大急ぎでやつてくる。

「……つたく、どこ行きやがつたんだ」

聞けば、サリナは夜中に家を飛び出していつたらしい。

「大方、ワシらの話を聞いていたんでしきう」

ハタはそう言つ。

「あのH.S.A嫌いの癖に……なにをする気なんで……」

「親方。ワシが外見てくるから、このボウズに説明してやつてくだ

さいな。その方が嬢ちゃんが行つた場所も分かるかもしけん

クリュウは夜道を走る。

目的地はタヌキの所であつた。

親方から話は聞いた。あのS系に属するHSAハイサについてもだ。

サリナは恐らくその話を聞いてタヌキの所に向かつたのだろうと思つた。

札束を渡そうとしたときに飛び掛つてきた……そんな彼女の姿がふと浮かんだのだ。

ここ数日サリナと一緒にいて分かつたことがある。

サリナは、正義感の強い娘であつた。

(今頃、きっと……)

タヌキを探しに行つたに違ひない。

それも嫌いだという、クリュウの為に。

だが、相手はあの神出鬼没のタヌキである。容易に見つかるとは思わない。

とりあえず、クリュウは住宅区を抜け先田中古市のあつた所まで行こうと思つている。

あと少しで着くといつとひりで、口論……といつよつも一方的に捲し上げる少女の声が聞こえた。

行つてみるとそこに、サリナと……タヌキがいた。

サリナはいかにも噛み付きそつた勢い、いや既に一発は叩いていたようであつた。

「はいはい、そこまで」

クリュウはサリナの手を引っ張る。

「……ちょ、新入り！？」

「いいから、帰るよ。親方もハタさんも心配してゐる」

「何言つてるのよ。アンタ、コイツから金取り返さないと…」

サリナはタヌキを睨み付けると、タヌキは「ヒイー」と怯み声を

出した。

「お前、相変わらずビビつのは変わつてないのな」
タヌキは子どもの頃から何かといえど怖がる奴だった。そこを補う為かいつしか、口と悪知恵ばかり働くようになつていつた。

「……つせえな。言つとくが金なら返さねえぞ」

「なんですつて！？」

タヌキは再び体を震わせる。

さすが、アドウの孫というだけあって、覇氣は祖父譲りといつても過言ではない。

「いいんだよ。サリナちゃん」

「どこのがいいのよ。あの……あのお金は、クリュウ……アンタが夢を叶えるために稼いだお金じゃないの！？ それをコイツが騙し取つたのよ！」

サリナの言い分は最もだつた。だが、クリュウは少しも騙されたことを怒つてはいなかつた。

なぜなら、クリュウは夢を諦めてはいなかつたから。

「騙し取られてなんかいなさい。だつてオレはあのHSA^{ハイサ}でライナーになるから」

この言葉にはサリナだけでなく、タヌキまで睡然とする。

「無理よ！……おじいちゃん達が言つてたもの、アレはガラクタだつて！」

サリナにはアドウ達の言つ専門用語は分からなかつたが、あのHSA^{ハイサ}が50年以上も前のモノで、それでいてあの外見を想像するにとても走りようが無いものだと、それだけは理解することが出来た。「無理じゃないさ。オレはあれからアソシ……オレは《ディーゴ》つて呼ぶことにしたんだけど。あつ、これはね《ディーゴ》に張つてあつた型番に”D5E495”つて合つたから、頭をとつて《ディーゴ》つて言つただけど。えつと、なんの話だつて……そうそう。《ディーゴ》の装甲を剥がして見たんだけど、これが思つた以上に状態が良くてや」

クリュウは一瞬一瞬じごう。その顔には一切の迷いは見られなかつた。

「つまり何が言いたいのよ」

クリュウの言葉からはじまいち要領を得られなかつた。

「そうそうオレが言いたいのは、『ディーハ』を走らせるのは無理じゃないんだよ」

そうクリュウは言つが、サリナにはそう樂觀視することは出来なかつた。たとえ走つたとしても、半世紀以上も前のHSAが今のHSAに勝てるとは思えない。

信じることが出来ないというサリナの顔を見てクリュウは言つ。「だったら、見ててよ。オレはあのHSA^{ハイサ}で走る……だけじゃなくて必ず勝つてみせる。だから、サリナもHSA^{ハイサ}を好きに……」

そこまで言つてクリュウは一度口を止めた。

「いや、嫌いじゃなくなつて欲しいな」

なにか物事を嫌いになるには理由がある。“好き”じゃないものは、“嫌い”というのは極端である。もし本当に嫌いならば興味なんて一切持たないのじゃないか。もしサリナがHSA^{ハイサ}を嫌いな理由があるとすれば、嫌いになつた出来事があるのでないか。

と、クリュウはそう思つてその言葉を投げかけた、“自分が走るから、HSA^{ハイサ}を嫌いじゃなくなるきつかけになつて欲しい”、と。

それはまるで愛の告白のような言葉だつた。実際クリュウはその台詞が余りにもキザでサリナの顔を正面から見られなくて、顔を背けているし。サリナも年齢の近しい男性から真剣に諭されたことも無かつたので顔を赤くしている。

端から見ていれば男女の愛の語りいそのものに見えたかもしれない。

その、背後から近寄る2人の老人さえいなければ。

「ほう、言つじゃねえか。クリュウ」

アドウがクリュウの背中を叩く。

「……痛つづく

クリュウはアドウを涙交じりで見上げる。文句の一つでも出せつになつたその時、

「まあそれぐらい甘んじて受けろや」

ハタが小声でそう呟つ。

「口では言わんがな……お前さんに協力してくれるつてよ」

「ハタさんよう、聞こえてるぞ」

「おお、スマッシュマン。で……まずはさしあたつては……」

アドウとハタは手をパキパキと鳴らす。

「……おい、ちょ……」

その余りにも豪胆な二人の視線を感じて、タヌキは後ずさつた。

「ねえ親方。HSA^{ハイサ}を金儲けの道具にして……しかもウチの新入りを騙すなんて許せませんわなあ」

「そうだな。当人はなんとも思つてないようだが、HSA^{ハイサ}に関わるものとしては断じて許せん……」

そう一步ずつ距離をつめて行く。

タヌキは猛獸に迫られた獲物のよつにただ震えていたことしか出来なかつた。

『ディーゴ』の修理は順調であつた。動力部を除けば後は装甲を磨くだけとも言える。

肝心の動力部も本日からようやく手がつけられるという所である。これはアドウが古いS型の資料を提供してくれたおかげもあつた。それだけではなく、ある人物からだいぶ朽ちてはいるが『ディーゴ』自身の設計図を手に入れられたことも大きい、この一つをあわせるだけで『ディーゴ』の修理にかかる日数は格段に上がるだらう。更にその人物はここ数日クリュウの手伝いまでしてくれる。

「おーい、ベンチ」

クリュウは『ディーゴ』の口チクピットをこじ開けようと躍起に

なつてた。

コックピット部の装甲も例外なく鋲ついているので剥がすには、一つずつナットを壊していくしかない。

「……ほれ

タヌキは面白くなさむつて、工具箱から言われたとおりのものを持つてくる。

あれからタヌキは強制的に工房まで連れてこられ、クリュウの変わりに工房の雑用をこなし、それだけでなくこうして《ディーゴ》を直す手伝いもしてくれている。

その理由を問うならば、あちこちに巻いている包帯を見れば容易に察することが出来るだろう。

「おっし

ペンチでコックピット部のドアの外枠のナットを外し終わる。ドアを開けずに外枠にくつついていた装甲部分だけ剥がすことでコックピットの中がようやく露になる。

「いじや、結構酷いな

「コックピットは思いのほか荒れていた。いや、製造年数を考えるとまだマシかも知れない。《ディーゴ》の設計図から察するに、《ディーゴ》は製造されてから50年以上も経っている。

A110-Yは新しいバージでも少し加工すれば《ディーゴ》に取り付けることが出来た。だがS系独自ともいえる、コックピット、動力部 そして、明らかに目に着く車輪部と動力を伝える為のピストン等は直すのには、もしアドウ達の力を借りても容易では無いかも知れない。

クリュウは懐中電灯をつける。

基本構造は他のHSAとも余り変わらない。
ハイサ

操舵石があり、加速減速を行う為のフットペダルがある。

だが、このコックピットは、他のHSAに比べて大きかった。これはS系の特徴の一つであった。木で出来ていた床が朽ちて吹き抜けになつているが、本来ここには床があつて下にはもう一つ席があ

つた。

S系が空を走っていた次代、OSは存在していなかつた。その為、複雑な動力を生む手順を持つS系HSA^{ハイサ}のライナーは最低一人必要であつたのだ。

下の席には大きな釜があり、ここに常に魔炭石をくべてやる必要がある。

クリュウはコックピットの下に降りて釜を開ける。ビリヤリーリーは錆び付いていないようだ。動力を生み出すともいえる釜が無事なのは幸いであつた。ここが使い物にならなければ新しく作るか、尽力して直すしかなかつた。

釜の戸はクリュウの大きさ一メーヤぐらいのものであれば屈めば除くことが出来た。

釜の中を……壁を明かりで照らす。

「なんか、おかしい……」

違和感を覚える。

(なんでだ、こんなに状態も良くて綺麗なのに)

釜の中を見た感じ、ここは《ディーラー》のどの場所よりも綺麗だつた。《ディーラー》の部品の中でも常に火を炊く場所であるが故に丈夫に出来ているのか、そう考える。

「あー」

一つ閃くものがあつた。

そう、引っかかりを覚えたのはそこが余りにも綺麗過ぎるからであつた。

この釜にはいぐら50年経つからといって燃え津じるか煤一つ付いていないのだ。

「まさか、コイツ走つたこと無いのか……」

何故かは分からぬが走ることなくただ放棄されたHSA^{ハイサ}。それと思うとクリュウは感傷深くなる。

その時グラリとHSA^{ハイサ}が揺れた。

『すまん! クレーンをぶつけちまつた! !』

外からタヌキの謝る声が聞こえた。どうやら、パークを吊るす為のクレーンの一部が《ディーゴ》に接触してしまったようだ。

「うん？」

揺れたことと関係があるのであらうか、釜の一部であると思つていた丸い物体が先ほどの位置からずれていた。

クリュウは体半分を釜の中に入れてその物体に手を伸ばす。

「意外と……重い……」

それは30ミューム……人の子一人ぐらいの重さがあった。大きさも直径1メーヤ程。楕円上のカプセルに見えた。

「なんだってこんなもんが釜の中に」

クリュウは釜から楕円状の物体を引きずり出す。

「おーい。これ下ろすから手伝つてくれ」

クリュウはタヌキに声をかける。タヌキは嫌そうな顔をしていたが程なくしてクレーンがこちらにやってきた

。それに楕円状の物体なので大きな布袋を入れる。その時カプセルに描かれた文字のようなモノが目に付く。

「ガ……ラ……… メーメ？」

これが何を指すのかは分からぬ。このパークの名称なのかも知れない。

クリュウはクレーンにカプセルを吊るしたまま先に下に降りる。

「下ろしてくれ！ 今度はぶつけるなよ」

クレーンが少しずつ下降を始める。このクレーン手で鎖を引っ張ることで操作するので加減が難しい。

グンと一気に下に落ちる。

「おい！」

床まで落ちることは無かつた。少し下降したところで止まる。

「スマン、スマン」

タヌキはまつたく悪ぶらずに謝る。

だがカプセルは、急に降り、そして止まつたことでゆらゆらと揺れていた。そして、軽く《ディーゴ》の外装にぶつかつた。

しばらくして、ゆっくりとクレーンは下まで降りきる。クリュウは布袋を外し、無事を確認する。

「少し、割れてる……」

ぶつけたことでカプセルには亀裂が入り、中から水のよつなもののが零れていた。

これは、新しく代用品を作らなくてはいけないかもしれない、クリュウがそう思った。

その時、

「ギヤ——！——人の指だあ！——！」

何を見たのかタヌキが一目散に逃げ出した。

割れ目から指が出ており、これにはさすがのクリュウも驚き立ち上がった。その瞬間手がカプセルに付いてた何か突起のよつなものに手がふれた。

その拍子に割れ目からヒビが入りカプセルから大量の水が流れ出した。穴は大きくなり、流れ出た水は蒸発を始める。

最後にカプセルの蓋のような物体が転げ落ち……。

蒸発によって発生した煙が消え始めると、

その中から小さい女の子が出てきた。

「はじめまして。じしゅじんさま」

まるで小鳥が轟るように……畠麻色の長髪を濡らしながら、文字通り生まれたままの姿そのままで、彼女はニコニコと微笑んだ。

ディーラ（後書き）

金曜に続けて投稿です。

どうしても主人公の機体に触れたくて……でも書くの……辛かった
……。
やつぱり1週間に2話はきついです

謎の少女（前書き）

投稿が遅くなり申し訳ありません

謎の少女

クリュウの目が点になる。

誰が機械の中にあつた装置から小さな女の子が現れるなどと、予測することが出来るであろうか。

そして彼女は一糸纏わぬ姿でそこにいた。

「おはようございます。」「しゅじんさま」

クリュウより頭一つ小さい少女はそう言ひ。

開いた口が閉まらないとはこつこつとを言ひのだらう。クリュウはしばらく、思考が止まり喉から言葉も一切出なかつた。

少女は不思議そうに小首を傾げる。

「どうしたんですか、ごしゅじんさま？」

少女はクリュウに近づく。

その行動に、フリーズしていたクリュウの意識が再起動される。いくらHSAハイサ以外関心が薄いクリュウといえど、このよくな露骨な場面に遭遇すれば頭も沸騰するであらう。

「あ、あ、あ、あば」

「早速、ご命令ですか、ごしゅじんさま？」

当の本人といえど肢体を晒しているといつのに恥ずかしがる素振りも見せない。ここで悲鳴の一つでも上げられれば、クリュウも頭を下げたりと色々行動することが出来たのだが、目の前の少女がそういう仕草を取らない所為かクリュウの頭も徐々に冷えてくる。

「き、君は？」

「そういえば」

少女は、ポン、と手を叩く。

「自己紹介がまだでしたね。名前は……アレ?」

今度は少女が名前を思い出せないのか止まる。

ふとクリュウの視界に飛び散ったカプセルの欠片てあつた事を思い出す。

「ガラ……メーメ……」

「そうそれなのです。メーメはガラメーメと言つのですよ。よろしくお願ひしますね、ごしゅじんさま」

今更だがここに来てクリュウは、略称でメーメといひぢりじい少女が、自分のことを主人と呼んでいることに気がつく。

「じ主人様つてオレのことか？」

「そうですよ。だつてごしゅじんさまがメーメを卵から出してくれたのではないですか？」

メーメの中ではそれが唯一の回答のらしい。

「もし、メーメに長い尻尾でもあれば出会い頭に尻尾アタックを喰らわせて、ツンデレ！-! つてことも出来たのですが……残念ながらメーメにはそのような装備は搭載されていないので、じく普通に主人に付き慕つというモードを選択したのですよ」

よく分からぬ言い回しと言葉を使うメーメに今度はクリュウが小首を傾げる。

「いや演出とかはともかく、そのご主人様つてのは勘弁してくれ。むず痒い」

アイザのようにお金持ちでメイドでも雇つてているのであればそんなことも無いが、人間的にも収入的にも貧相としか言いようが無いクリュウにとつて、突然ご主人様と言い寄られれば違和感を覚えてしまうのは当たり前であろう。

「とにかくなあ

メーメを今の状態で放つて置くには忍びない。

「クシユン！-！」

クリュウが着ているものを貸そうと思つても、作業着である。作業場には当然幼い少女が着れそうな物はない。

かといって、この真夜中に全裸の幼女を街に連れ出す訳にも行かない。

ふとクリュウの頭に身近にいる少女の姿が浮かんだ。

「onsoon

クリュウは窓を叩く。

「オレ、オレだよ。開けてくれ」

「私にオレさんなんて言つ知り合いはないんだけど……」

「そう言いながらもサリナは何の用事かと窓を開けてくれる。この時クリュウはサリナの部屋が一階にあることを密かに感謝した。

クリュウは窓から部屋に飛び入る。

「ちょ……ちょっとクリュウ！？」

まさか入つてくると思わなかつたサリナは驚く。

だがこの後、彼女は更に肝をつぶすこととなる。

「こんな夜中に女性の部屋に押し入るとは、『じしゅじんさまも中々やるのですよ」

そうクリュウの手を取りサリナの部屋に入つてきたのは、真っ裸のメーメである。

「あのせ、悪いんだけど……」

クリュウが口を開いたのと同時に、サリナの手が飛んできた。その見事な手際にメーメはお見事といわんばかりに手を叩いていた。

「まったくどういう神經してゐのよ！――」

「いや、待てこれには理由がツ！」

クリュウが再び叩かれる、と思いつを閉じた。

だがビンタが飛んでくることは無く、代わりに頭から布団を掛けられただけだった。

「その布団取つたら、家から放りだして檻の中に入れてやるから」クリュウは背筋が凍る。布団を剥ぐと桃源郷の風景、その後漆黒のブタ箱の中、である。

「とりあえず、アナタを何とかしないと」ガチャリと扉を開ける音がする。

「とはいっても、昔の服なんてあつたかなあ」

「どうやら、サリナはメーメに着せるための服を探してくれているよ」

よつであつた。

クリコウは手痛い一発は貰つたものの、当初考へていた通り目的は達成出来たよつで一安心と息をつく。

「おお、真つ黒なのですよ」

「ちょっと、アナタ何を手に取つてゐの……」

（平常心……平常心……）

そんなクリコウの気遣いを知つてか知らぬかメーメは、何か（・・・）を手に取つたよつであつた。

「「」しうじんさま、「」しうじんさまこれを見て欲しいのですよ」

「やめてえ……」

クリコウの背にタラタラと冷や汗のよつなものが流れる。この布団を取つた後、無事では居られないのではないか、そんな不安が過ぎる。

「もう……余計なことしないで……」

「残念……なのですよ」

災いはひとまず去つたのだが、クリコウはそれに気がつくことなく硬直している。

「あつた、あつた。ほら、これなら着られるんじやないの」

「もつ……なんで、こんなに着せにいくのよ……」

「「」リ！ 動かない……」

「はーー」

「下着は……まあ明日にでもこのバカに貰わせるとして、ドロワーもあるし大丈夫でしょ」

そんな、「」そ「」と桃色のやつ取りがあつたのだが、この先の余

りの恐怖に一つとしてクリュウの頭に残らなかつた。

「ま、いいわよ」

被されていた布団が払われる。

「じゃーん、なのですよ。」しゅじんせめ
ぱりと手を開くメーメ。彼女はファンシーともいえる黒と白のコンترتーストのドレスを身にまとつていた。ドレスといつてもスカートはそれほど長くなく膝が掛かるか掛からないかであり、そしてスカートからはカボチャパンツ ドロワーズの裾が見え隠れしていた。メーメがクリュウに対する呼び方も相まって、それにエプロンとカチューシャを足せば従者とも見えそうな衣装であった。亞麻色の髪と白い肌を持つメーメはこのような服を着るのが当たり前ともいふように、似合つていた。

「……さて、それじゃあどうしてこうなつたかを聞かせて貰いましょうか」

何時ものサリナが使わないよつな丁寧語……それがクリュウの恐怖心を駆り立てる。

クリュウは瞬時に正座する。

表面上は二口二口繕い笑うサリナの前ではクリュウはまな板の鯉どう料理されるのかを待つだけの存在であつた。

「で? いの子何なの?」

そう問われても、クリュウ自身も良く分かつていない。

「それが実は、HSAハイサの中にあつたカプセルから出てきたんだよ」
だから事實をそのまま述べるしか方法が無かつた。

「そんな訳無いじゃない! ! !」

「嘘じゃないって!」

サリナは信じていないよつであつたが、とても嘘を言つてゐるよつに見えないクリュウの態度を見ると、

「まさか……」

「本當なんだよ」

「クリュウ……アンタ、とうとうHSAハイサ馬鹿をいじらせたんじゃ?」

結局は信じてもらえない。

「こういつときは、警察？ それとも病院……」

どちらにしろサリナの考える先に待つのは、クリュウにとって地獄しかなかった。

「盛り上がっている所申し訳ないのです。『ごしゅじんさま……』人が一人この部屋へと向かつて来ているようなのですよ」
メーメのこの発言にクリュウ、サリナ共になぜそんなことが分かるのかと疑問を抱いた。

間もなくして、ドアがノックされる。

サリナの返答を待たずしてドアが開かれ、サリナの母・ルリが入ってくる。

「サリナちゃん！ コレ……」

ルリのその手には今メーメが着ているようなドレスが握られていた。

「ちょっとママ！ 勝手に入らないでよ」

サリナがそういうも、ルリの耳には届いていないようであった。ルリの視線はバツチリとメーメをロックオンしていた。

「『ごしゅじんさま。メーメは何か肉食獣にでも見つめられる気分なのですよ』

「同感だ」

夜中に年端も無い娘の部屋に……しかもよく分からない少女連れでいるところをその肉親に見られた。これは下宿人にあらざる行為であろう。クリュウは修羅場にいることを確信する。

「な、な、な」

ルリがワナワナと震えだす。

「なにこの娘！？ お人形さんみたい、すごい可愛い！…」
だが待っていた言葉は予想外のものであった。

ルリはメーメに抱きつく。

「いやあ～可愛すぎる！… この娘借りていくわ

ルリは答えも聞かずにメーメを連れ去る。

「「」しゅ じさま！？ 「」しゅ じんさま～～～！」
クリュウはドナドナと連れ去られるメーメを心中で敬礼して見送った。

後に残つたのは無言でたたずむ一人。

「なんかごめん。あんな母親で……」

「いや、こつちこそ」

二人は頭を下げる。

場を支配するのは漆黒の闇。

そこにあるのは円卓である。そして円卓を取り囲むように幾人がそこに座っている。

「状況はどう転んでも、変わらぬか……」

その中の一人が苦虫を噛み潰すような声でそう唸る。

「おのれ……クロバ工業め！」

その一言を口切りに、何人もがクロバ工業を罵る。

「三賢者の方はどうか……？ なにか妙案はないものか？」

「動の賢者に妙案は無い……無の賢者はどうか？」

動の賢者と名乗つた一人は、隣に座る無の賢者に尋ねる。

「…………」

無の賢者は、眉間を動かすだけで何も語らない。

「では……源の賢者はどうか？」

「あつたら、ここに集まつてなどおらぬのじや」

源の賢者は声を荒げて言う。

「クッ、此度の賢人会も何も解決せずに終わるのか……」

「何が賢人会よ」

「何奴！？」

円卓に座っていた一人がその声に反応する。

その瞬間、闇が晴れ部屋が明るく照らされる。

「「うおおおお！…」」

急激に明るくなり、目が焼かれ幾人かが顔を伏せる。

「もう、お茶を持って来たら、何辛氣臭いことやつてるのよ。つてか賢人会つて何？ ただの町内会の老人会でしょ」

明るくなつた部屋で窓際に立つてるのはサリナである。

「そつは言つがなサリナ。こうでもしないとやつてられん」まるで演劇で悪役が纏うようなローブを脱ぐ、動の賢者ではなくアドウ。

サリナがカーテンを開け放つたことによつて部屋は明るくなつた。

「もう、おじいちゃん恥ずかしいことしないで…！」

サリナはアドウに言い放つ。

「ウエマーさんもおタネさんも悪乗りしないでくださいよ…」

無の賢者と呼ばれていたウエマーは相変わらず無言で視線もどこを見ているか分からぬ。他の面子もあえてサリナとは目を合わせない。改めて言われると自分達がどれだけ恥ずかしいことをしていたのかが身にしみたのである。

「で、結局なんの話をしてたのかの？」

話が途切れ一人の老人が首を傾げる。

「そりやああれだ、大企業の仕業でワシら小さい工場が大変だつて話だ」

「そつだつたのか？」

と改めて話してみれば振りだしに戻る始末となる。

「そんなんに大変なの？」

サリナは工場の経営などについては良く知らないので聞いてみる。

「そりやあ大変つてもんじやないさね」

「アドウさんとこは、まだ腕がいいから仕事はあるんだがうちらは全然駄目さ」

皆がため息をつく。それほど、小さな工房の現状は悪いのだ。

「昔はよかつたのね」

老人達は昔を思い出すと10も年が若返ったように生き生きとした表情で語り始める。

「昔は工房」とにお抱えのHSAとライナーがいたもんだ」

「そうだそうだ。ウチのライナーが勝ったときなんて、この工房のパートがいいとか噂になつたりして、いざつてライナーが買いに来たりしたなあ」

だが良いことを思い出すと今の悪いことが懸念として飛び出してくれる。

「それが今じゃあHSAを弄らせてもううじともまあならねえ……」

「安い金で大企業様の下請けの型を決められた部品を作る仕事を貰うのがやつとや」

本当にそういうのだろうか、サリナはそう思つ。例えば、

「アイザさんみたいな人もいるじゃない」

彼女はライナーでありますながら、中小工房を利用している。

「そりや、アドウさんとこみたいに腕のいい所は使ってくれるだろうけど、ワシらみたいな所には敷居が高すぎる」
アドウ、ウエマー、タネを除く老人達は頷く。

「じゃあ、クリュウはどう?」

「おい、サリナ……！」

クリュウの名を聞きアドウが静止の声を上げる。皆がクリュウに

対して協力するのはアドウの意に反していたからである。

「クリュウつたら……アドウさん家で働いてるアンちゃんか?」
皆がその名前が今どうして、という顔をする。

「まさか、例のアンちゃんライナーなのかい?」

「まだスタートラインにすら立つてないけどね」

クリュウのことを頭に思い浮かべてサリナはやれやれ、と思つ。
そして彼のHSAが一人で修理していることを伝える。

「アドウさん、そりやねーぜ」

「なんでそんな面白い話を黙つているんだ」

それに対してもアドウは言ひ。

「あんな ハイサ H S A 走るものか」

その態度に皆が静まる。腕の良さを知っている分、アドウがそのような発言することが珍しいからである。

「アイツの使おうとしている H S A は S 系だぞ」

その言葉に対しても疑問を浮かべるものはいない。皆、年を取つている分だけに S 系という H S A を知つてゐるのだ。

「……ヒツ」

訪れた静寂の中、一つの声が上がる。

「ヒヒ…… S 系だつて！？ ヒヒ」

口を開いたのは、先ほどまで無の賢者といわれていたウエマーという男であった。

「う、ウエマーさんが喋つた……」

皆が驚嘆する。ウエマーが今まで積極的に口を開いたことを誰もが見たことが無かつたからだ。

「面白い、面白い、ヒヒヒヒヒ」

その薄気味悪い笑い声に怯える者までいる。

「ヒヒ、是非とも僕に、E O M を作らせて欲しい……ヒヒ」

ウエマーは機関魔法技師 略称 E O M 技師と呼ばれるものであつた。賢者と呼ばれていたこともあり、分野は違えど腕はアドウに並ぶとさえ言われる。ただ、その E O M は奇妙奇天烈なものが多く使えるモノは少ないと言わされている。だが、中にはプレミアが付き国々の国家予算ほどになるというものもある。

そんなウエマーが喰いついたということもあり、他の者達もクリュウの H S A ディーゴに興味を持ち始めた。

ただアドウだけは最後まで面白くなさそうな顔をしていた。

謎の少女（後書き）

明日また話を上げるために奮闘中です。

感想意見等募集中ですのでよろしくお願いします

恩師（前書き）

昨日に引き続き投稿です

『勝者！… アイザ・ヨー！…』

実況が言うその声により勝者が告げられる。

2RBが終わると沢山のマスコミがアイザの周りに集まる。それはもちろんその卓越したHSAの腕もあるだろう。だが誰もがアイザのその点ばかりを見ているばかりではない。その姿ばかりを褒め称えたりされたりする。

だからアイザは勝利の余韻に浸ることなくやつてくるこの無粋な輩が嫌いであった。それとは逆に走っている瞬間は最高の気分を味わえた。その瞬間だけはHSAがすべて……何事も『可憐』では済まされないのである。そういう緊張感がアイザにとつては心地よかつた。

「アイザさん、次は当然”ワールド・チャンピオン・カップ”です。よね。意気込みをお願いします」

WCCと言われるその大会においてアイザは前回のチャンピオンであった。あのクロバ工業さえ所属のライナーをその座に置こうと死力を尽くす、2RB界至高の大会である。新チャンピオンが生まれるか、それとも現チャンピオンが最強か、と2RBファンにとつては見逃せない試合であった。

記者の誰もがアイザの回答を耳を済ませて待つている。

だがアイザは何も語らず上品な一筋の笑顔と貴族然とした一礼をすると控え室へと去つた。

次の日の新聞には『WCCに向けて、アイザ・ヨー”余裕の笑顔

”』という見出しが付いた。

『ディーゴ』のあるハンガーには、何時もと違う雰囲気が漂つていた。

クリュウは良くは知らないが、先日の会議で町内会全体で《ディイゴ》の修理に協力しようと年配の方々が話し合つたらしい。

クリュウにとつて見れば棚から牡丹餅……ただでさえ手を焼き、人手が足りないのを補つてくれるというのだ、非常に助かる。

「ヒヒ、本当にう系だねえ、コレは。ヒヒヒ」

そういう怪しい声を上げるのは、ウエマーといつエム技師だ。

彼が手を貸すからこそ、自分もという形で人が集まつている。正直の所クリュウの為に集まつたわけではないのだ。

クリュウはそれも仕方の無いことと思つ。2RBの世界において名が売れているということは重要なことだ。名が売れていれば、ライナーであればアイザやギドレーのように出る2RBに引っ張りだこになる。工房の名が売れれば、そういう名だたるライナーが利用する、そして更に名が売れる。

名無しのクリュウに対しこれほど手を貸してくれるということは本来ありえないことなのだ。

「ヒヒヒ、僕の出番はまだなさうだねえ」

EOMは飛走出来るようになつたHSAに合わせて設計されるものである。

「それはそれでいいとして、ヒヒ。君はう系に乗れるのかい、ヒヒヒ」

「いや乗つたこと無いけど

様々なHSAに乗つたことのあるクリュウであつたがう系というのに乗つたことは無かつた。それもその筈で、この国においても動態保存されているう系は数が少ないのである。それだけでも《ディイゴ》を復元させようというクリュウの無謀さが伺える。

「馬鹿が、ウエマーさんはそう言つことを言つてるんじゃねえよ」

その声に、クリュウがハンガーの扉のほうを見るとそこにはハタがいた。

ハタは封筒のようなものをクリュウに投げてよこす。

「コレは？」

「HSAにはD系やE系といったそれぞれに合わせた資格があるだらう。S系を乗るにも資格がいるんだよ。それは、S系のHSA講習を受けるための届出だ」

中を開けば既に届出を受理されており、決められた日程に飛走都市スカイレールの教習場へといってノルマをこなすだけとなつている。

「ヒヒヒヒ……アドウも随分と丸くなつたもんじゃないか。ヒヒヒヒ」

「おめえが焚き付けたから予定が狂つちまつたよ。まあ親方は、ウチの社員として働く以上すべてのHSAに乗れなきや意味がねえ、だなんて言つてたがな」

クリュウの周りの者が力を貸してくれた。

「ヒヒヒ、コイツのことは僕達に任せで、君は君に今出来ることをすればいいさ。ヒヒヒ」

それに報いることがクリュウに出来るとすればそれは飛走^{はしる}ことだけであった。

「やるぞーーー！」

『ティーゴ』のハンガーは熱い熱気に包まれた。

「お願いします」

クリュウは教習場の受付嬢に書類を差し出す。

S系の免許を取得するためには4時間の座学と6時間の実習が必要となる。HSAの免許を取得はしているのでこの中には基礎的なものは省かれる。つまりS系HSAについてのことのみ学ぶこととなる。

他にS系HSAに乗るうつといつ醉狂な者もいないのでマンツーマンの授業となる。

授業内容もS系について知らない教師が古い教科書を片手に授業を行う。速度を上げるために蒸気を調節する”バルブ”やメーター

の見方等をぎこちなくだが教わる。

クリュウはこんな調子で午後の実習は大丈夫なのかと一抹の不安を覚えた。

だが午後になりそんなクリュウの前に杞憂を晴らす人物が現れた。「こんなにちは、クリュウちゃん。またアナタに会えるとは思わなかつたワ」

そうヤクザも恐れおののくような低い声で話しかけられる。

「こ、校長！？」

それはクリュウが以前通っていたアカデミーの校長 ボウホであつた。

「ゴメンナサイね。ホントは午前中の授業も受け持つて上げたかったのだけど……何しろこんな身分でしょ。手が開かなくつてネ」黒光りする肌、厳つい顔……男の中の漢という容姿からは想像出来ない口調で話すボウホ。入学当初はクリュウもこの口調に慣れるのに苦労した。

「では、午後の授業を始めましょ」

HSA^{ハイサ}が走る為の教習場のコースは砂浜であつた。そこには2機のS系HSA^{ハイサ}が鎮座していた。《イッカーロ》と呼ばれる《ディイゴ》^{ハイサ}と似たようなHSA^{ハイサ}、そして少し小柄な《ヴィーツク》と呼ばれるHSA^{ハイサ}である。

「ドツチに乗る？ 大変だったのよお。動態保存されてるS系を調達するのわ」

アカデミー時代の無茶な走り方をするクリュウを知つているボウホは、壊さないでネ、と念を押す。

クリュウは《ディイゴ》に近い《イッカーロ》を選択する。《ディイイゴ》に近いほうが今後の為になると思ってだ。
(それでもどうして2機も持つてきたんだろ？)
教習の為なら1機で良いはずであった。

クリュウはそんな疑念を持ちつつ《イッカーロ》に乗り込む。《

イッカーロ》は現代の技術も幾つか搭載されてあつた。その中でもOSや燃料供給機器がある為、現在の《ディーコ》のように副座ではなかつた。

「それにしても熱い……」

ボイラーで常に火を炊き続けるS系の「シクピットは40に近い。

『それじゃあ、走つてみて』

ボウホからのその指示が来て、クリュウは操舵石の上に手を置いた。

基本的な操縦方法は、他のHSAと大して変わりはない。

操舵石でA110Yを操り、アクセルペダルで加速を行う。そして、速度調整を行うためのバルブを捻る。速度調節を行うという点においては、D系HSA^{ハイサ}におけるギアを切り替えるクラッチに近しい物である。

ただクラッチと違う点は、こちらは速度が上がると次のステップにと切り替えていくのに對して、バルブはメーターを見ながら捻り、調節するという所であつた。用は纖細な操作が求められるのだ。

「でも、細かい調節が出来そうだ」

そうポジティブに捕らえて、クリュウはバルブを捻る。

そしてペダルを踏むと《イッカーロ》がゆっくりと動き出す。

蒸氣がシリンドラーへと送られ、ピストンが軋む音を立てる。ピストンに引っ張られるように車輪が回転を始める。

シリンドラーから蒸氣が噴出し、煙突からは黒い煙がもうもうと吐き出される。

外から見ればその動きは、他のHSAでは見られない力強い鼓動であつた。

だが、クリュウは眉間を潜めた。

「……遅い……」

『ツフフ。そうでしょ。今のHSAに慣れてると間違いないなくそう思う筈だ』

操舵石からのクリュウの意思通りにスカイレールは引かれているが、『イッカーロ』はその上をゆっくりと飛走する。

また走るのが遅いのには理由がある。S系はその加熱しやすいボイラー故に装甲が厚い。更に動くためには魔炭石と水が必要となる。この2つの理由から、重量が通常のHSAに比べて重いのである。つまりS系に俊敏さと加速性を求めるることは出来ないのである。バルブを捻りメータを見ていたクリュウはある点に気がつく。

（メーターの動作も遅い）

これはメーター自体がシリンダー内に送られる蒸気を計測している為であった。

「なるほど、経験が必要という訳か」

『掴みが早いわね』

これにはボウホも驚いた。初めてS系に乗るにしてはクリュウは余りにも筋が良かつた。並のライナー、いやアイザは分からぬが、ギドレーではこうも行かないだろうと、ボウホは思った。

元々、素質がありその飛走にはボウホですら魅了された。だから、今までに一番期待し、それ故にクリュウがアカデミーを辞めると聞いた際には一番残念に思つた生徒でもあつた。

長い間教師職にいるとこうして“才能”がある人間というのはごまんと見る。その中でうまく行った人間、行かなかつた人間というのも知つてゐる。

ボウホも友人に頼まれなければこんな役目を引き受けなかつたかもしれない。

「でも、ライナーに必要なのはそれだけじゃないのよねエ……」

『なんか言つた?』

「なんでもないワ

ライナーは何も一人で飛走てる訳ではない。ボウホは知つてゐる。そのHSAを作つた人、直す人、調整する人、EOMを作つた人、

ライナーを取り巻く人間、そしてなにより 2RB を観戦している観客がいて、初めてライナーは 2RB を行えるのだ。

クリュウにはそんな周りの人間を巻き込み、魅了してしまって、そんな力があるように思えた。

あの頑固な友人を動かしてしまった程に。

「さて、それじゃあ行きましょうか」

ボウホはインカムを外してそう言う。

クリュウが今どんな顔をしているのか「コックピットで隠れていっても分かる。きっと子どものような笑顔をしているのである」。

「フフフ、その鼻を圧し折つてあ・げ・る」

だんだん分かつてくる。《イッカーロ》の特性が。

「イヤッホオオオ！」

《イッカーロ》がアクロバットイクな飛走を行う。速度調整を行う際の 2 秒のラグももはや気にならない。速度調整を行うためのラグは通常 D 系であれば 0・5 秒、E 系であればそれ以下とされている。

これは S 系に乗るのであれば克服しなければいけない問題点の一つであった。

ボウホからの連絡は無い。どうしたのかとも思うが、それよりも《イッカーロ》で走ることが楽しくてたまらなかつた。

『スタート地点へと戻りなさい』

そんなドスの効いた声が聞こえてきたのはそんな時であった。

「OK。了解」

クリュウは一つ返事で答える。

《イッカーロ》はスタート地点へと戻る。

だが、ボウホからの指令は無い。

どうしたのだろう、とクリュウが思った瞬間、《イッカーロ》の物ではない別の汽笛が鳴り響いた。

すると《ヴィーツク》がスタート地点へと歩を進めてきた。

クリュウは何事であるか分からなかつた。《ヴィーツク》はスタート地点に辿り着くと黒煙と蒸氣を撒き散らす。

「なんだ？」

まるでRBでも行うのかと思わせる。だが、免許取得の実習においてそんなこと行うなど聞いたことも無い。

「校長？」

クリュウはボウホに連絡を取る。だが返信は無い。

「ツー！」

その代わりこれが返信とでも言つつもりか、《イッカーロ》のモーターにRBのシグナルが燈る。

「おもしれえ」

Three

Two

One

「ゴー！！ シフトカラーズ！！！」

相手はそれを言わず、

『さあ、授業の始まりだ！！』

と、返してきた。

その声はドスの効いた、間違いも無くボウホの声であった。

スタート直後、

「火速 ブーストアップ！！」

クリュウはボウホの口調に違和感を覚えつつもEOMを噴かせた。飛走途中にこのHSAにこのEOMが搭載されているのは確認済みである。

初速が遅いS系もEOMで外部から加速してしまえば、その欠点が露見することは無い。

『ほお……』

これにボウホが感嘆の声を漏らす。

『イッカーゴ』が後ろから火を噴出し加速する。

『だが、いいのか？ 燃料を消費しちまつて』

『イッカーゴ』は燃料を補給していない。本来、必要最小限の燃料しか積まないHSAはそれほど長い距離を走れない。

（燃料を与える暇もくれなかつたのはそつちだらうが！－）

操縦に全神絶を傾けながら、心の中でクリュウは呟く。

『まあ、燃料切れなんていうものを狙つてやるほど　この俺様は甘くは無エがなア！－！』

『ヴィーツク』は、先程の『イッカーゴ』程遅くなくスピードに乗り始める。

その小柄な体格が成せる業である。

『ヴィーツク』は『イッカーゴ』より車輪が小さく加速に乗りやすい構造をしていた。だがその分欠点もある。車輪が小さければ、回転数がその分増え燃料を消費してしまつ。長距離を早く飛走するのであれば大きい車輪を積むのが鉄則である。

『イッカーゴ』は火速の恩恵もあり容易に上位を取る。

『ほお……S系に対して真上を取るか……甘エゼ』

その言葉が理解出来たのはその後すぐであった。

「うわッ！」

『イッカーゴ』の視界が真っ黒に染まつたのだ。
何事かとクリュウは思つた。

（これは！－）

それは『ヴィーツク』が吐き出した黒煙であつた。

S系は走り出した時に大量の黒煙を撒き散らす。それが『イッカーゴ』の視界を遮つたのだ。

『コレは、オメエの得意技だつたつけなあ』

クリュウに今それを確認する暇は無いが、『ヴィーツク』はスペイナルアップで『イッカーゴ』へと向けて上昇を始めていた。

『イッカーゴ』が煙を抜けるとそこは、黒煙巻の目……つまり、

『丸見えだぜええ！！！』

予期していなかつた攻撃が待つていた。

『ヴィーツク』の蹴りが『イッカーロ』に襲い掛かつた。

「グあッ！！」

跳ね飛ばされ、『イッカーロ』のスカイレールが途切れる。

装甲の厚い『イッカーロ』自体にダメージは少ない。

だが、地表に向かつて落ちていくコックピット内部には衝撃が走る。

クリュウは揺さぶられるコックピットの中で『イッカーロ』がどの方向を向いてるのかすら確かめることができない。

「うおおおおお！！」

『イッカーロ』の車輪が空転する。それに合わせてスカイレールを引くように念じる。

地表まで後僅か……という所で『イッカーロ』はスカイレールの上を走り出す。

『やるじやねえか』

クリュウは知る良しも無いが、ボウホは昔生徒が恐れる鬼教官であつた。教え子を空中で翻る様は皆にサディスクティク・ティーチャーと比喩されるほどであった。

『ヴィーツク』の連撃は続く。

今度は炎射による攻撃だ。

『イッカーロ』に、クリュウに体制を整える暇など与えてくれない。

『イッカーロ』は高速で車輪を回すも、空中で着地したためにレールの上を車輪が空転してしまいスピードが乗らない。

クリュウは顔を顰めながら、バルブを閉める。これにより車輪の回転数は落ちる。『イッカーロ』の実際に出ているスピードと車輪の速度を合わせる為の行為であった。

だが少し閉めすぎた。

『イッカーロ』の速度がガクツと落ちた。

その瞬間、《ヴィーツク》が《イツカーロ》の上空を通り過ぎた。これは不幸中の幸い……ただ追い詰められるだけの獲物が後ろに出来ることに成功したのだ。

だが楽観してもいられない、このままモタモタとしていれば旋回されて再び速度が上がった時には後ろを取られることとなる。

だがE・O・Mを使う訳には行かない。今度E・O・Mを使うとすれば一撃必殺でなければいけない。

それほどクリュウは追い込まれていた。

だが余裕が無いのはクリュウだけではない、《ヴィーツク》に乗るボウホも同じ立場であった。もともと、《ヴィーツク》も《イツカーロ》も2RB用のHSAではない。特に《ヴィーツク》はボイラーも車輪も小さく、持久戦には向きである。元々、燃料を消費していた《イツカーロ》と走つても先に燃料を切らすのは《ヴィーツク》の方であったのだ。

《イツカーロ》は《ヴィーツク》に合わせて旋回する。

『ツチイ……』

ここに来て初めてボウホの舌打ちがクリュウに聞こえた。

《イツカーロ》の動きに《ヴィーツク》は背後を取るのを諦める。その代わりに、

「来る！」

《ヴィーツク》はその小柄な車輪を生かし、小さく小回りをする。

そして、《イツカーロ》へと向かって下り始める。

『火速 ブーストアップ』

慣性に更にE・O・Mによる加速を生かした剣撃。

《イツカーロ》は腰から剣を引き抜くと、それを受け止めに入る。

《ヴィーツク》に対して《イツカーロ》はE・O・M無しだ。

これは賭けであった。重量の重い《イツカーロ》と慣性とE・O・Mによってスピードを上げた《ヴィーツク》。下手をすればどちらかが弾き飛ばされる可能性すらある。

剣が交わり、鍔迫り合いとなる。

『イッカーロ』は登つてきた道を押し戻される。

前に引いてきたレールの曲がり角……そつこのままでは後ろ向きで曲がれなく落とされる。

『終わりだなア…』

『それはどうかな』

『なにい…!!』

慣性もE.O.Mによる加速も衝突時ほどではない。クリュウがE.O.Mを使用しなかつたのは、この瞬間を待っていたのである。

『炎装フレイマー・ハンチャントおおお…!!』

本来であれば剣などの武器に火を点すE.O.M それをクリュウは、

『イッカーロ』の全身が火を噴くようにした。

『なんだとおおお…!!』

密着しかかつてた『ヴィーツク』と『イッカーロ』が……『イッカーロ』が剣を捨てることによって熱く抱擁する。

『馬鹿な。蒸し焼きになるぞ…!!』

クリュウにその言葉に対する返信をする余裕は無い。機内温度はどんどん上がり汗が噴出す。

だが、次第に『ヴィーツク』に変化が訪れる。

『ヴィーツク』の全身から蒸気が噴出し始めたのだ。

『このオンボロがあ…!!』

そして一機がレールから脱線する。落下する。

そして、砂地に落ち。

砂が巻き上がった。

砂煙が収まると、そこには一機のH.S.Aの姿しかなかつた。

『クソ、OSまでフリーズしてやがる』

落ちたのは『ヴィーツク』であつた。

『イッカーロ』は間一髪の所をスカイレールにぶら下がつていた。

「アーアあ。負けちゃつたワ」「

『ヴィーツク』から降りたボウホはそう漏らした。もちろん、S系で2RBを行うという異例の試合であつたが、当然負ける気はなかつた。というより、2RBの厳しさを教えるつもりであつた。だが結果は、ボウホの負けである。

「先生！！ 大丈夫か」

クリュウは砂地に落下したボウホを心配して駆け寄る。

「テメエ！！ あれほど壊すと言つただろうが！！」

「ひ！！」

「まあ、冗談はさて置いて……こんな事になるんだつたら、海上のコースを貸しきるんだつたわア」

半壊した『ヴィーツク』、装甲が焼け爛れる『イッカーロ』を見てボウホはため息を零す。

じょ、冗談？、とクリュウは怯える。2RB中のボウホは普段のオネエ言葉と違い、恐ろしい程までにヤクザだつた。それはもう声を聞いただけで、子どもが夜眠れなくなる程に。

「ともかく、合格よ。これから頑張りなさい」

どこから取り出したのか、ボウホはチリンチリンとベルを鳴らす。「よつしゃああ！！」

その子どものような仕草、隠す氣のないHSA^{ハイサ}が好きという氣持ち。

ボウホは大人しく、クリュウに魅了され、応援してやううと思つたといつ。

「ただいまー」

クリュウはアドウ家の門をくぐる。

「おかえりなさいなのですよ。」しゅ……」

そこには服だけ可愛さを増したメーメが三つ指を付いて待っていた。

最近、ルリに強制貸し出しされたままだったので、顔も見るのは久しぶりであった気がする。

クリュウは二コリと微笑む。これは彼がフュミニストなのではなく、S系の免許を取れて嬉しいからである。

だがメーメはワナワナと震えだす。

「別のHSAの匂いがする……この浮氣者あおおーー！」

メーメは涙を溜めて怒った。

彼女のこの発言についてクリュウはその正体が分かるまで頭を悩ませることとなる。

そして、この後クリュウはサリナにボコボコにされた。

こんばんは！ 吻鑑立児です。

忙しさで溜まりに溜まつたネタが火を噴いた！！

車で言えばオートマの免許しか持っていないのでマニュアルの限定解除に行つたら、ちょっとこと練習したあとに蝶に連れて行かれて頭字Dさせられたそんなお話です。

何時もは1週間に1話ぐらいのペースで上げているんですけど、今週は2回田の投稿ですよ～

ネタ帖では『イッカーロ』になつてたのが字が汚すぎて、PCで打つときに『イッカーロ』になつていました。こつちのほうが語呂がいいので

お楽しみいただけたらうれしいです。そろそろ、HSAの元ネタが分かつてきた人がいらっしゃるのではないかでしょうか？

さすがに3連続は……無理？

9/17 キヤー、恥ずかしいミスが残つていたので修正しました。

前回如、思わせぶりなあとがきを書いてしまったけど……間に合つたあああ

オーパス家、食卓。

主婦であるルリが料理を机へと並べていく。

オーパス一家3人と下宿人、そして不審者が一人卓に着いていた。

「なあ、サリナ」

食事に手を付けながらアドウが問う。

「なあに、動の賢者…………おじいちゃん?」

「グつ…………。それはもう勘弁してくれ。

それはそうと、あの娘っ子は誰だ?」

クリュウの横に座る不審者こと、ドレスに身を包んだ見た目10歳前後の少女を指差す。問題の少女は小首を傾げるとアドウに向かつて笑顔を浮かべた。

「やあねえ、」

ルリがそういう。

「動の賢者のお義父さん。もう前からいるじゃない

「ルリさんまで…………勘弁してくれ」

ルリは、アドウから見れば嫁養女なのだがこうしてアドウに対し皮肉まで言うことが出来るざつくばらんな性格をしていた。

アドウはガックリと落ち込んだ。だが、アドウが疑問に思つたこと自体サリナも気になつていたことだった。

「で、この前は聞きそびれたけど結局どこで拾つてきたのよ」

サリナはそれを下宿人であるクリュウに聞く。

「だからそれは、前も言つたじやん。HSAハイサかれ出てきたんだって」

それ以上はクリュウ自体も知らなかつた。いろいろ訪ねる前に問題の少女がルリに攫われて行つてしまつたのだから。

4人の視線が一斉に問題の少女…………メーメへと向く。

「ふふふ、とうとうメーメの正体を明かすときが来たのですね」

その瞬間アドウの目に光が灯つた……。

だが、サリナに睨まれると、

「…………」

口を閉じ、動の賢者が現れることはなかつた。

「はいはい、御託はいいから。アナタにも帰る家があるんでしきう目の前に年端もいかない少女である。だから、そういう場所があつて当然だとサリナは思った。

「帰る場所……なのですか？ メーメの帰る場所は、『じゅじんさまのいる所なのですよ』

サリナが冷たい視線でクリュウも睨む。

「メ、メーメ。その『主人様』ていうの止める！－！」

まるで犯罪者でも見るような視線にクリュウは耐えられなく、そう言つしかなかつた。

「うーん、そう言われてもなのですよ。一応、”マスター”という呼び方もあるのですよ」

「それ、それにしてくれ！－！」

クリュウはそれに飛びついた。

「了解、なのですよ」

メーメはそう言つ。

するとメーメは、力を失うよつに机に伏した。

「お、おい－！」

あまりに突然のことでクリュウは驚く。

「う、うん」

メーメから熱い吐息が零れる。

「ま、マスター」

「どうした！－？」

その顔は上氣して、頬は赤く染まつていた。その変化があまりにも突拍子もないことでクリュウはあたふたとする。

「マスター、マスターああ。早く、早くメーメに、メーメに『じん命令を……そうしないとメーメはア……』

呼び方を変えさせたことと関係があるとでもいうのだろうか。突

然メーメは熱のある吐息と潤んだ視線で蠱惑的にクリュウを誘つ。クリュウの犯罪度が更に上がる。サリナがクリュウに向ける皿つきが更に冷たさを増す。

「やめ、やめて。元に戻して！－！」

「はい、ですよ。」しゅじんさま」

メーメの口調は瞬時に元に戻る。

まるで、コイツ痴つてたんじやないか、とクリュウは勘ぐつてしまつ程だ。

だがメーメは屈託のない笑顔をクリュウに向けるだけであった。

「で、漫才はいいとして、アンタ結局何なの？」

「メーメは、奏でる者　　”オペレーション・シンフォニア” と呼ばれているのですよ」

オペレーション・シンフォニア……クリュウとアドウ共に聞いたことのない言葉であった。

サリナは学生といふこともあり、その綴りを手に書いたりしている。

ルリに関してはそんなことまったく関せず、食事をメーメの口へと、親鳥が雛に餌を与えるように……皿がハートになつていた。

「これ、略すと”OS”になるわよね」

サリナがそういう。

「略されてそう呼ばれていたこともあるのですよ。それにしても、おかあさま？ 確かにおいしいのですけど、メーメはもう少し……

「う黒くなるまで焼いたほうが好きなのですよ」

「あらあら、メーちゃんはウェルダンのほうがいいのね」

皿の前の料理はステーキではなく、卵焼きであった。

「ちよつと待て！－”OS”つたらHSAに積む”オペレーション・システム”　　ライナーの飛走を支えるプログラムの」とじやねえか」

さらりと料理の話へと流れそうになつた話題をアドウは引き戻す。「システムといつのは気に入らないのですが……あながち間違いではないのですよ。作られたといつのとライナーを支えるといつ点では

は

「は？ 作られた！？」

皿の前のメーメはどこからどつ見ても少女にしか見えない。

「それに、お前が”〇〇”つてことはオレと一緒に乗るとでも叫つのか？」

「そりややうなのですよ。ところよつも、『じゅじんさまはメーメ無じでどうやつて”D5H495”『ディーゴ』を動かす氣なのですか……まったく」

やれやれとメーメは肩を竦める。

皿の前の少女が語る、自称作られたといつことでもり信じがために、更に彼女は一緒に自分を乗せると要求している。

「あー頭が痛くなつてきた」

「HSAに長く関わつてきたアドウは次々と語りられる、信じられないと耐えられなくなり席を立つ。

「後は好きにすれや」

そう言い残して。

「あ、私も今日宿題があつたんだつた」

「サリナまでもがそれに関わらなによつて、去る。

後に残つたのは、クリュウとメーメとルリ。そのルリも皿を片付けに台所へと行つてしまつた。

「と、言つわけで未永くよじつてお願いしますのです、『じゅじんさま』

「つまり、どうじつて…」

頭が混乱したクリュウは、虚空に向かつてわづ尋ねるしかなかつた。

「という訳で、《ディーゴ》の”OS”です

「メールなのです。皆さんよろしくお願ひしますのですよ

「されば、何の『冗談だ』、という顔で静まり返る。

（やっぱ信じてもらえないよな。というかオレも末だに信じられないし）

その静寂を破ったのは、やはりあの人物であった。

「んつフフフフツフ、ヒヒヒヒヒヒヒヒ

普段は一言も話さないくせに、一つスイッチが入ると不気味なぐらいに喋りだす、その声の主はウエマーであった。

「ヒヒヒヒヒ、フフフフフン

ウエマーは、腹を抱えて笑う。周りが静まりかえる中その光景は実に奇妙であった。

「ヒヒヒ、クリュウ君はまったく……いつもヒヒ、僕を笑い殺す氣かい？ ヒヒ」

笑っている本人は、いたつて可笑しそうであった。

クリュウは静まり返るほどおかしなことは言つたつもりであるが、爆笑されるほど可笑しいことを言つたつもりはなかつた。

「ヒヒヒッヒ、まったくどうしてそう君の中で結論付けられたか、ヒヒヒ、是非とも僕に教えてくれよヒヒヒ

クリュウは昨日出た話題とメールが《ディーゴ》の中にあつた力プセルから出来たことを、その欠片も持つてきて説明する。

「ヒヒ、それじゃあ、仕方がない。メールさんは”OS”なのだろうヒヒ」

この説明で納得するの？、と誰もがウエマーにツツ「ミミを入れたくなつた。

「クリュウ君もメールさんも嘘をついてないだらうヒヒ。ヒヒ、それにこんな嘘を付いたって意味がないだらうしね」

対して、ウエマーは、破顔する。

「ヒヒヒ、皆納得いかなそうだねヒヒ。そしたら、”OS”的性能試験の機械にでもこのいたいけな少女を掛けようじゃないかヒヒヒ

ウーマーはそう提案した。

「ふーん。で、結局結果はどうだったの？」

「それが……並みの”OS”以上の結果をはじき出したぞ」

アドウ家の居間。食後クリュウとサリナはソファで談話していた。近頃、はそれほど邪険に扱われることもなく普通に会話が出来るほどになっていた。

「ふーん。よかつたんじゃないの？」

サリナは興味なさそうにそう言つ。

会話もクリュウが一方的に話すことが多いのだが、それはサリナがHSAのことが嫌いなので仕方ないとクリュウは割り切つていた。それでも聞いてはくれるし、こうして話しているうちにHSAを好きになつてくれれば、という下心もあった。

「ふーん」

サリナは適当に相槌を打ちながら、雑誌をめくる。ページをめくつたり、戻つたりと繰り返している。

「そんなにその記事面白いの？」

なんども同じ所を読んでいるようなので、クリュウも気になり尋ねる。

「へー？ いや、面白く……なんてないわ……よ

珍しくサリナにしては歯切れが悪い。

「そなんだ。さて、」

いつまでもHSAの話ばかりしては悪いし逆効果だと思い立ち上がる。

「ま、待ちなさい」

サリナが静止する。

「こ……これ」

そう言いサリナは、何度も眺めていたページを見るよひに促す。そこには、

『スカイレイル・カップ開催ランク問わず。ただし、機乗するHSAはカスタム機（所有者が手を加えてあるHSA）であること。

試合はトーナメント方式で行い。トーナメント勝者にはエキシビジョンで大会主催者と2RBを行う権利が与えられる』

とあつた。

「これ……本当かよ……！」

クリュウは目を疑う。参加資格もカスタム機であるという点を除けばとても敷居が広い。現2RB環境において大企業の売り出したHSAをそのまま乗るという傾向が強いのだが、クリュウの『ディゴ』はそもそも原型が分からなく直しているものなのでこの条件は満たしている。

「サリナちゃん……」

「な、なによ……」

見つめられてサリナは動搖する。

まだ、HSAも2RBも嫌いなのに、とクリュウは感極まつてしまつ。

「べ、別にクラスの連中が話題にしていただけよ、アンタの為なんかじゃないわよ」

「じゃあ、HSA嫌いじゃなくなつたんだね」

「き、嫌いよ！ 大ッ嫌いよ……！」

サリナは雑誌を投げるよう床に叩きつけると、居間から出て行つてしまつた。

女心が分からぬクリュウには、サリナがこの記事を教えてくれたことも怒つた理由も分からなかつた。

クリュウはこの記事を教えてもらつた後、アドウの元へと急いだ。

「Jの2RBに出ると決めたことを報告するためである。

「……」

アドウは雑誌を見つめる。

「オレでも出られるだろ。」「」

大会の日にちも《ティーハ》の修理が終わる見積もりから見ても悪くはなかつた。

だがアドウは渋い顔をしたままであつた。

「オメエ……これに本当に出るのか?」

「なんか問題でもある?」

アドウの質問の意図が分からない。

「こいつは、ただの金持ちの道楽試合だらうが。エキシビジョンなんか設けて、わざと負けさせて自分が強いことをアピールしたいだけにしか見えん」

これは私設大会では良くあることである。賞金をつかませて、エキシビジョンで負けさせて自分の強さを見せる。よつは貴族の遊びである。

だからアドウは、2RBという用語を使わない。誇りも意地も情熱もないそのようにアドウの口には映つた。

対してクリュウには、そういう貴族の意図もアドウが^は軽蔑する意味も理解できない。クリュウとしては、2RBに出て、^は飛走る、そして勝つ。それが全てであつた。

「くーちゃんいる?」

ドアをノックしてルリが現れる。

「くーちゃん宛てにこんな手紙が入つていたんだけど」

その手紙には差出人の名前が無く、疑問に思いながらも中を開く。そこには、

「スカイレイル・カップの招待状?」

話題にある2RBへの招待状が入つていた。

1週間で3話、ネタはあるけど書くのが辛いです……日々の積み重ねが大事としつた異立児です。

私、テキストエディタで書いていて、どれだけ文量を書いたかを容量で図っています。

今回の話実は、3KBでこの後にまだ続く予定だったのですが、気がつけば10KBに……。

この辺の配分が出来てないあたりが……まだまだですね。

では今回はこの辺で。できれば沢山の人この小説が目に留まることが願って。

変な所の改行を修正しました

今日もアドウ工房脇の第一ハンガー……《ディーゴ》の周りは急がしそうである。

その中で動き回る十数人の内のほとんどが顔が皺くぢやの年寄りばかりである。

「ヒヒヒ、西は本当に面白にことを考えるね……ヒヒ」

「出来る?」

その中でも年齢が十代といつクリュウは、この《ディーゴ》というHSA^{ハイサ}の持ち主である。

クリュウは、EOM^{エオム}技師であるウエマーに《ディーゴ》に搭載するEOM^{エオム}をオーダーしていた。

「ヒヒ、原理的には可能だ。ヒヒ、魔雷で証明されたように、魔素を含む燃料から発生したモノには、魔素が宿るとされているからね、んヒヒ」

ウエマーは笑顔を崩さずに続ける。

「……ヒヒヒ、それにしても今まで無茶な相談はいくつも受けてきたことはあるが、これほど滅茶苦茶なのは初めてだ、ヒヒ。ンフフ、何せ君は、こんな年寄りに、今まで作ったことの無いまったく新しいEOMを作れというのだからね」

技術というのは、積み重ねがあり始めて進歩する。

「でも、滅茶苦茶なだけで、無理ではないんだなヒヒ」

クリュウがオーダーするEOM^{エオム}は、確かに今まで類似する物が存在していないEOM^{エオム}だ。だが、それを実現する為の理論は確かに存在する。だから、無理では決して無い。

「……本当にいいの? オレなんかの為に作つてもらつても、儲けはない……かも」

「ヒヒッヒヒ、そなのはどうだつてここのセヒッヒ」

ウエマーは周りを見渡す。

「ここにいる連中の誰もがそんなこと気にしないさヒヒ。奴らは自分の経験をその手に生かしたいだけ、ヒヒッヒ

そして、ウエマーは薄気味悪い笑みを浮かべる。

「ヒイヒヒヒ、それにね約束したとおり、”ぼくがかんがえたさいきょう”のE.O.Mを積ませて貰えるんだらうヒヒ。それならこれぐらいのお膳立てはしてあげないとねヒヒヒ

クリュウの背筋が一瞬凍りつく。先日ウエマーと約束したソレ……。無表情無口なウエマーをここまで高揚させてしまう程のものであるのか。クリュウには安易に口を出してしまった約束が、悪魔との契約であつたのかもしれないと思つた。

「くーちゃん？」

そんなときであつた。サリナの母、ルリが現れた。

「くーちゃんに、お客様よ。事務所に通してあるから、行つて来て」「分かりました。ありがとうございます」

そうルリに告げると、クリュウは事務所へと向かつ。

(誰だれ?)

そう思いながらクリュウは事務所の扉を開ける。

あけると、背広を着た男が椅子にも座らず立つたまま待つっていた。「ここにちは、クリュウ・イワザキ様ですね。私こういうものです」

そう言い、その男は名刺を差し出す。

名刺なんて見たことも無いクリュウは覚束ない手付きでそれを受け取る。

そこには、目前の男、トリオ・ナリタといつぞトアーリー商会といつ会社名が書いてあつた。

品良く微笑む彼は、クリュウが席についても立つたまま「コーコー」としているだけで、一向に席に付こうとしない。

クリュウが勧めると、よしやくトリオは席に着いた。

クリュウから見れば、トリオはまったく縁のない大企業同士が商談を行う場にいる……そんなサラリーマンに見える。

「実は、ここだけの話……貴方様だけにいいお話をあります……」

「そうトリオは小声で話す。

「こいついた物をご用意して参つたので御座います」

「鞄からパンフレットを取り出す。

パンフレットには、HSAのスペック表が書いてある。スペック表に目を向けるとトリオは続ける。

「実は、このHSA……あのアイザ・ヨーが乗つていた《スカイ》の兄弟機で倉庫で眠つていたのをこの度発見しまして」

スペック表には確かに、”ペントデュラム機構”といった《スカイ》に通じる物が書いてある。

「今なら、ご希望のローン回数でも金利が0……」

「いや、別にいらぬけど」

そう言い、クリュウはスペック表を戻す。

確かにいい機体だとは思うけど、今のクリュウには必要が無かつた。

トリオは度肝を抜かれたような顔をする。

「じゃ、じゃあ、貴方様の希望するお金をこ融資させていただくのはいかがでしょうか？ ここのローンといつのも我々の経営する銀行で行つてているものとして……」

トリオは未だに驚きを隠せずに次の提案を始める。これにはクリュウも悩んだ。

確かに現状、《ディーゴ》の修理に協力している人達に対価を払えそうも無い。

そんな時にこいつた良い話が飛び込んできたのだ。その話に聞き耳を立ててる人物がいた。

ルリにお茶を持っていくよに言われ、サリナはお盆片手に事務所の前に来ていた。

クリュウにお客だなんてどんな人だろうという興味もあった。

決して盗み聞きしよう、とかそういう事を思つていた訳ではない。
だけど、中から聞こえてくる、

『IJCだけの話』

だと、

『貴方様にだけ……』

それだけでなく、

『金利が〇』

という、怪しい言葉が飛び出すと黙つていられなくなつた。
誰がどう考へても真つ黒にインチキ臭いではないか。それも相手
はあのHSA以外まったく無知なクリュウである。

先日もサリナからみれば騙されて買わされた『ディーゴ』の事を
考へると……。

サリナは事務所に突入する。

「アンタ！ ちょっと何やつてるのよ……」

「な、何ですか、あなた！？」

トリオを引つ張り出す。

「こんな疑つことを知らない相手に詐欺をするなんて最低よ……」
追い出すように敷地外へと突き出した。

「良い話だつたのに」

と、クリュウは残念そうに言つ。

「アンタねえ……どう考へてもあんなの詐欺師の口実じゃないのよ
！」

少し強めにクリュウの頭をど突きながらも、サリナは安堵する。
(まつたく、どうして口いはこんなに騙されやすいのよ……)

今回は自分がいたから良かつたけど、そうサリナは思つた。

大2RB大会であるWCC締め切り間近となつて、マスクミ姉社
にとあるコースが飛び込んできた。

そのコースは、あのアイザ・ヨーがWCCに出走登録をしてい

ないというものであった。連日、記者達が、アイザの屋敷に通いつめるも彼女が出てくる様子は無い。WCCの執行部がアイザの家を訪れても門前払いという結果に終わると、新聞の見出しこには「いつたタイトルが乗るようになる。

『アイザ・ヨー引退か！？』

大企業クロバ工業ですらこの情報に困惑する始末であった。アイザを倒さずして、ギドレーがチャンピオンの称号を得たとしても、肩書きを拾つた形になりこれでは格好が付かない。

関係各所があたふたとする中、一人ほくそ笑む人物がいた。

「くふふ」

真っ赤でふかふかの椅子に腰掛けながら、テレビをつけながら色々新聞を広げては投げ、広げては投げを繰り返す。

「……お嬢様……それはあんまりにもお行儀が悪うござります」

ゴンドは主人であるアイザに忠告する。

「だつてえ～。くふふ、こんなに愉快な事つてある？ ほらほら……」

……『アイザ・ヨー引退か！？』ですってよ

もはや、アイザは可笑しくて可笑しくて腹を抱えている。

アイザの部屋は今カーテンも締め切つており、こんな行儀の悪いアイザを見るのは執事のゴンドだけである。趣味悪く、こういう算段を考え、ニヤニヤと笑うアイザを見るものがいればファンも減るのでないかと、ゴンドはため息をつく。

「お嬢様、WCC執行部からのお手紙が……」

「破り捨てなさい」

アイザの興味はWCCにはまったく無かつた。

関係各所が大騒ぎすればするほど、アイザの気は斯うとした。アイザはHSA^{ハイサ}とは無関係な口実で持ち上げられることに、ほとほと嫌気が差していた。

「そういえば、例の件はどうなったの？」

楽しげにアイザはそうゴンドに尋ねる。

「……実は、」

とうとう来たか、と『ゴンドは思う。』けれど楽しそうにしている主人の気を害しそうで黙っていたのである。

「失敗したそうです」

「は！？」

アイザは目を点にする。

「あれほど良い条件を提示したのに！？」

「それがいけなかつたのかと……逆に怪しまれたそうです」

「じゃあ、適度に怪しまれないようにしなさい」

アイザはHSAハイサ以外の事に関しては興味も関心も薄い。だからどうしてもHSAハイサに関係ない駆け引きに對して爪が甘い。その為のゴンドゴンドであった。

「そう思い指示を出したのですが、当人に接触出来なく」

「ああああ！！ もう、それじゃ意味ないじゃないの！ いいわ、

あたしが行くわ」

「いけません」

気がついたら即行動、年相応のアイザを『ゴンドは静止する。

「飛走都市までは、延べ2日も掛かります。間に合いません！ そ

れに記者会見はどうする気ですか？」

ゴンドゴンドは駄々を捏ねるアイザを引き止めるのに苦労した。

そして、WCC締め切り日が過ぎた。

「おいおい、何する気なんだ。あのお嬢様は……」

世間の注目を浴びるアイザの記者会見にチャンネルを向けながらアドウは呆れる。

この日ばかりは、アドウの工房で働く者だけでなく、第一ハンガーのクリュウに協力しているもの達までもが小さなテレビの前に集まり、部屋の中はひしめき合っていた。

テレビの中でアイザが舞台に向かう姿が現れると、沢山のフランクシューが焚かれた。

アイザは工房を訪れるときはまた違つた、貴族然とした格好で優雅に壇上に上るとスカートの端を摘んで一礼する。

大衆が囁くような、アイザの引退会見ではないと、ここにいる皆は確信している。

「お嬢様がHSAから降りたら、何も残らねえじゃねえか。第一そんナタマカよ」^{ハイサ}

引退で間違いないとコメントするテレビの中のアナウンサーをハタが笑い飛ばす。

『皆様、この度はあたくしの会見にご足労願い、まことに感謝いたします』

アイザの会見が始まる。

「ふつ！」

始めての一言で、既にアドウとハタは噴出している。彼らからすれば、猫を被つていてるアイザが変にみえて仕方がない。

『あたくしから申したいことが幾つか御座いますが……先に何名からかの質問を伺いたいと思います』

そうアイザが言つと記者のほとんどが手を上げる。

『では、そこの方』

『はい、自分は2RB田報の者です。皆が気になつてゐる事だと思いますのですが今回、2RBを引退するところのは本当なのでしようか？』

出て当たり前という質問が飛び出る。

『うふふ。あらあら、どうしてそんな虚言がでたのかしら？』

『こいつ狙つてやつてるだろ』

得意気に笑うアイザを見てアドウはそんな言葉しか出てこない。

『それは、アイザさんがWCWに出走していないからで……』

『それじゃあ、WCWに出ないと何故あたくしは引退してしまうの

？』

『うー…………』

その質問に記者は答えることが出来ない。

前回のチャンピオンなのだから出るのが当たり前だらう…………そついつ常識を皆が持っていたからこそ、アイザが勝ち逃げ引退をするのではないかと噂された…………これが真実である。

『ごめんなさい…………この質問は少し意地が悪かつたですね』アイザはそう謝辞する。

『あたくしがこの度WCCに出走出来ないのには意味があります世間が注目する回答が今…………答えられようとしている。

『あたくしは同日程…………菖蒲の29の日[あやめ]にとある大会の主催者として参加する予定です』

会場にどよめきが走る。

『その大会は既に出走を締め切り、優秀な…………』

アイザは視線を横にそらす。そこには「ハンド」があり、「ククク」と頷いている。

『…………ライナーが参戦登録をされております』

アイザの顔がアップでテレビに映る。

『またあたくしの方で一名に招待状を送つております』

テレビの前にいる全ての人物が今凍りついた。

写されているアイザはこの一言の間、少し自信なさげな表情をしている。

『もちろん出てくださる…………出でくれる…………よね?』
と、若干不安な声が混じる。

記者から質問が飛び出る。

『その2RBの名前は!?

『SC…………スカイレイルカップといいます』

テレビの前の皆の視線が一気にクリュウヘに向いた。

「こんばんは、呉蠻立児です。

今回の話は前回の伏線回収回となつてこます。

少々短めに仕上がつてこますが、「ほお」「くえ」と思つていただ
くと尺者的には嬉しい限りです。

今週はこの話でおしまいです。……本当に口口にアップはないで
すよ。ホントにホントですよ。

それぞれの思惑

アイザの記者会見は ^{ハイサ}HSA界を震撼させた。

現チャンピオン、Sランク保有者、最強ライナー、アイドルライナー等の様々な冠を有するアイザ・ヨーの発言力の強さが伺えた。表向きはWCCが2RB最高峰の大会であることは変わらない。だが、前回のWCCチャンピオンが別の大会を開催するとなると具合が変わってくる。

WCCはトーナメントながら挑戦者とチャンピオンの雌雄を決するという趣旨が強い。これがSCの開催 ^{ハイキシビジョン}によつて優勝者とアイザの決戦という条件によつて、WCCは一番の田玉を失つた。

アイザの行動は2RBのあり方を観戦者に問いかけるものである。2RBファンは、一体WCCとSCどちらを選ぶのであらうか。

IJは ^{ハイサ}HSAを販売する大企業であるクロバ工業。その中の2RB営業室、室長であるトチは、膝を揺らしながら椅子に掛けている。

「ほ、本社から、このような事が上がつていまして……」

彼の部下は冷や汗をハンカチで拭いながら、報告する。

「フン、たかが小娘一人が開催する大会が何だというのだ」

上からの命令に対してもトチは息を上げる。

トチは現在の職場が嫌いであった。彼はクロバ工業軍事部門の出身者の中でもエリート社員で彼の功績を会社が評価して2RB部門に転属となつた。だが、彼はそれを左遷と考えた。トチの中では ^{ハイサ}HSAを用いて2RBをすることは、"遊び"でありそれを許容することが出来なかつた。

「それでは、困る……そうです。このままではギドレー・マイルがWCCに勝つても知名度を得られないのではないかと」

「まったく、何が問題だというのだ。対抗馬が減つて良かつたではないか」

WCCはおそらくアイザがないことによって、ギドレーの勝利で終わるだらう。そうなれば、チャンピオンの座はギドレーの物となる。

2RBについて興味も関心もないトチは知らない。WCCが大きな大会へとなつていったのは、ファンの力があつてこそだ。チャンピオンという座もファンに認められなければただの自称に過ぎないことである。もし、WCCではなくSCにファン達の目が行けば、大衆からチャンピオンと呼ばれるのはアイザかもしくはSCの勝者であろう。

「そこまで言つのであれば、SCに出てる賞金稼ぎでも雇えれば良いではないか」

トチが考えた作戦はこつだ。

元々フリーの私設大会であるといつゝことで、賞金田的で出場する輩もいるのではないかといふことだ。その者を雇つてクロバ工業の力を使いバックアップをする。そして、賞金稼ぎが大会で優勝するというシナリオを作り出せば良い。

SCをぶち壊すという作戦であった。

「確かに、それは効果があるかもしれません」

部下は顔を顰めながらそう言つ。

「どうう？ だつたらすぐにSCの参加者リストを調べて来い！－トチは部下にそう命令を出した。

「せういえば、2RBといつゝ言葉を良く聞くのですけどそれってなんなのです？」

唇上がり、そんなメーメの発言は、周りの人間を凍りつかせた。確かに自称OSと名乗る正体不明のメーメの事だから知らなくても当然かもしけない。そもそも2RBという用語が生まれたのもこ

「50年ほどの話だ。

元々は人々の武器として生まれたHSA^{ハイサ}が平和な世において娯楽として空を走る競技として使われるようになつた、それが2RBである。

だが、改めて問われるとクリュウは困つてしまつ。

この時代に生きる人間にとつて、HSA^{ハイサ}＝2RB^{ハイサ}なのだ。たしかに軍事力として軍はHSA^{ハイサ}を保有しているが2RBのHSA^{ハイサ}に比べれば時代遅れな物も多く、機体も使用目的も魅力に欠ける。

（確かに、ルールぐらい説明しなくちゃだな）

メーメがOSとして《ディーゴ》に共に搭乗する以上必要不可欠なことであつた。

クリュウは、2つのHSA^{ハイサ}の模型を用意する。一つは修理完了後の《ディーゴ》をイメージした黒い模型、そしてもう一つはここでの制作を請け負つていた《ホープ》だ。

「2RBはスタート前にこうやってスタート地点に並ぶんだ」

そう言つて、クリュウは2つの模型を置くのではなく、手に持つたままで話を続ける。

「そして、スタートの合図と共に走り出す」

手に持つた模型を前に進ませる。《ホープ》を前に《ディーゴ》が後ろを走る形を取らせる。

メーメはこくこくと頷いている。

2RBのルールはそれほど厳密ではない。これは元々が軍人の飛走技術を競い合う模擬練習が2RBの由来まで遡るからである。ただ、試合という見世物の形態をとる以上お互いのHSA^{ハイサ}の力が均衡していくなくてはいけない。その為に規則は存在する。

例えばHSA^{ハイサ}に積むエネルギーを一つにしなくてはいけない、というルールがそうだ。ただ、これはあくまでスタート前までのことであり、《ホープ》のように飛走りながら発電するようなHSA^{ハイサ}は規定に引っかかるない。こんなルールの抜け穴もあるぐらい厳しくはないのだ。

そして、オーバーランという特殊勝利条件も試合を円滑に行う為のルールにあたる。お互に均衡した技術を持つライナー同士が戦うと、どちらも撃墜されること無く、2RB終盤ではお互に残りのエネルギーを気にしてEOMを使わず……そして両機とも停止してしまう、という余りにも締まらない結末を迎えたということがあつた。そこで出来たのがオーバーラン　規定の距離を走りきると勝利するというルールである。

このルールを見ると、ただ逃げれば良いと発想するかもしれない。だが現実はそこまで甘くない。ルール作成者も考慮したのであろう。オーバーランというルールと共に戦闘エリアというルールも実装された。これは簡単に言つてしまえば決められたエリアから出ではいけないというものだ、出ればそこで即失格である。直線に走り、逃げられない、これだけでオーバーランは難しくなる。

そして最高速度の問題である。HSAは、空にスカイレールを引き、その上を飛走する。つまり、スカイレールを描く以上のスピードを出すことは出来ないのだ。スカイレールをあらかじめ描いておくという方法もあるがこれは対戦相手に予め走るルートを公開しているも同然なので引いた箇所に先回りされてしまう。

そして近年、HSA単独　EOMを用いずに走るスピードが上がっていることもオーバーランを難しくさせている。EOMを使わずに攻撃に使用するというのが現在の2RBの戦闘スタイルである。戦闘は過激化し、2RBは民衆を誘惑した。

メーメに説明しながらによる模型の戦闘は《ディーゴ》が上を取り《ホープ》を迎え撃つ構図を取る。

HSAのOSとして生を受けただけあつてか、有利、不利、戦闘の考察等は当然のように出来ていた。

《ディーゴ》が下降を始め攻撃姿勢を取る。
「EOMを使用して……」

「今なの、殺せ！！　EOMで敵の腸をぶちまけるの」

クリコウは、ブツ、と唾を噴出した。それと同時に思わず左手に

持っていた《ホープ》の模型を落としてしまつ。

「敵機撃墜なの。相手はこれで海の藻屑……状況終了なのです」
もちろんＺＲＢにおいて、相手を死に至らしめる行為は最も行つてはならないことである。

クリュウはため息をつくと2つの模型を机の上に置く。

これはメーメに対しても根本的な意識改革が必要だと、クリュウは感じた。

「もう、駄目じゃない。女の子がそんな汚い言葉使っちゃ……！」

そう言つて現れたサリナは、机の上に置かれた《ディーゴ》の模型を手に取る。

「ふーん、憎たらしいぐらい良く出来てるじゃない」

サリナは模型と実物の《ディーゴ》を見比べる。

ＳＣに向けて《ディーゴ》の修復は80%程まで完了している。《ディーゴ》は他のＨＳＡと見比べても武骨な作りをしている。それは模型の《ホープ》と見比べても顕著であった。

始めて剥がした装甲は結局、鏽を落とし黒く塗装をして元の位置へと戻してある。

これはＳ系ＨＳＡが大きなボイラーを持つゆえ（いたし方）く仕方への無いことであった。通常のＨＳＡが纏うような装甲では敵の攻撃を受けて損壊する前に内側から溶解してしまうという、恐れを技師達が示したからであった。彼らの年の功もあって、《ディーゴ》の修復は順調であった。

問題点は、ＥＯＭ、燃料、ＯＳを残すまでとなつた。

「おーい、クリュウ……！」

威勢良く、古い扉が開かれる。現れたのは、タヌキであった。

「お前なあ……手伝ってくれるって言つたのにどこ行つてた」

クリュウもこの瞬間まで存在を忘れていた。

「ふふん、この俺様がいつまでもタダ働きをしてると思つたか？ という訳で、いい話を持つてきた訳だ。この時間だったら、まだオモリちゃんもいない……。

ツー？」

タヌキが呼ぶオモリちゃん事サリナと田が合図。

「わ、悪いクリュウ用事を……」

「この……詐欺狸、また騙して来たのね！」

「痛つ、痛！！ クリュウ助け……」

「さあて、あつちでお話しようか……お爺ちゃんも交えてゆつくりとネ。そうそう、約束を破つて逃げたこともしつかりと聞かせてもらわないと」

タヌキは悲鳴を上げながら倉庫から連れ出されて行つた。

その後しばらくして責めたタヌキがクリュウの元を訪れる。

「ホントにいいのか！？」

「……ああ、好きに使つてくれ」

タヌキは、魔炭石を調達してきたのだといつ。それをクリュウにタダで使わせてくれるといつ。

「おい、なんか裏でもあるんじやねえよな？」

タヌキはブルブルと一生懸命顔を横に振る。

「そうか……でも、タダじや悪いから稼げたらにつか払つよ
「期待しないで待つてるわ」

いつもはお金の話をするだけで田の色を変えたタヌキがこのときばかりはしおらしくしていた。

まるで獅子にでも睨まれて、巣穴に隠れ震える狸とでも例えれば良いのだろうか。

それぞれの思惑（後書き）

「ご覧くださいありがとうございます。」

今回の話はつなぎ的な意味合いが強くこれまでの話に比べれば言いたいことが余り無かつたかも知れません。
そして言えば「R Bのルール説明といった所でしょうか？」

この章、小説全体を通して、駄目な所、良い所等のコメント募集中です。小説を良いものにしたいのでは是非皆様の知恵をお貸し下さい。

メーメの冒険

夜も深く誰もが眠りについている時間、倉庫でガサゴソと動く月に写された影が一つ。

バリバリ

魔物が骨を食り喰うような音が、無人の倉庫に響き渡る。無人というのは言ひえて妙だ。なぜなら影は人型をしているのだから。だがそれでいて正しい。

ゴリゴリ

なぜならソレは人ではないのだから……。

「ゲフッ」

ソレは口から^{おぐび}を吐き出す。

そしておもむろに手に握っていた物体を投げ捨てる。山積みにされた石のようなものに当たり、ゴロゴロと崩れる。

「美味しくないの……とんだ粗末物なの」

袖で口を擦ると、口や頬といった顔の下半分が黒く汚れる。それを彼女は気にするでもなくトテトテと歩き出す。

工場は今日も急がしそうである。

そんなこと関係ないとでも言つようにハンガーの端で、少女が足をぶらぶらさせて座つてゐる。彼女は珍しい亜麻色の髪をしており、その身にはスカートのフレア部分がフワリと広がるドレスをまとっている。白と黒のコントラストが眩しい。

ハッキリと言えば油まみれのジーンズすがたで働く老人達が多いこの場所で彼女の姿形は見事に場違いであつた。

彼女の名前はガラメーメといつ。本人や周囲の者達は彼女をメーメと呼ぶ。

メーメはこの田の前で修理される《ティーゴ》の〇〇だ。だから、

飛走る以前では彼女の出番は無い。同じ身分であるはずの彼女の主人といえば、

「おじさん、ハイこれ」

「おうよ、アンちゃん働くねえ」

と、倉庫内を駆け回っている。その姿はメーメから見ても人間の子ども同然であった。

そうクリュウを感じたとしても、メーメ自身もその容姿通りに子どもである。

「よし！…冒険に出かけるの！」

思い立つたが吉日、メーメは立ち上がる。

スタスターと行進しながら外へと出るがそれに気がついたものは無かつた。

飛走都市の工業区をメーメが歩く。工房の敷地内を出ても彼女が周囲の視線を引くのは代わりが無かつた。

メーメはそんなことお構い無しとまでに道を知るわけでもないのに歩いていく。

工業区は、居住区ほど整備はされてはいない。道は石畳ではなく砂利道で舗装などされていないし、建物も歪に建築されている。そして、シャッターの下りた朽ちた工房も田立つ。

それでも、飛走都市スカイレイルと冠するだけあり、出歩いているライナーも多い。

中小工房が多い工業区というだけあり、職人やライナーも一見するとゴロツキに見えるガラの悪そうな者が多く、女、子どもはまったくという程見ない。

メーメは生い茂る乱雑な大木の合間に咲く一厘の花。木が倒れてくれば踏み潰されるそんな儚い存在に見える。

「おい、これ以上削れねえとはどういうことだ」

周囲に聞こえるほどの怒鳴り声が突然響いた。その声の持ち主は

はまるで対する相手を怖がらせる為に存在すのかという人物であった。まずは、その身なりである。平均男性よりも遥かに大きな2メーヤという身長、そしてその巨体を飾りつける鎧ともいえるである全身筋肉、極めつけがスキンヘッド……男はどこから見ても肉体言語派だった。

「そつは言つてもね、お客さんこれ以上は無理だよ」

工房の店員は客を刺激しないように言つ。

「どこも彼処も削り過ぎだ。これ以上やつたら、HSA自体が危なくなるよ」

確かに軽くすることはHSAのスピードと関連している。だが極度の重量軽減はそのまま強度の減少に直結する。

「それじゃあ、これ以上は早くできねえっていうのかあ……ああん！」

メーメはチョコチョコとした走り方で、強面の男に近寄る。

「ん？ なんだあ、お嬢ちゃんは？」

突如足元に現れた少女に対し、男はそう反応する。

「そんなんに、重量を落としたければ 自分自身のその無駄に無駄なく付いた無駄な筋肉を落とせばいいのよ」

HSAに乗るのであれば、確かにHSAから削るのではなく、体重を落としたほうが賢明かもしれない。見ただけでもその男の体重は成人男性の2倍はあるように見える。

確かにもつとも機体の重量を落とすよりも遙かに効率的な方法だ。だが誰もがその方法を提案しなかったのには理由がある。

「……」

メーメのその一言に周りが凍りつく。皆が恐れて言えなかつた一言、それを誰ともわからない少女が言つてしまつたのだ。

全ての者がメーメの悲惨な未来を予想した。大男がその気になればその少女など一捻りである。

「ああん？」

店主が目を瞑つた。

(「めんよ）

店主だって自分の命が惜しい。願わくば命を落とさないよつて、元気で祈る。

だが、待つても少女の悲鳴も殴るような音もしない。

店主がうつすらと目を開ける。

大男は確かに手を出していた。

その手を少女の方へと出し……その大きな手で……少女の手を握つていた。

「おお、その方法があつたか……」

「へー？」

その強面の顔を破顔させた。笑つている……とはいっても歪で恐ろしいがその男は、感謝していた。

「どうしてそのことに気がつかなかつたか、灯台下暗しとはこの事だな。ハツハハ、俺もまだまだだなあ」

男は、店長もその事に気がつかなかつただろう、と笑つ。

店長は取り繕つように微笑む。

「いい加減に痛いのよ」

メーメは掴まれていた手を振りほどく。

「おお、スマンスマン」

「それじゃあ、メーメは行くのよ」

メーメは手を振り立ち去つた。

工房を去つたメーメは居住区へと来ていた。

居住区は道も建物も整備されている。

正直メーメはここがどこかも分かつていない。

思つのは、HSA^{ハイサ}が全然無いの、それぐらいであった。

「あやー、カワイイ嬢ちゃんやねえ」

そう言つ声と共にメーメは頭を撫でられる。

メーメが後ろを振り向くとそこにはサリナと同じ服を着た女学生

ソラが立っていた。

「うわ、近くで見るとホントかわええなあ……。でもなんだろ、昔こんな格好した誰かを見たことある氣がするなあ」

ルリが製作したドレスを見てソラはそう思つ。

「なあなあ、アンタお持ち帰りしたらアカン?」

「アカンの!」

「そりやよなあ……」

「メーメは『じゅじゅさまの所有物なの。メーメが勝手に決めることは出来ないの』

メーメはそれとなく爆弾を投下した。

「えつ! それって……青少年だと健全でないと子どもの育成に悪影響を与えるだとかそういうことを……」

ソラは田の前の少女が不憫な田に会つてゐるのではないかと思つた。「それに『じゅじゅじんさまはメーメがいないとH.S.Aを走らせる』」とも出来ないの」

(あ、そっちの方なんか)

ソラは安堵する。恐らくライナーの従者か何かなのだらうと察する。

(それにしても、こんな小さな娘に「『主人様』と呼ばせてるんか。それに見るからに趣味が入つた服着せとるなんて、とんだ変態やな……この娘大丈夫やろか……)

ソラの中では完全にメーメは可哀想な娘だと勘違いされていた。だから、なんとか明るい雰囲気を出やうと話題を変えることにした。

今、飛走都市はソラの事で大盛り上がりだ。ソラの会話も自然とそちらの方に向く。

「それにしてもなんで、ギドレー様はこの街に来てくれんのや」

クールで俺様系なギドレーは女学生の中では人気があつた。

「メーメは知らないのよ、そんな人」

「そりなん? メチャカツコいいで。あーでも、彼氏にしたいかと

言えれば別やな。なんか扱いにくやつやし」

「ソルといえれば、メーメの「ソラ」じゃじょともも出るのよ」

（うわ、藪蛇やつた）

せっかく忘れさせてあげようと思つていたのに再び出でてしまつた話題にソラは頭を抱える。

空に夕日が浮かぶほどソラとメーメは話じんだ。とはいっても、ソラがメーメを猫可愛がりしただけであつた。途中、露天で焼き菓子を買つたりしたのだが、メーメは、

「焼き方が足りないの。もっと、黒くなるまで焼くの」と、素つ頓狂な注文を出して、店員とソラを驚かせた。

「アカン、そういえばウチ今日オカンに頼まれ」とわれとつたんやつた

ソラはメーメとの会話を終わらせる。

「ええか、メーメちゃん。何かセクハラされたら大声出して助けを求めるんやで」

ソラはメーメに釘を刺す。

メーメはソラの話の半分も理解してはいなかつたが「クククと頷いた。

「ほな、またなあ」

メーメはソラに言われたよつて歩き戻り工業区へと戻つてしまつた。

「ん、なんだかいい匂いがあるの」

クンクンと匂いを嗅ぐと、メーメ好みの美味しそうな香りがした。

「ココなの」

古いレンガ作りの建物がある。工業区にあるHSA^{ハイサ}が入るような大きな建物ではなかつた。

メーメがその建物をドアを開ける。

「わあ～」

その中は、ビーカーに入った魔油液や魔炭石といった様々な燃料が置いてある。

「おや……随分小さなお客さんじやのう」
カウンターに座る黒いローブを被つた人物がそう言った。

「メーメと対して変わらないのよ」

「な、なんじやと！　う、うおつほん」

黒いローブの人物は咳払いをする。

「で、何のようじや」

「特に用なんてないのよ」

店主と思われるその人物は驚嘆する。

この店は、言つてしまえば燃料屋なのだが店の雰囲気が黒魔術的
というか、いかにも門を潜りにくいく、敬遠されていた。

子どもに言わせれば、一種のお化け屋敷のような物だった。

「ただ美味しいそうな匂いがしたのよ」

「はて……そんなもの無いがの」

店の中には、燃料ばかり……後は店主の前にあるマグカップぐら
い。

「これなのよ」

そういうつメーメはカウンターの上にあつたマグカップを手に取
る。

「い、コラー！」

店主は椅子から取り戻そうとするも、背が低く安定していなかつ
たため椅子から転げ落ちる。

「へづつ」

その間にメーメはマグカップの中で湯気を立てる黒い液体に口を
つける。

「それはワシ以外が……

「お、美味しいの」

「う、嘘じや」

「本当なの、美味しいのよ」

転げ落ちて顔まで隠れるローブが剥がれ顔が露になつた

少女

は驚きを隠せないようであった。

「な、ならこれはどうじや？」

そういしながら、少女は小さな球状で青く透明な物をメーメへと差し出す。

「はむ」

メーメはそれを手で受け取る出なく、少女の手から直接口に入れる。

「手で受け取らんかー！」

「とつても甘いのよ」

「なん……じや……と」

少女は顎にてを当てる。

「……まさか……口……魔……体……？」

その声はぶつぶつと呟くのでメーメの耳には届かない。

「これも美味しそうなの」

「ゴクゴク

「いや……」

「こつちは？」

バリバリ

「なんじや、この音は？」

店主が考え方をしている間にとある異音に気がつく。

ふと目の前を見ればメーメがいない。

「な、なんじやあああ……」

見れば店内が荒らされている。もちろん犯人はメーメだ。

「こ、コラ。それは食べ物じや……」

少女の怒りが奮闘する。いくら言つても言つ事を聞かない。

「いいかげんにせぬかあああああ……」

「うわつわわ、お、怒ったの……」

メーメは一目散に店から飛び出る。

「こらああああ！」

少女も落としたロープを再び身に纏つと外へと飛び出す。

「ぎゃん」

メーメが男とぶつかる。

「観念するのじゃ」

黒いロープをはためかせ距離を詰める。

「ててて、なんだクリュウんとこのガキン娘じやないか」

メーメがぶつかった相手はタヌキだった。

「もつとよお、どうせぶつかられるならグラマラスな……いやでもこの体格の割には意外とオッパイが……」

タヌキの手はメーメの胸の部分にあつた。

「へ、変態なの……」

「はあ？」

タヌキはドンと突き飛ばされる。

「グヘ」

と、タヌキは子どもの力で弾かれた。

「……フフフお主、あの子どもの知り合いか……」

そして倒れた先には黒魔術師風の人気が立つていて、

その纏うロープ姿をタヌキも知っている。

「ゲ、お化け屋敷のババア……」

「誰がババアじや。その娘が台無しにしたワシの商品の代金を払つて貰おう」

「な、なんで俺様が……」

「問答無用じや！」

「ひ、ヒイー！」

タヌキはしづしづと「なんで……」と呟きながら店へと連行される。

その店は、飛走都市で最も古い……いつ代替わりしているのか分からない店主が営業する燃料屋である。

現在は、源の賢者と賢人会で謳われるタネという老人が経営する

近づくのも恐れられる歴史店として都市伝説になつてゐる場所で
あつた。

メールの冒頭（後書き）

先週アップ出来なくて「みんなさー」。

とこり訳で、続きます

変換出来てなかつた文字を修正しました

「ようやく形になつたなあ」

クリュウは《ディーゴ》を見上げてそう言つ。

《ディーゴ》はHSAハイサとしての機能は復元が完了した。ここに運び込まれた当初は鎔びていたボディも今では艶のある黒い塗装が施されている。

通常のHSAハイサとはまた違う重量感には圧倒される。

HSAのデザインに代表されるような風をすり抜けるような友好的なフォルムではない、《ディーゴ》はその体を走らせる為に肥大型した機構を隠す事無くある、故に走ると発生する抵抗に対しても直にブチ当たる暴力的な形状ともいえる。

完成は近い。

「後はウエマーさんのEOMエオムだけか」

外側は完成してもHSAハイサの核とも言えるEOMエオムは手付かずだ。

ドサッ、という重量感あるものを置いた音が聞こえる。

「…………」

その音の発生源はいつからそこにいたのかウエマーだった。彼はトランクケース大の箱2つを床に置いていた。

その箱こそがEOMエオムをCOMコムと呼ぶれるソフトウェアだ。これに魔素とエネルギーをCOMコムに流すことでEOMエオムが発生する。トランクケース大という大きさは、ソフトというにはハードだ。

「これが、《ディーゴ》のEOMエオム？」

そうクリュウが尋ねるとウエマーはすう一つと手をゆっくり合わせると緩やかに頷いた。

最近忘れがちではあるが、ウエマーは無口で無表情な感情に乏しい人間だ。だが、一度興味があること、愉快なことに遭遇すると突然人間が変わる。

無口なウエマーは非常にやりにくかった。

ウエマーは手で人差し指、中指、薬指、小指を立てる。

「これが4つあるって事？」

「^{ヒカル}OMは4つ、つまりウエマーが運んできたCOMが後2つはあるということだ。」

「後2つはオレが運ぶよ」

「そう言つてもウエマーは反応しない。ただ、端のほうにいるメー
メを指差す。

彼女を呼べ、ということをクリュウは語る。

「メーメ！」

先日は突然いなくなるという事件を引き起こしたメーメであった
が今日はハンガーの中で退屈そうに座つていた。

メーメはトコトコと走つて此方にやってくる。

複座で乗り込む《ディーゴ》はOSである彼女が細かい調整を彼
女が担うことになる。

「魔法なの、魔法なの」

メーメはトランクに手を当てる。

彼女は一見人間と変わらないよう見えるが、^{ハイサ}HSAの機構にこ
うやつて手を当てるだけで管理、発動することが出来る。

「インストール完了なの」

「いんすとーる？」

聞きなれない単語にクリュウはメーメに問いかける。

「メーメの中に、魔法をいたのよ」

その説明は余りにも拙く、率直でクリュウには理解しがたい。

「ヒ

だが、その短い説明で理解出来た者もいる。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ。つまり、こいつにうことかい、莫大
な保存容量を持つハードにソフトを、入れる インストールする。
そのハードはOSが管理しておりソフトを直接実行する。ヒヒヒヒ
ヒヒヒなんて効率的なんだヒヒヒヒ。そうすればこんな大きな木偶
の坊などいらない。ヒヒヒ。そうだ今すぐこれを海に投げ入れよう

じゃないか

ウエマーが壊れた。

それをクリュウは押しとめる。ウエマーにとつてはタガが外れてしまつほど画期的な運用方法だったのであろう。COMを持ち上げて叩きつけようとするものだから押しとどめるのに大変苦労した。「つまりバツ^{取つておく}クアップも大事だということかい。確かにその通りだね、ヒヒ。消えてしまつたCOMは元通りには出来ないしねヒヒ」と、納得した。

様々な困難を解決し、《ディーゴ》は飛走れる用になつた。

だが、HSAは何度も運用試験を繰り返して実用段階まで持つていく練習が必要となる。しかし、アイザのよう^{ハイサ}にスタジアムを貸しきつたり、対戦相手を雇う余裕などクリュウにあるはずはない。

「ふふふ、オレにいい考えがある

不適にクリュウが微笑む。

だ。

「それにしてもヒトだなあ」

『T-40』に乗るデオは、通信に乗せて同僚に愚痴る。

『もへ、しつかりやつてくださいよ』デオさん

彼の部下『T-201』に乗るロードはいつも忠告する。

「そういうこともなあ」

これはもう彼の口癖であった。もう数十年握つていらない武器のアリガーベを見れば、ため息も一段と増す。

「おめえの新型も泣いてるぜ」

『ハイハイ』

ロードの受け流しも何時ものことだ。

飛走都市の治安が……というよりもライナー達が馬鹿をやつて許可もなく飛走^{ヒツキ}まわっていた時期は毎日のようにアリガーベを握つていたと思いつ出す。

最近はそんな馬鹿をやる者もない。

「俺のイチモツが錆び付いたまつよ」

嘆息は止きない。

今日は風もなく飛走^{ヒツキ}るには良い日だ。

「なあ、俺とやりあわねえか

『馬鹿言わないでくださいよ』

『だよなあ』

ロードは眞面目^{ヒトハ}過ぎるのが玉に瑕だ。

『これは……HSAの反応?』

『どうしたあ?』

詰まらな^{ハサ}う^{ハサ}オはそう返す。

『飛走許可の出でこないHSAが背後から接近……』

『まつ』

じつやうデオの望みが叶う^{ハサ}う^{ハサ}氣配だ。

問題のHSAは2機の後ろへと着く。

『どうしますか?』

相手にはこちらが軍のHSAであることは分かつてゐるはずだ。ロドがデオに判断を求める。

「ちよいと待ちな」

暗がりなのでどんな形状をしているかは分からぬ。ただ燃焼反応物を燃やして飛走つてゐることを考えるとD系HSAだらう。

HSAが今は珍しいモノライトをパカパカと照らす。

「いい夜ですね」とお……クックク

『どういう意味ですか?』

デオは後ろのHSAがパッシングしてメッセージを送つてくれるこ

とを読み取る。

「つまりはデータのお誘いだ!!」

デオは操縦石に手を置きなおす。

「奴を押し倒せ!!」

デオは部下にやつ命令を出した。

『いいか。一手に分かれるぞ』

デオから指令が飛ぶ。

『どちらかを”大筒”が狙ははずだ』

デオは背後から近づいてきた正体不明のHSAを”大筒”と呼んだ。後方のHSA”大筒”的動態部分が円形状になつてゐる特徴を見てそう名づけたのだろう。

「つまり狙われなかつたほうが、奇襲をかけると」

『さすが、呑み込みがはええな』

ロドには彼が操縦席でニヤリと笑みを浮かべてゐる様子が目に浮かんだ。

併走していきた《T-40》が右に曲がる。それに合わせるように

ロドは《T-201》を左へと曲げた。

「あ、ドッチを選ぶ?」

”大筒”は右へと曲がつた。

『T-201』は奇襲を行うために上昇する。

「着いて来れるか！？」

デオは、『T-40』を蛇行運転しながら後方を確認する。

『T-40』は軍用HSAの中でも今となつては旧式の機体である。だが、あえて『T-40』を使い続けてきたデオはその有利不利も手に取るよう分かる。

『T-40』は過去現在に置いても抜き出るモノの無い汎用性を誇っていた。それは戦闘の際だけではなく、パーツ等の整備面でも言えることであつた。戦時に開発されたHSAなだけあり、少しの加工でいかなるHSAのパーツを積むことが出来るのだ。

その汎用性は、HSAを開発する企業からは煙たがられ現在はほとんどの『T-40』が退役を迫られているほどだ。

だがそのHSAを駆り続けるデオの『T-40』は見た目以外はほとんど別物である。

スペックだけを見れば、現役HSAに少々劣る程度でしかない。それに長年の経験が加われば、現役HSAを凌ぐことすら容易である。

「さすがに玩具は早いな」

軍人は、2RBに使われるHSAをそう侮蔑することがある。デオは貶している訳ではないがそう呼ぶ。

『T-40』が現役HSAと並ぶことが出来るのはあくまで軍用HSA間での話である。2RB用と比べれば、相手が惜しみなく性能に安定性を裂いてくる分、特に速度面は劣つてくる。

デオはテクニカルな動きを続け、相手のHSAにスピードを出させない用に飛走する。後を追つてこよつとするHSAにはこういった走法が効果的面である。

「うん？」

デオは”大筒”の奇妙な点に気がつく。

(思つたより、加速が悪いな)

両方の HSA に問わず HSA で最も求められるものは加速性能と旋回性能である。最高速度の差は EOM で埋めることが出来る。だからといって加速のたびに EOM を使うわけにも行かないだろう。2 対 1 である以上、大筒^{はし}は各個撃破を狙つてくると読むことが出来るからこそ飛走りである。

まして、相手は加速性能が低いのでこちらがテクニカルな動きをするだけで距離を保つことが出来る。

「そろそろだな」

『T-201』が奇襲をかけるタイミングをデオは予測し、蛇行

運転から直線運転に切り替える。

デオはそれでいて相手の攻撃に備える。

直線操縦をすること、"大筒"からすれば絶好の攻撃タイミングだ。

だが……来ない

「それならそれでいい。さあ、口ド頼むぜ」

デオは相方に思いを託す。

ロドは攻撃のタイミングを見計らっていた。『T-40』と"大筒"は蛇行運転でお互いに絡みあうスカイレールを描く。それ故、『T-201』は攻撃タイミングを図ることが出来ずにいた。

(来た!!)

デオの HSA のスカイレールが攻撃開始とのサインを描く。

『T-201』は下降を始める。EOM を撃つ為のトリガーに手を掛け……2 機の HSA が蛇行運転を止めた所を見計らつて、トリガーを引いた。

砲門から"火射"の EOM が無数と飛び出す。

軍用と 2RB 用では EOM の攻撃力に差が出る。前者は相手を如何なる手段を用いても落とすことを目的にしているのに対し、後

者は魅せるこ^トを前提としてスピードを追求する中でいかにEOMを割り避けるかと設計されているからである。『T-201』が装備する射筒もEOMを撃ち出すものだ。

EOMは使用法を限定すればするほど性能が上がる。例えは火のEOMを上げる。攻撃するのも速度を上げるのも手段は変わらない。だが、攻撃に限定することで敵機に与える威力は上がる。速度に関しても同義だ。だから、EOMは汎用性を求めるより特化させる。『T-201』の弾幕が”大筒”を襲う。

だがその直前、”大筒”が視界から消失する。

「な！」

それに驚くがロドの手は無意識に反応して『T-201』は旋回する。『T-40』と『T-201』は再び左右へと分かれることとなる。

『馬鹿！！後ろだ』

デオの叫び声が操縦席に響いた。

ロドの奇襲は失敗した。

突如として、”大筒”が夜闇へと消えたのだ。いや、消えたのではない。

「雲？」

夜間なので見難いが突如発生した雲のような物が”大筒”を包み込んだのだ。

そうデオは判断する。

そして次の瞬間、雲から飛び出た”大筒”が旋回した『T-201』の後方に付けるの目視した。

『馬鹿！！後ろだ』

そう檄を飛ばす。

”大筒”が手に持つた武器のような物から炎が沸き立つ。

(炎装からの火速か)

そう、デオは攻撃手段を予測した。

だが、”大筒”はまだ遠い位置から武器を振りかぶると……炎刃を飛ばした。

さすがにこれは予測不能であった。いや、敵が2RB用という時点で射撃エオムを用いない代わりになんらかしらの遠距離武器があることを予測するべきであった。

2RBの本質が敵の裏をかくということを体では覚えていた。だが、錆び付いた思考は咄嗟にその考えを表すことが出来なかつた。解き放たれた炎刃が『T-201』を切りつける。

『うわああああああ！！』

『T-201』はグラグラと体を揺らされながらも、なんとかスカイレールの上を走る。『T-201』は高度を落とす。

その瞬間、再び視界から”大筒”が消失する。

いや、消失する前にデオはその目で見た。

”大筒”の両肩から雲　　排気ガスを撒き散らす光景を。

「煙幕か！！」

夜闇に紛れる黒煙……確かに効果的な戦術である。

(おいおい、アイツは本当に玩具か……)

煙幕を張るHSAなど見たこと無い彼は、驚嘆する。

それでもデオは、『T-201』のカバーへと向かつ。

”大筒”は体制を崩した『T-201』を不意打ちするはずだとそう判断したのだ。

僅かに目を見張れば黒煙がトグロを巻きながら下降している。

デオは『T-40』は予めほぼ直角な角度でスカイレールを引く。これを下ることで『T-40』は凄まじいスピードを得ることが出来る。これならば『T-201』のカバーに向かうことが可能なはずだ。

だが、その走法は危険を伴う。その走りはほぼ落下と呼ぶに等しい。

しかし、デオはその走法 アングルダウンを身に着けた類まれな者だ。

『T-40』が下る。風と空気の抵抗がコックピットをガクガクと揺らす。揺さぶられ吐き気を催すをほどだ。

ブレークとスカイレールのカーブを利用して速度を落とす。

「カバー！」

そうデオが叫んだ瞬間だつた。

黒煙の中から”大筒”が『T-201』ではなく、『T-40』に襲い掛かったのは。

HSAとは思えない強靭な力で『T-40』は”大筒”に体を掴まれ武器である刀を『T-40』の首へと突きつける。

『デオさん！』

ようやく体制を持ち直した『T-201』がEOM発射の為の銃

口を”大筒”へと向ける。

「……待て」

それをデオは『T-40』の片手を前に出し静止する。

「俺達の負けだ」

そう口ドを押し留める。

その瞬間、『T-40』の拘束が緩んだ。デオの見立て通り”大筒”は両肩の煙突から煙を巻き上げると、一目散に逃げ出す。

『追いましょう』

「馬鹿、言つただろう。俺達の負けだ」

負けを認めたら、見逃す それが飛走都市のライナーと軍人の

いつからか出来たルールだ。

それにも、とデオは過去を振り返る。

（昔は追いかけるほどが出来ないほどHSAを壊したりされたもんだが、とんだ甘ちゃんだな）

走り去つた異型のHSAを思い出し苦笑する。

（この街も廃れたもんだと思ってたが。だが、あんなライナーがいるならSCCつていうのも捨てたもんじゃねえかもしねねえな）

知る良しもないが、この二人が負けた原因があるとすれば、相手が一人であると誤解していたことだろう。確かに彼らが戦った相手は単機であった。しかし、”大筒”と呼ぶHSA^{ハイサ}は確かにチームで戦つていたのだ。旧式よりも更に旧式と呼ばれる黒き重身は飛走都市へと帰路に着いた。

試走（後書き）

こんばんは、呉立児です。

今回は2話連続投稿になりました。

さてとうとう、ディーコも完成。スカイレールカップも田前となりました。

クリュウガラシでどのような飛走りをするのか。是非お楽しみいただきたいと思っています。

それにしても、ウエマーがキャラ濃すぎますね。

ご意見、ご感想お待ちしております。

『ディーゴ』が工房のハンガーに帰還する。

「ふう」

クリュウはよつやく息を抜く。

初めての自分の所有するHSA^{ハイサ}での飛走、2RBとは言えない空戦……手が震えた。借り物と自分の物とではこんなに違うのかと、体で実感した。

「じゅじんさま、あれでよかつたの?」

クリュウに続くよつやくメーメが降りてくれる。

メーメは先程の戦闘に不満があるよつやくだった。

「倒せる機会はたくさんあつたの」

確かに今回は積極的に攻撃を仕掛けることはなかつた。だが、メーメの言葉が2RBでいう勝ちに当たる意味を指していいことは分かる。

メーメの目的はあくまで敵機を撃墜することにある。おれらへ、『ディーゴ』やメーメはそういう目的のために作られたのだ。それをクリュウは薄々とは察していた。

だがクリュウの目的はそうではない。

メーメとの意識の齟齬は徐々に埋めていかなくてはいけないことにだと、改めて認識した。

『ディーゴ』に関しては、文句の言ひようがない出来に仕上がつていた。デメリットをメリットへと生かす クリュウの試みは成功した。

HSA^{ハイサ}のEOM^{エオム}は元々は余剰エネルギーを攻撃へと回すという試みから始まつたものである。

そして、クリュウはE系が生まれた理論に印を付けたのである。"電気に魔素が宿るのは、魔素が宿つた燃料を燃やした場合のみである。" という定義である。だから、クリュウが考え、ウエマーに

提案したのは、魔素が宿つたエネルギーで生み出した他の物質にも魔素が宿るのではないかということであった。

S系はHSAを動かすのに様々な過程を必要とする。魔炭石を燃やして発生した煙や水を加熱して発生した蒸気がこれに当たる。これにより《ディーゴ》は煙術や蒸術といった多彩なEOMを取得することに成功していた。

これは他のHSAには無い長所といえる。火をエネルギーとしていれば、火術を当たり前に使うという考え方の裏をかくことが出来るのである。

《ディーゴ》は、当に2RBをする為のHSAとして生まれ変わった。

S/C開催は目前である。

「さて、準備はいいか?」

アドウが用意したHSAに《ディーゴ》を積み込む。

S/C前日、ライナー達はHSAを会場へと運び込む。HSAの規定、即ち違法性が無いかを確かめる為に機体検査を行うのだ。

この日ばかりはアドウも協力を聞き届けてくれた。

「まあ、ここまで来たら気張れや」

「当然、勝ちを狙いに行くぜ」

はあ、とアドウはやれやれとため息を付く。

「ヒヒつ当然だろ、こんなに面白いHSAは他に無いやヒヒ」アドウがウエマーを引っ張る。

「おい、テメエの積んだEOMは軍の研究所にいた頃開発したものじゃねえか!?」

「ヒヒつ! そこまで突き止めたのかつ!! さすがだなアドウ」「御託はいい。資料は読んだぞ。ありやあ、とんでもねえものじゃねえか。2度に渡る起動試験の失敗……手足が欠けた奴までいるつ

て言ひじやねえか

アドウは怒りを露にする。それほど危険なEOMを積んだHSAにクリュウを乗せる訳には行かない。ウエマーの答え次第では、アドウは今すぐに『ナイー』を破壊する腹でいた。

「……」

「おい、どうなんだよ

アドウはウエマーを問い合わせる。

「ヒヒ、確かにあのEOMは、僕がアソコで開発したものさ

「テメ……」

「まあ、待ちたまえヒヒ。確かに当時は制御が完璧ではなかつた。だが、今は違うのさヒヒ

「アイツの乗るHSAは最新型どころか生きた化石じやねえか

「ヒヒヒ確かにね、まったくあんなのを直そうと思うなんて、頭のネジが馬鹿になつてゐるじやないか？ 君の虎の子はヒヒヒ

クリュウもまさかウエマーに言われるとは思つてもいないだろ？

「僕はああいうもの狂いが大好きなのさヒヒ。当然、死んで欲しくないから最善を忽くしたさヒヒ

ウエマーは安全だと言つ。

「それにしても当時の僕はどうして、気がつかなかつたのかなヒヒ。十分過ぎるほど装甲と巨大な動力炉ソレをもつてすればあのEOMが稼動することに……いやその条件を満たすHSAがまさかS系だとは夢にも思わなかつたよヒヒ……」

ウエマーは一度に渡る事故で研究所を追い出されたことを思い出し苦笑する。

「信じて良いんだな

アドウは念を押す。ウエマーがこんな所で戯言を言つ者では無いのは知つてゐるがそれでも不安要素は残る。

「ヒヒ、彼を信じなよ。彼の実力は本物を……そんじょ、そんじらの巧手とは訳が違うのは君自身が知つてゐるだろ？ ヒヒ

「……」

「それに彼の味方は、本当に最高の旧式だ」
ウエマーがクリュウのOSに視線をやる。

「まったく、過去の遺物にあんなものが存在するなんでどうかして
るよ……ヒヒ」

正体不明、いつたいどんな性格破綻者が作ったのか分からぬ。
到底、今の技術では再現のしようもない、未知の技術で作られたメ
ーム、彼女はクリュウを導くのであらうか？

そんな会話をアドウとウエマーはしたがクリュウの耳には届かぬ
い。

「それにしても、今更S系HSAなんて機険出来る奴つているのか
いヒヒ」

クリュウの行く道は前途多難である。

HSAは様々に社会に浸透している。《デイーゴ》を運んでいる
トレーラーだけで無く人が移動に用いるHSAも全てHSAである。
飛走都市スカイレイルは、今かつて無いほど賑わっていた。一種
のお祭りムードが街を支配している。

アイザが唐突に開催を宣言したSCは、WCCとあえて競合させ
ることによりファンを二分した。アイザの目論見は成功した。WC
Cという、ほぼ一つの企業が支配する王様候補を御輿に担ぎ上げる
大会より、SCという何が起こるか分からぬRBの方にファン
達は魅了された。

WCCが行われる帝都から遠い、飛走都市に観客が集まつた。

今回はアイザが突然に開催したものであるが、これが定例化し
た暁には今は奪われているHSAの聖地の座もいすれば取り戻せる
かもしれない。

飛走都市の住人は沸き立つていた。

そんな中、中小企業の期待を背負う期待の星が飛走都市公営スタ
ジアムに到着する。幾つも存在する、飛走都市の中でも最大の物
…そして、クリュウとアイザが試走したのもここである。

アドウのトレーラーが停止すると、クリュウは《ティーノ》に被されたブルーシートの隙間から顔を出す。

そこには既に先客とも言えるトレーラーが幾つか既に止まっている。そのトレーラーの貨車には例外なく見えないようシートが被されている。HSA^{ハイサ}の戦いは情報戦ともいえる。こちらがつまく戦うには相手を知っているのが一番である。

先に並んだ物から順に機険……機体検査が始まる。ここでは搭載されるエネルギー等ルールに違反していないかが厳重に検査される。

そして、クリュウの番が回ってくる。トレーラーが会場内へと歩みを始める。

SCの参加条件は事前に登録をし参加許可を貰っていることである。だから、参加ライナーは係員に自分の所属ランクと名前を当然言う。

ただ例外があるとしたら、クリュウ当人が到着した場合だ。う。そうクリュウには特権に近い参加資格が与えられているのだから。「名前と所属ランクをお申しつけ下さい」

受付嬢が問う。

「クリュウ・イワザキ。ランクは……じです」

2RBでは免許を持って、特に功績を上げた者でなければ初戦ではじランクに所属しているとされる。

「あと……これ……」

いつだしたらいいかと思っていた、アイザからのラブレターを提出する。

「これは?」

受付嬢は困惑しながらもそれを受け取る。

招待状を開いたとたん受付嬢の顔が驚嘆する。

アイザの招待状の送り主はマスコミがいろいろ推測をした。白羽の矢が立ったのはギドレーという予測がほとんどであった。アイザがクロバ工業を好いていないからこそその挑発ではないか、と各社が

取り上げたことから招待状の持ち主はＳＣに現れないと誰もが思い込んでいた。

それはクリュウの目の前の彼女も例外ではなく。まさか、受取手がまさか冴えない無名の新人だとは、驚愕の事実であった。それどころか招待状が本物かどうか疑つてしまふほどに。

だが、彼女も受付嬢……ポーカーフェイスを決して崩さない。まずは、虚偽を確かめる必要がある。だが、万が一本物であった場合こちらに非が無いように時間稼ぎが必要だ。

「では、新規ライナーの方にはこちらの書類を記入下さい。その後ハイサ HSA の機体検査に移らせていただきます」

クリュウは極めて純粋な人間だ。まさか受付嬢が自分を疑つているとは露知れず、喜んで書類に記入を始める。

その間に受付嬢は、アイザの関係者に招待状が本物か確認するよう手配した。

アイザは落ち着かなそうに、スタジアムの貴賓室をウロウロしている。

彼女は意中の相手を待つていた。

飛走都市スカイレイルに着いたのは一日ほど前であつたのにアイザは待ち人が気持ちを受け止めてくれたのか確認できずに、モヤモヤとした気持ちを引きずつっていた。そして今日、とうとうＳＣ前日を向かえてしまった。

静かに、丁寧にドアを叩く音がする。

「ゴンド？」

『はい。お嬢様』

「入つていいわ」

ドアの向こうにいたのは、アイザの執事ゴンドだ。

「どうしたの？ 確か設営を手伝っていたはずでしょ？」

「実は、係員方からこちらを預かりまして」

「ゴンドの手から一枚の手紙を預かる。

「これは」

見覚えがある、とある一名に送ったラブレター。

それが来たということは……。

「ああ……来たのねクリュウ……」

アイザは熱いため息を漏らす。

「それが、お嬢様問題点が一つあるのですが」

「ああ、貴方はどんなHSA^{ハイサ}に乗っているの。私の誘いを断つたのだから、きっととてもないものに乗つてゐるよね。ああ、知りた

い、でも知りたくないわ」

アイザはコツコツと革靴靴を鳴らしながら近づいてきたゴンドに気がつかない。そして、ゴンドは手に持つたメモするノートを降りかぶる。

このノートはゴンドが立つたままで使えるよう黒く加工された板が付いている。当然それを頭に降り下せば。

「聞けよ。HSA^{ハイサ}馬鹿」

「私は正気に戻つた」

アイザは頭をさすりながら、涙田でゴンドを睨みつける。ゴンドは暴走しがちなアイザを唯一律することが出来る人物だ。アイザとゴンドは主人と従者という間柄とはいえ兄妹のよう育つてきた。アイザがゴンドを兄のように慕つていた時期もあった。

「いいですか！」のままじや、意中の彼は大会に出られないのですよ」

「嘘！ どうして？」

「それは彼のHSA^{ハイサ}を機検出来る者がいないからです」

アイザは疑問を感じる。私設大会だとはいえ、整備士の費用を抑えたつもりはない、最高のスタッフを用意しているはずだ。

「彼……クリュウ氏が言つには」

「ダメ！！ 言わないで……」

アイザは口止めする。

アイザは、SCを開催するにいろいろな建前を言った。だが、建前に隠れた本音がある。アイザの戦いの裏をかけるライナーと戦いたい、それがアイザの欲望だ。

「かといって、どうしたらいいかしら」

アイザハイサは小首を傾げる。

ただのHSAに詳しい者では駄目だ、もっと詳しい者を呼ばないと。

一番最初に思い浮かんだのが、アドウ・オーラクスだった。だが彼は駄目だ。彼自体は公私を分ける信用が置ける人間だが、周りの人間はそうは思わないだろう。

「そうだ！！　ママがいたわ」

彼女が言うのは母親のことではない。アイザは貴族故に母親のことは「お母様」と呼ぶ。

「あの方ですか……確かに今この街にいるらしいですけど」

「それなら膳は急げよ。早く連れてきなさい」

「かしこまりました」

ゴンドは貴賓室を後にする。

少々お待ち下さい

そう受付嬢に言われてから、大分待った気がする。一向に『ディーゴ』の機体検査が始まらない。

「やつぱりか」

煙草を銜えたアドウがそう言つ。

「何不思議そうな顔をしてやがる。おめえがS系なんつう変な物持ち出すから弄れる整備士がいねえんだろ？」

このまま機体検査を受けられずに大会に出られない、そう言われた瞬間クリュウは激しく落ち込むだろう。

「ハア～イ」

突如、そんな空氣を断ち切るように気味の悪い声が聞こえた。

「！」、校長！？」

オカ……もとい、アカデミーの校長が現れたのだ。

「ドレス20着でアナタのHSA^{ハイサ}の機険をしてあげに着たわ！」

そういうてボウホは肉ダルマの体をクネクネとさせる。

正直言つて、

（気持ち悪い）

口に出してこうと、鬼教官が降臨したうので決して口にはしない。

「ワタシに任せたおきなさい……隅から隅までこのワタシがみ・て・あ・げ・る」

クリコウの後ろでメーメが震えだす。

ボウホは人外のメーメすら怖がらせる破壊力を持つていた。

「ごしゅじんさま……『ディーゴ』が……『ディーゴ』が汚されちゃうの」

「が、我慢しう背に腹は変えられない」

ドナドナヒトトレーラーで引っ張られていく『ディーゴ』を見送りながらクリコウは苦虫を噛んだ。

遠くから声が聞こえる。

『アラ？ パーツが一個足りないワ』

遠くからボウホがモデル歩きで……だが、漂つてくる気配は殺し屋の氣迫で戻つてくる。

足りないパーツと聞いてクリコウは後ろを向く。

「つ……」

ピキリとメーメが凍る。

逃げ出そうとするメーメの腕をクリコウはがつしりと掴む。

「放すの、放すのよ、ごしゅじんさま。メーメはただの人間なのよ

「グットラック」

そう言つてクリコウは、ボウホに生け贋を捧げる。

「アラ、こんなカワイイ娘がOSなの？」

そう言つてボウホはメーメを抱きかかえる。

「向こうで一緒にヌギヌギしましょうネ～」
ボウホはメーメに頬ずりをしながら、再びモーテル歩きで去っていく。

「いやああああ～～」

そう真剣に叫ぶメーメをクリュウは見送った。

戻ってきたメーメは、角でブツブツと一人言を呴きながらビニカ遠くを見つめていたと言つ。

そして日を跨いで、

スカイレールカップ 当日がやつてきた。

音花火がパンパンと空を鳴らす。

快晴の青空が眩しい。

『さあ、とうとうこの日がやつてきたぞ～～！　スカイレールカップの開催だ～～』

テンションの高いMCが飛走都市中に聞こえる程の大音量でアナウンスをする。

SCはWCCと平行して行われる。そして、最終日のHキシビジヨンはWCCの決勝戦と同じ日程で行われることになつていて。

今日は開会式の後、トーナメント表が発表され、その後すぐに一回戦へと移る。

『さあ、己が洗練されたHSAで、勝て！　飛走れ～～』

クリュウは気持ちが高揚して落ち着かない。

『そして、エキシビジョン。女王・アイザ・ヨーと戦うのは一体誰なのかな～～』

こうして、スカイレールカップは開催を告げた。

前日（後書き）

こんばんわ、呉立児です。

ネットがtmt……正直アップできなかもとあせりましたが無事投稿できました。

とうとう、次回からスカイレールパッチが開催されます。ご期待下さい。

感想・意見等を絶賛募集中で、是非気がついたことなど是非お知らせ下さい。

スタート

『ライナー達よ、己がマシン、己が技術で勝利を掴みなさい……』
貴賓席からのアイザによる一声で、スカイレールカップは幕を開けた。

開会式には、出場する8機のHSA^{ハイサ}が全て並んだ。
SCはこの8機によるトーナメント方式で行われることになる。
そして、このトーナメントの勝者がエキシビジョンへと進むことが出来る。

この並んだ状態はパドックという。RBはただのスポーツではなく賭博もある。観客はここに並んだHSA^{ハイサ}を見て一試合^{ハイサ}との勝者、大会の勝者を選択する。田^{ハイサ}が利く者あれば見た目だけでその戦い方を看破するであろう。

その中でも一際目を引くHSA^{ハイサ}がある。

漆黒の塗装を施し、胴体に大砲のようなシルエットを持つ重量感があるHSA^{ハイサ} クリュウが駆る《ディーゴ》である。

歩くたびに地響きがしそうな見た目、風を切る流線型とは程遠いフォルムを見た観客の一人は、

「あいやあ、見るからにハズレだな」と漏らした。

ライナーの情報を見れば、

まったくの無名の新人である。

「誰がアイツに賭けるんだ。ブブ」

クリュウたちは観客の冷笑を誘っていた。

「……」
「……」
「デオさん？」

「なんだあ……」

「デオとロードは本日非番であり、他にも休みの守備隊仲間と共に観戦に来ていた。

「あれ……”大筒”ですよね？」

暗闇ではつきりと見えなかつたとはいえ、あのシルエット、モノライトは見間違えするはずも無い。

「間違いねえな！」

デオが咥えていた煙草がひしゃげる。

「おい、デオ。オメエはどいつに賭けるんだ？」

デオの同期の一人が肩を叩く。

デオとロードの前には新聞が開かれる。

順当に行けば、開催試合毎に付けられる番号で言つと、3番のライナー・ワミが駆る《テンワイン》か8番であるヴァインという名の賞金稼ぎが乗る《オーツク》が本命である。

ワミは、典型的な優等生的2RBテクニックで徐々に功績を上げて来たBランクライナーだ。SC出場ライナーの中では最もランクが高い。

それに対しても賞金稼ぎのヴァインは、悪名が高い。資料上の戦跡はそれほどでもないが、野良試合を加えれば、勝率は計り知れない。「それにしても、あの4番は駄目だな。あんなのに賭けるのはよっぽどの物好きくらいだらうぜ」

その一言で爆笑が巻き起こる。

「アイツに負けるHSA^{ハイサ}乗りがいたら、そいつはHSA^{ハイサ}から降りたほうがいいぜ。クックク

「ああ、俺はアイツが勝つたら、魔油液をジョッキで飲み干してやつてもいいぜえ。おい、誰か賭けるよ」

「言つたな……」

デオが新聞を握りつぶす。

……

……

「言つたな……」

デ

その気迫は、近年誰も見たことのない物だった。

「来い！！」

「ちょ……デオさんー…？」

デオはロードの首根っこを捕まえて、窓口まで連行する。

「4番に全財産！！！」

ドン！と卓上に札束を叩き出すデオ。

「な、なんで僕まで」

泣きながら、大金を無理やり出されるロード。

その一人の蛮勇行為を端から見た物は、「正気じやない」「おい、馬鹿だ、馬鹿がいるぞ」「背中が煤けて見えるぜ」とか揶揄された。

「ヒヒ、随分な言われようだね

「当たり前だる」

ウエマーとアドウは話す。

「その割には、随分と払つたじやないかヒヒ

「はん……あれば香典みてえなもんだ

アドウは顔を背けながら半券で顔を仰ぐ。

「悪いいなあ、クリュウ。俺様は金が欲しいんだ」

タヌキは一人本命に賭けた半券を見てそう呟きほくそ笑む。

「お母さん、アイツの試合まだ？」

サリナは自宅でテレビの前にいるルリに尋ねる。

「まだよー。ベーカさんのＷＲＢは一回戦よ。まだ始まつてもいいな

いわよ」

サリナは先程から落ち着かなそつにテレビの前行つたり来たりしている。

「そんなに応援したいなら、会場に行けばいいじゃない」「ぶつ！別にそんなこと無いわよ！！」

「サリナは一眼散にいなくなる。」

ルリはまたすぐに来るだろ？とテレビに視線を戻した。

「そしていよいよ、一回戦が始まる。」

『「ゴオオオ！！ シフトカラーズ！！』』

MCのアナウンスと観客の歓声と共に2RBが始まる。

そして一回戦が始まる。

戦いは1番と2番の2RBだ。

速度重視の『ホワイトボード』がスタート直後、前を行く。二機のHSAは既に海上へと飛走り去つていった。

観客は戦いが映される大画面に釘付けとなる。

その中クリュウは、大画面ではなく一機が描くスカイレールを見つめる。スカイレールの軌跡はHSAの戦いの軌跡そのものである。「それに対して、無意味な改造してるなあ」

クリュウの横にいる、青年がそう分析する。

「無意味って？」

クリュウがそういうとその青年がこちらを向く。「見てみなよ、あの1番」

クリュウが拡大された大画面を見る。

高速で飛走する『ホワイトボード』が一瞬宙に浮いた。

「機体が軽すぎるんだよ。あんなHSAじゃ、小突かれた瞬間に落ちるのが山だね」

「そんなものか？」

HSAのセッティングは自分が望んだ最高の2RBを行うためにギリギリの改造を施すものだ、とクリュウは思つ。

「ギリギリの改造なんて今更流行りもしないよ。HSAの改造は緻密なバランス設定をして、妥協しながら行う物さ。ほら見なよ、ち

よつと接触しただけで……」

『ホワイトバード』がグラコと浮き上がる。

だが、なんとか姿勢を持ち直す。

「テクニックは確かにあるね。あれなら、無改造機に乗つても2番には勝てるんじゃないか？」

試合は危なげない場面が多いが『ホワイトバード』が優勢だ。

「第一、E.O.M無しであそこまでスピードを出す必要があるなんて、僕にはとても思えないね」

青年はそれに、「まあ」と補足する。

「重過ぎるよりは、軽すぎるほうがマシだらうけど」

用は皮肉だつた。

「これには、いくら鈍い、鈍いと言われているが、H.S.Aがらみといつこもあり、クリュウも気がつく。

力チンド来た。

だが、戦意丸出しなのはクリュウだけだ。青年はその気迫をさりりと受け流す。

喧嘩は空でやればいい。クリュウは『ディーゴ』に残したメーメの様子を見に戻る。

「まったく、次の相手の試合を見よつともしないとは……」これだから、新米ライナーは……」

まあ、初戦が勝てる相手で良かつたと、青年・ワミは安堵する。

クリュウにとつては次の相手も大事だが、『ディーゴ』のことも気に掛かる。熱くなりかけた気持ちを落ち着けながら、メーメの元へと向かう。

「どうだ、調子は？」

そうクリュウが問つと「ピックピットの下からメーメが煤けた顔を出す。

『ディーゴ』は他のH.S.Aとは違い、走る前にエンジンをかけるのではなく常に炉に火を灯しておかなくてはならない。

「素材が悪いのよ。煙ばっかり出るのよ」

「それならそれでいいんだ」

クリュウはタクティクスを練る。戦況は合わせる物じゃない、自分で作る物だ。クリュウはそう思っている。

『ディーゴ』は確かにじやじや馬だ。だが、そのコンディションによつて戦い方は如何様にも存在する。乗りこなせる程の腕と、それを管理するOSがそろつていれば、『ディーゴ』は勝てるはずだ。ようは自分次第だ。クリュウは自分自身に渴を入れた。

『Winner!! ホワイトバアアアアード!!!』

MCが盛大に勝者を伝える。

勝利の余韻も引かぬ間に第二回戦のアナウンスへと移る。

『2回戦は、Bランクライナー・ワミの『テンワイン』VS無名の新人Cランク・クリュウが乗る『ディーゴ』の2RBだあああ!!!』大画面では機体の外にいるワミがアピールをしていて、そのまま『テンワイン』に乗り込む光景までが映される。

会場に大歓声が沸く。

続いて『ディーゴ』が映ると、ブーイングとまでは行かないがパラパラとしたお世辞程度の拍手しか沸いてこない。

『では現在手元に入つていて、各機のプロフィールだ!』

『テンワイン』はクロバ工業の『283系』をデフォルトに、フクトリー・ニッスイのベンデュラム機構を搭載、EOMはあの有名EOM開発会社OUNYが作成している。更に、整備とメンテナンスは、これまた有名なピーアが行つている。2RBだけでなくHANSも隙がないぞ、ワミー!!』

MCは名だたる大企業の名を連ねる。

『それに対して、『ディーゴ』…………な、ななななああんとお!! 整備、メンテは、あのオーダー工房だ!!!』

オーダー工房といえば、小さい工房とはいえた人の記憶に名を残

した幾つものHSAハイサがある。近年ではやはり、アイザのHSAハイサ達であります。

会場にどよめきが起る。

『続いて基礎HSAハイサ…………じゃなくて、修理？復元？珍しい項目だがこれには…………といえずものすごい人数の名が書かれているぞ！』

MCは割愛する。

これには、

「馬鹿野郎！！ 習前を呼びやがれ！」

「ふざけんじやねえ」

と、いつた数人による野次が飛んだ。

『そして、EOMエオムは…………おいおいこれは本当なのか？ MADなことで有名なMr・ウエマーの名が書かれているぞ！』

「おい、馬鹿にされてるだ

「ヒヒ、褒め言葉だね」

ウエマーはほくそ笑む。

『ともかく、どうやら飛走都市の中小企業が送り出したHSAハイサのようだ。元となつたHSAハイサの記述もなく、不気味だぞ《ディーゴ》！』

161

「それにしても何なのかしらあれ？」

アイザ自身、パドックに並んだ《ディーゴ》を見た瞬間鳩が豆鉄砲を喰らつたような顔になつた。それに乗つてているのが他の誰でもないクリュウウらしい。

「まったく、一体何処まであたしの裏をかけば気が済むのかしら、アイツ……」

ふう、とため息を零すものの表情は緩んだままだ。

「さあ、飛走はしつて来なさい。あたしのいる口口まで」

一体クリュウはどうな走りをしてくれるのだろうか。

そんな外の様子を聞くでもなく、《トライ一ゴ》の中のクリュウと
メーメは調整にてんてこ舞いであった。

「じゅじんさま……もう限界なのよ」

「もう少しだ、我慢しろ」

クリュウは命令する。

「もう駄目……出ちやう、出ちやうの」

「もう少し、もう少しだから」

ここは何とか我慢してもらわなくてはいけない。

「あああん、爆発、爆発するのぉ」

メーメが弱気な声を出す。

『さあ、準備はいいか？ 2機ともスタート地点に付いてくれ
MCの声を合図に、《トライ一ゴ》と《テンウイン》はスタート地
点へと向かう。

『さあ、2回戦の始まりだ。3番^{テンカイン}VS 4番^{トライ一ゴ}……』

歓声が徐々に收まり静寂が訪れる。

『ゴー！ シフトカラーズ！』

「シフトカラーズ！」／『ゴー！ シフトカラーズ！』
クリュウ初めての2RBが今ここに始まった。

スタート（後書き）

こんばんわ。呉立児です。

飛走^{はし}りうと思つてたのに、飛走^{はし}らすに終わつてしまつた。
是非次回にじ^レ期待下さい。

黒き重身

2RBの開始の合図「シフトカラーズ」の声と共に2機のHSA
は動き出す。

『テンワイン』は緩やかに、しなやかに車輪を回転させる。

対して『ティーゴ』は様々な金属部品の軋み、そして蒸氣を巻き上げて車輪を動かす。

当然先に一步前に出たのは『テンワイン』だ。

『今だ。やれー。』

そう通信越しに対戦相手がそう声を上げる。

「ミは相互常に会話が筒抜けと言つ状態がいつも氣に入らない。EOM^{エオム}を発動させるには、スペルとして言葉を唱えなくてはいけない。これではこちらが何をするか相手に筒抜けではないか、と感じている。

（まったく、相手に準備させてしまつじやないか）

いつもそう考える。

2RBにおいて、何故相互共に通信回線を開いておくというルールがある。

簡単に言つてしまえば、無言での戦いは、"試合"ではなく"戦闘"だというのがルールが出来た理由である。

例えば、一人の人間が殴りあつていたとしよう。

『うらああああーー！』

『うおおおおおーー！』

そう一人が叫び声を上げるだけで、リングに上がつて戦つているように見える。力が均衡していれば観客から声援が送られるだろう。もしこれが、無言で行われていたとしたら、

『…………』
『…………』
『…………』

お互いはただ黙々と殴り続ける。確かにこれでは心が躍る”試合”ではなく、殺意が渦巻く”死合”としか映らないだろ？
それはそつだと言わてもワミは気に入らない。論理的に考えて戦いで何故声を上げる必要があるのかと。

クリコウの一聲と共に、空が色を変えた。その色は曇天 黒く
その色は広がり続ける。
シフトカラーズ

『おおおっとおおお！！』 これはどうしたことだ、《ディーゴ》！
！ 『これは事故かあ！？』

《ディーゴ》より前にいたワミには一体何が起ったのかが分からぬ。

ただ、あの煙に飲み込まれてしまつては、視界を失うことになる。
幸い黒煙が空を侵食する速度は速くはない。

ただ問題は、爆心地の敵機がどうなつたかだ。

ワミは《テンワイン》を停止させて様子を見る。
状況が分からぬ状態で無意味にHSAを飛走^{ハイサ}させ^はることは燃料
を無駄に消費してしまうだけである。

(ホントに事故だとしたら、あつけない)

だが彼はすぐに驚くことになる。

『あ、あれはなんだああああ！？』

MCの声が響いた。

「ゲホ、ゲッホ！！」

スタジアム内の誰もが咳き込む。

発生した黒煙が観客席へとなだれ込んでいる所為だ。

「なんだこりやあ……ゲホッ」

アドウは咳こむ。

『ヒヒ、ショッパンから飛ばすねえ』

咳とは無縁のぐぐもつた声が響く。

その声の持ち主はウエマーだ。

「て、テメエなんでそんなもん持つてやがるんだ」

ウエマーはガスマスクのようなものを顔に着けていた。息をする“”と「コーコー」と音がする。

『ヒヒ、そりゃあこうなることが分かつていたからね。なにせアレを作ったのは……この僕だからねヒヒヒ』

『ゲホゲホ、なんてはた迷惑なHSAなんだ……』ハイサ

公害をまき散らす HSA ハイサ に、アドウが怒鳴る。

『あ、あれはなんだああああ……』

その時見晴らしのいい密閉された解説室にいるMの声が観客の注意をひく。

黒煙が空気に紛れて薄くなると、空に一筋の光が浮かび上がつてくる。

それは空に渦巻き、上へと伸びている。

そして煙の晴れた空で、蒸気が入道雲のように巻き上がる。

『クツ』

『テンワイン』は焦つたように動き出す。

『ディー』は黒煙の中を潜り抜け『テンワイン』の上にいたのだ。

ライナーにとつて何の駆け引きも無く上位を取られたとすればそれは不意打ちに等しい。

『成功なの、『じゅじんさま』

『ああ……』

クリュウの作戦はこうだつた。

まずはEOM エオム ”煙散 カーボンスモーク” で敵の視界を奪う。

これにより、ピストンとクラランクを使って車輪を動かすという手順を踏む分、走り出しが遅く、攻撃的になつてしまつ危険がある。

それを《ディーゴ》は、スタート不安がある序盤を煙幕という手段で被弾無しで、やり過ごす更にスパイラルアップによって長距離を走ることによって加速時間を稼ぎだした。

そして今が《テン双赢》の上にいるという状況を作り出したのだった。

（悔っていた……）

ワミは、この状況を前にして後悔する。

ワミが、アイザの会見前に既にこの大会に参加を表していたのは様々な情報収集の結果からであった。当然、勝ち残ればあのアイザと戦うことが出来るかもしれない、もし叶わなくともアイザが主催した大会で勝ち残れば名声を得ることが可能であると踏んでのことだ。

HS A ハイサ 自体も、アイザと善戦出来るように仕上げて望んだ。だが、たつた一つ、ただの新米ライナーを舐めて掛かった結果がコレだ。スタート直後に上を獲られるという失態を犯し、観客の関心は全て《ディーゴ》へと持つていかれた。

（だが、そう簡単にいくものか）

敵機は明らかに未知の存在だ。戦績があるならそこから分析し予めタクティクスを組み立てるのも可能だろうが……目の前の敵にはそれが通用しない。彼の戦跡はこれから付いていくものだ。言つならば、新雪が降り積もつた雪原である。

ワミには分の悪い相手であった。

《ディーゴ》は当然、下へとスカイレールを引く。そして、《ディーゴ》は下降を始める。

ただでさえ重量のある《ディーゴ》は慣性を味方につける。（さあ、奴はどんなタイプなんだ？）

剣を抜いて火速を行うならファイターかもしない。だが例外もある。逃げに徹し、相手の隙を物理攻撃でしとめる。そういった、アウトローなファイターだつている。

大まかにファイター、ディフェンダー、ソーサラーと分類できると言つても、戦い方はライナーそれぞれである。それでもあえて分けるとしたら、攻撃、防御、E.O.M この三つの内、何にH.S.A 性能の比重を置いているかだろ？

等の『ディーゴ』自体何に分類されるかと聞かれたクリュウ自身も悩んでしまう。

2RBの戦闘スタイルから言えば、ファイター。だがその身を包む装甲を考えればディフェンダーに見えるだろ？

（だが、あえて言つなら……ソーサラーかな）

『ディーゴ』がグングンとスピードを上げる。これは、動力だけで動いているのではない。下るスピードも加わっている。

クリュウはブレーキをうまく使い、スピードが出過ぎないよう気をつけた。狙いを付けられないのでは意味がない。

（さあどう出る？）

クリュウは相手の出方を伺つ。

「そう簡単にやらせるものか！！」

ワミはこれでもいくつもの戦いを切り抜けている。

長期戦を見越して『』いるのか相手はE.O.Mを使ひ氣は無いように見える。

（だが、それは正しい）

すでに相手は一度E.O.Mを使用している。現在、『』テンワイン』が優位に立つて『いるのはその点だけである。

『』テンワイン』は逃げるのではなく、上へと登る。

こちらのH.S.Aは、盾こそ装備していないが相手の攻撃を防ぎながら攻勢に移るタイミングを計るディフェンダーである。

『ディーゴ』がこちらへと滑走していく。重身が「ひりくとすべり落ちてくるような勢いは見ていて恐怖心を抱く。

『ディーゴ』が腰から刀を抜くのとほぼ同時……『テンワイン』も片手剣を抜く。

（相手の攻撃を受け流す……）

振り下ろしていく角度を見極めて……剣激を繰り出す。
空中で金属同士^{ハイサ}がぶつかり合つ……火花が散る。
お互いのHSA^{ハイサ}が上へ、下へと……交差する。

どうやら『ディーゴ』は鍔迫り合つを望まなかつたようだ。『ディーゴ』が持つのは細身の剣である。あの速度でぶつかれば折れる可能性もあつたのだろう。

（だが、好機だ）

こちらとしてもEOM^{エオム}を使わずして攻勢を入れ替えることが出来たのは、実に好都合であった。

「初手で意表をつけても、所詮は新米ライナーつてことでいいのかな？」

『それはどうかな？』

2RBは長く見えるようで一瞬の戦いである。そこにあつては、得た好機で相手を仕留めなければ、あつとこう間に負けてしまう。

『こ、これはあああ……』

MICが再び叫び声を上げた。

「デオさん……見ました？ アングルダウンですよ

「ああ」

『ディーゴ』が見せた……いや、魅せた飛走は『デオの得意技の一つアングルダウンだつた。

ほぼ直角に下る、危険な走法である。その分速度を生み出す事が

出来る。

その後、《ディーゴ》はグルグルと螺旋状に……しかもスパイラルアップでもダウンでもない。

「スパイラルフランクとでも言つのかアレ?」「さあ? それでもあんな走りで、良く落ちませんね」

『魅せる、魅せてくれるぞ《ディーゴ》!!』

「な、なんだアレは」

ワミは驚愕せざる終えない。

直角に落ちてからの螺旋状に横に飛走^はる……無駄な飛走。どう見ても、スパゲティタクティクスとしか思えない。

「君は、曲芸士か何かか?」

ワミは勝利を確信する。こんなに無駄に飛走する相手にどう自分が負けるというのか、まったく検討が付かない。魅せるることは重要なかもしれない。相手がもし“勝つ”つもりであるというのならば最初の煙幕からのスパイラルアップで十分にインパクトがあった。確かに、新米ライナーとして重要なのは“勝ち”では無く“印象”なのかも知れない。注目のある大会でこれほどのインパクトがあればライナーとしても先程の口でも言つた曲芸士にでもなれるだろう。

(早々に決める)

こんな相手に一撃でも貰えば、後の試合に響く。ならば、次の一撃で決めてしまおう、ワミはそう考えた。

だが、

(場所が悪いな)

と、ワミはターンする。これならば相手が見れるようになると思つた。……だが、

「ツチ」

背後を見れば同じ軌道で《ディーゴ》が舵を切つている。

ハイサ
H S Aは背後への攻撃手段が乏しい。いや、持つていたとしても

相手に当たることが難しいのだ。

(ドッグファイトのつもりか!?)

背後から獵犬のように獲物を追い詰める
のものだ。

この状況を崩そつともう一度、ヒターンをする。

やはり『ディーゴ』は背後にいるままだ。

卷之三

（勝ちを狙いに来るでも無いくせに）

だが、試合を作っているのは《ディーゴ》の方だ。それがまたも

九
九
九
九

に付けてまだ。

そして、互いの高度の差も変わらない。

勝つ為に相手の後ろを付回す戦法が無いという訳ではない。だと
云ふ、五〇〇の高度の壁を突破するには、ハーハー。

相手の後ろを付回すという戦法が有効な手段となる。

高度を詰めるという意思があつてこそだ。もちろんその場合、後ろのHSAの方に負担が掛かってくるので優位はワミに来る。
だが、お互いの高度が変わらないとなると、負担がなくアドバンテージは無くなる。つまり、硬直状態が続く。

ただひたすらと、自分の後を付回す《ディーゴ》がじれつたくあ

りそれであり不気味だ。

「そろそろか？」

『ディーゴ』の操縦席でクリュウはほくそ笑む。

「ハリの読みとはまったく違い、もうひと手クリコウは勝ちを狙つて

し
る

『ディーゴ』の性能は基本的にどんなHSA^{ハイサ}にも劣っている。重

量は重たいくせに最高速度も加速も悪い、更に無駄が多い。これは現代の HSA から見れば、絶望的な欠点とも言える。

逆に優れている点があると言えば、S 系 HSA 特有のトルク性能である。スカイレールを登つたり、敵機との鍔迫り合いの時に押し勝てる性能とも言える。

だが、ことこの場面においてクリュウは徐々に登るといつ選択をしなかつた。

（攻勢に移られたら困る）

それがクリュウの考えていたことである。

相手に HSA の性能を生かした戦いをさせない。これがクリュウの戦術である。

最初の煙幕の EOM も、スパイラルアップ、アングルダウンといった飛走術も、その為に行つたのである。

（『ディーゴ』の上に居座つたことを後悔させよう）

4 度目の旋回を行つた『テンワイン』に対してもクリュウは攻勢に移ることを決意する。

4 度目の旋回……これにより『テンワイン』は一度飛走した場所をもう一度通る。

（今だ！）

『ディーゴ』はスカイレールを上に引く。

『な！？』

そう驚きの声が響いた。

デメリットをメリットとして戦うそれが性能的に劣る HSA で勝つ為の一本道だ。

「なんだこれは！？」

ワミは驚嘆の声を上げる。

何度もかの旋回を行つたか……分からぬが、その時の視界は再び黒い煙に包まれたのであった。

「まさか、奴めまたあのＥＯＭを……」

いや、だがそんな前動作はなかつた。現に、《ディーゴ》からはＥＯＭを使った反応は無かつた。

（ただ、両肩の排気口から煙を常に吐き出していた。ツクーー）

《ディーゴ》の狙いがようやく分かる。あれはただ悪戯に走つていたのではなく、この瞬間を狙つていたのだ。

（あの煙突は、ただ燃費が悪く廢煙を垂れ流しているのではなく……こういった戦いをする為だつたのか）

これは深読みだつた。当然、Ｓ系というＨＳＡを知らない世代か

ら見れば、あれほどの煙を撒き散らすのならば、飛走距離は長くないだろう、そう見当を付けてしまうのも無理はない。

実際はＳ系というＨＳＡを使う以上、大量の黒煙が発生するのはしかたがないことなのだが。

ワミは敵が考える次の一手を読む。

（当然、上に登つてくるだらつ）

ならば、こちらも死力を尽くさねばならないと、考える。

このまま黒煙の中、相手の土俵で戦うのと、一時離脱するのどちらが良いか。

もちろん後者である。そして、離脱するのは真に一時だけだ。

ワミは《テンワイン》をひっくり返し、ロターンさせる。

それはスプリットと呼ばれる、飛走術だつた。

「さすが、だな」

こちらの読みを看破し瞬時に離脱したワミをクリュウは尊敬する。幾つもの経験から最善の一手を導き出す。経験が少ないクリュウには真似の出来ないことである。

だが敵の最善の一手は、これからであった。

《テンワイン》はもう一度ひっくり返る。

『で、でたあああ

解説者が絶叫する。

そして、もう一度はスプリット^{テンウイーン}を行つた。

『一重・反転だ!!』

一回目の反転で方向を変え下り、その勢いを利用してもう一度反転を行う。ワミが持つ、最高の飛走術^{マニコーバ}である。クリュウが揶揄^{マニコーバ}されるような曲芸術とは違つ、無駄がない有益性だけを追求した飛走術である。

クリュウにも分かる。この一回目のスプリット^{テンウイーン}が成功したときに敵機が自分の背後に来るということだ。

(そうは……させない!!)

《ディーゴ》はターンを行う。

「ダメ!! 炉の火を上げろ!!

「がつてんしょうちなの!!

ダメは、魔炭石を炉へとくぐる。ただ新しくべた魔炭石が炉を舐めるようになるには時間が掛かる。

《ディーゴ》はターンをしたことにより、上位から《テンワイン》

『^{マニコーバ}を迎撃つ。

飛走術によつて一度高い所から降り、そして再び登つた《テンワイン》。

登つた所でやむ終えず降つた、《ディーゴ》。

一機が武器を持ち打ち合つ。

『出力を上げた割には……手ごたえがない!!』

《テンワイン》が《ディーゴ》の武器を掃い、腹部を一閃する。

「ぐうう!!

強い衝撃が操縦席を襲つ。

「胸部に軽度の損傷なのよ」

ダメが被害報告をする。《ディーゴ》の装甲は厚く、敵機が上昇中だったといつこもあり、損害は軽微だった。

クリュウがダメに指示を出して僅か1秒の出来事だ。

《ディーゴ》がスピードの加速に入るまでに2秒、新たな魔炭石

を投入して火が点き出力に影響するまでに5秒のラグある。

先程の指示は、これから展開を予測しての命令であった。

『ディーゴ』は切り抜けて再びターンする。此度のターンは、降りによる慣性を味方につけ、更にその間にラグを軽減させ、相手にそのことを感づかせない、飛走であった。

対して、『テンワイン』は、上空の黒煙が消えていないので避けるためには再びターンせざるを得ない。

そして一回合田、お互いのHSA^{ハイサ}が刀と剣を交える。

一度、甲高い金属同士がぶつかり合つ音が響く。

『ここに来てお互いの接近戦は互角！！』

MCの言葉通り、一回合田においてどちらのHSA^{ハイサ}にもダメージが通ることはなかつた。

これは、『テンワイン』が上昇して下降するまでの時間が短かつたこと……そして、『ディーゴ』のトルクの強さが影響していた。切り抜けお互いのHSA^{ハイサ}が三度ターンする。空中でスカイレールが8の字を描き続ける。

ここ、接近戦 ブルファイトにおいて上位を取るものが不利であるといつ、奇妙な戦いが展開される。

三合目が終わると、お互いともその事に気がつく。

「メール、炎装！」

「りょうかいな」

多量の魔炭石を放り込んだ火室の炎がメールのインストールしたCOM^{コム}によって「ゴウゴウと燃え上がる。

「炎装・香火車 フレイム・ラン」

メールが起動したEOM^{エオム}と同時に『ディーゴ』が加速した。

『メール、炎装！』

そんな声が聞こえた。

どうやら相手も上位を取れば不利になることに気がついたようだ。

ワミはクリュウの声からそれを判断する。

（敵機がスペルを必要としないのは何故だ？）

EOM^{エオム}を使用するにはスペルと言われる声紋による発動が当たり前となつていて。それがHSA^{ハイサ}の操縦には両手足を利用してする為か、それとも魔術^{エオム}というものがスペルを必要としているのか、分かつていない。EOM^{エオム}とは声紋発動するものだ、という常識があるのである。

そしてスペルは会話に支障が出ないように二つの言葉から構成されている。例えば、”火速”^{火速}”ブーストアップ”^キは、”火速”と”ブーストアップ”の鍵^キで構成されている。

それをクリュウは、短く指示を出すだけで発動させていた。

（いや、始めからそうだ……敵機は分からぬことが多い）

ワミの得意な戦い方は、今までの相手の戦い方を分析して、隙を狙うこと。そう言う意味では新人であり、特異な戦い方をするクリュウは戦い難い相手であった。

ワミは、クリュウの短い言葉から刀を点火し攻撃を強化してくるだろうと読んだ。

「防炎 フレイム……」

ワミが防御のEOM^{エオム}を唱えようとした瞬間……《ディーゴ》の車輪が火を噴いた。

予期せぬ加速。《テンワイン》は胴に一閃を浴びる。

「うおおおおおお……」

《テンワイン》はディフェンダーなので装甲は厚い。それでも下手をすれば負けに繋がりかねない致命的な一撃であった。

ガタガタと振るえ悲鳴を上げる機体を押される。

装甲が厚い胴にダメージを負つたことが不幸中の幸いであった。エンジンを持つ胴部分は確かに停止させることが出来れば、一撃必殺と成りえる。だが、不発に終われば意味はない。

敵は再び好機を逃したと言える。

『まさか、炎装からの加速を乗り切るなんてな』

敵機から驚嘆の声が上がる。

確かに言葉で誘導された節がある。

(だが、一度目は無い)

ワミは無言で敵機を睨みつける。

「火速 ブーストアップ」

2RBも終盤。出し惜しみはして置けない。

ワミは対抗して、速度上昇のEOM^{エオム}を発動する。

加速したまま上昇して……ペンドュラム機構を利用し、機体を横に倒す。

(速度は勝った!!)

上昇中に加速しそのまま下降することによってスカイレールを描く速度と同速 ギリギリの速さを《テンワイン》は得る。

このままぶつかり合えば相手の脱線を誘える……そういう展開だつた。

『ポイント!!』

《ディーゴ》のスピードが減速した。それとほぼ同時、今度は《ディーゴ》の持つ刀が炎を噴いた。

火速した《テンワイン》と炎装した《ディーゴ》が四度ぶつかり合つ。

刃を返し峰で相手の剣を受け止める。

もしこれが通常のHSA^{ハイサ}であれば脱線して当たり前だつた。だが、《ディーゴ》の持つ超重量とトルクを最大限利用し、腰を下げることによつて《テンワイン》の剣激を受け止めることに成功していた。炎を点す刀はジリジリと相手の装甲を焼く。

『クつ!!』

速度によつて下に押されてはいるが、《ディーゴ》の炎装は少しずつ《テンワイン》にダメージを与えていく。ただでさえ胴に一撃

を浴びた身……持久戦は望まない筈である。

『テンワイン』は一度機体を下に押し込むとブルファイトから離脱する。

(この瞬間を待つてた!!)

クリュウは勝利への道筋が見えた。

通常であればこのままドッグファイトへと持ち込む場面……だが、クリュウは『ディーゴ』を相手と逆の方向へ飛走させる。

『な、なんだとおおお!!!!』

MCと観客が驚きの声を上げる。

更にクリュウはワミに言わせれば曲芸藝術 マニアバ スパイラルフランク

で渦巻き状に横に走る。

それに気がついた『テンワイン』は直ぐに、スプリット ディーゴ 反転後、火速を追いかける。

差は直ぐに近じまる。

「ふふ、決まるわ」

アイザは始めからクリュウが何を狙っているのか分かつていた。あくまで勝利する為の一つの可能性だということも知つてのタクティクスであることも。

相手が慎重に勝利を狙うタイプ……長期戦を予期しての戦術、やはりクリュウは面白い。

アイザは笑う。

「ありやあ、決まつちまつな。あの馬鹿、大っぴらに宣伝しやがつて」

「ヒヒ、それでもやはり虎の子。まさか初戦での勝利方法を選ぶなんてね。ヒヒヒ」

アドウは苦笑し、ウエマーは奇笑する。

「なんで逃げるのよ！… 勝利は日の前じゃない！？」
サリナは勝利目前のクリュウの愚策に激情する。

『テン双赢』が『ディーゴ』に接触するその瞬間……スタジアムが出来て一度も鳴ったことのないブザー音が会場中に響いた。

『はつ！？』

解説をするMCはすっとんきょうな声を上げる。

特定の人物を除いた会場中の会員、そしてワニ。

そして、大画面に映される、"W i n n e r N o . 4" の文字。

それは『ディーゴ』が勝利したことを表していた。

『ど、どういうことだ！？』これは、システムの故障か？』

『テン双赢』が戦闘不能になつてもいよいよ表示される勝者の文字、誰もが疑問を抱いた。

とある文字が続いて出てくる。

”O V E R R U N”

と浮かんだ。

数十年の間、誰も遂げたことの無い、過酷な勝利条件・オーバーラン……まさしく偉業が達成された瞬間であった。

黒毛重身（後書き）

先週アップできなくて『メンナサイ！！

こんばんは、呉鑑立凡です。

今回の話はいかがだつたでしょうか？ 戰闘状況が浮かんできてい
貰えたらと思い頑張りました。
気がついたら一倍の量になってしまい、読みにくいかもしれませ
ん。

「意見」「感想等」をござましたら、是非よろしくお願ひいたします。

『お、！ オ――バ――ラアアアアアン――』
MCの勝利宣言。

静寂に包まれていた会場が、

「――うおおおおおお――！」

一瞬で沸き立つ。

誰も見たことの無い、飛走が認知された瞬間であった。

『手元にある資料によると、オーバーランが達成されたのは36年も昔だ。すごい……すごいぞ《ディーゴ》！』

MCが声を上げる度に巻き起こる歓声。

2RBが始まる前までは一度も起こらなかつた声援が一変、スタジアムに戻ってきた《ディーゴ》に浴びせられるのは熱狂的な歓迎の声だけである。

クリュウは名だたるライナーの仲間入りを果たしたのであった。

コックピット内はものすごい熱気で茹だつてゐる。

火室とう言つ機関で火を轟々と起こす《ディーゴ》はコックピットを含む腹部が加熱する。

クリュウは汗まみれ、

メーメはススまみれ、

《ディーゴ》から降りた二人は小汚いくなつてゐた。

それでも沸き起こる歓声は、感じることが出来る。

明らかに旧式のHSAハイサで勝利を勝ち取る……それもただの勝利ではない、オーバーランという特殊勝利条件を用いて、クリュウの目論見は見事成功した。

「これがごしゅじんさまの目指していた勝利なの？」

メーメの知る勝ちとは、敵機を撃墜することだった。対するHS

『これがごしゅじんさまの目指していた勝利なの？』

ハイ

△を破壊する」と、じぶんに記憶されているのとはまったく違つたもの。

「そうだ、これが”勝ち”だ」

過去も今も偉業を達成した勇者には民の歓声が与えられる。

メーメは呆然としながら、この声を受け入れる。

『ディーゴ』から遅れて、『テンワイン』がスタジアムへと帰つてくる。

『テンワイン』のコックピットが開き正に”やられた”と言わんばかりの顔で降りてくる。

「この野郎！！ テメーに賭けていたのに！！」

そんな野次が歓声に混じつて飛び出す。本命とも言えるワミに投票していた者は大勢いたはずだ。

「やられたよ」

野次を気にせずワミはクリュウに声を掛ける。

「いい勝負だつたぜ」

クリュウは笑顔で、手を差し出す。

「楽しかつた！」

「楽しかつた……か、君はまるでアイザさんのようにだね」苦笑したワミはそう零す。

ギュッと握手した手をワミは強く握る。

「……いいか？ こんな手一度と僕に通じると思うなよ」

今回のオーバランによる勝利は初めからそれを狙つたモノだった。これはこの勝利方法が忘れられていたからこそ出来たことだ。一度目、同じことを実行すれば相手は全力でこちらを攻撃に来る。

一見、恨み言のように聞こえるが、ワミの顔は憑き物が落ちたような笑顔だった。

「次は僕が勝つ」／「次もオレが勝つ」

お互いが強く手を握り閉めた。

「僕に勝つたんだ、絶対に勝てよ」

そう言つてワミは似合わぬ台詞を残して去つていった。

クリュウは一回戦に勝利した。臨むはトーナメント一回戦目。こちらを見つめる2メーヤほどの男がいる。1番を駆る彼が次のクリュウの相手である。己のHSAだけでなく、自らの体も限界まで絞った　あまりに華奢な体躯が印象的だ。

何処まで削れば気が済むのだろう。といつより髪まで削る必要はあるのだろうか？

その男はスキンヘッドだった。

その次戦は、明日のトーナメント一回戦第一グループの2RBが終わった次の日　明後日となる。

「良くやつたぜ、アンちゃん！…」

スタジアム内の『ディーゴ』に『えられたハンガーへ戻ると、クリュウは皆に迎えられた。

本当にクリュウが勝つと思っていたものが少なかつたのだろう、「まさか、勝つとは」そう顔に書いてある者が多い。

「ヒヒ、僕は勝てると思つていただけどねヒヒヒ」

そう言つウエマーもスイッチが入りっぱなしである。

「それにしても初戦からオーバーランを決めるなんて、次の試合はどうするつもりだ？」

皆が笑顔だと言つのに一人だけムスつとした顔でアドウが言つ。

「もちろん、勝つさ」

アドウが言つことにも一理ある。確かに認知されていない勝利条件を狙うなら絶対に勝ちたい決勝戦まで温存しておくことが得策だつた。相手がワミという、情報戦を主眼においたライナーであつたから綺麗に決まつた。これが臨機応変な戦いを得意とするライナーだつたならば、結果は違つていたかもしれない。

その位のことはクリュウだつて分かつてゐる。今回の戦い方は相手が自分を知らないことを前提に組み立てたタクティスだつた。だからこんな戦方はもう一度と通用しない。

「皆、機体調整よろしくお願ひします」

「おう！」という掛け声と共に皆仕事に取り掛かる。

「HSAのダメージはほぼ無しか」

ダメージを受けた部分も筒状の胴部分に一撃だけである。火室やボイラーを持つこの部分は《ディーゴ》の中で最も装甲が厚い部分である。

だがそれは、もし破られれば走行が不可能になることも意味する。

「アンちゃん、気を付けろよ」

「ああ……」

次走の相手を考えると、今回よりダメージを受けることは必須となる。

《ホワイトバード》は《テンワイン》と同じく《283系》を基礎とするHSAだ。だが、カスタムコンセプトが《テンワイン》とはまるで違う。

加速に重点をおき、極力限界まで削った機体重量　これが示す意味は、

「スピード重視のアウトロー型アタッカー」

と、なる。

しかも、それだけではない。無茶な改造を施している割に機体が安定している。初戦において危ない面も幾つもあつたがそれを切り抜けてきたことを考える。

「しかも、臨機応変な戦い方が得意なライナーか」

「フミとは逆……戦局に合わせた戦い方を得意とする野生的なライナーであると考える。EOM無しでHSAスペックを前面に押し出した戦いは、《ディーゴ》が最も不得手とする戦い方である。

「ま、考えても仕方がねえ……なるようになるぞ」

「さっすが、『じゅじんさま』

呴くクリュウにメーメが呼応した。

クリュウ達は先に帰ったアドウから遅れる形で家に戻った。

引き戸を開けるとルリが出迎えてくれる。

「ただいまー」

「ただいまなの」

「あら、お帰りなさい。すごかつたわねえ、くーちゃん」
ルリはクリュウが得た勝利を我が子のように褒めてくれる。
「そりそりテレビでもくーちゃんのことばっかりやっているのよ」
正直、パドックの時点で新米ライナーの相手が、本命ライナー・
ワミとなつた時点で勝利がどちらになるかなんて予想が付いていた。
それをひっくり返してしまつたのだから注目されるのはある意味
当然であった。

テレビの特集によれば、クリュウvsワミの試合の投票では、ほとんどの人間はワミに賭けていた。よつてクリュウのオッズ 払戻金の倍率は98倍であった。最低掛け金の100ウエンを賭けた場合9800ウエンとなつて返つてくることになる。

もちろん《ディーゴ》に賭けた者など片手で数えるほどしかいな
いのだが。

特集ではこのようなことも言つていた。

もし、クリュウ氏が大会に勝つことがあれば、その配当金は100倍を超えるでしょう
と、言っていた。

もちろん、《ディーゴ》の機体説明までされている
S系は魔炭石で動いている

ということから、
加速には時間が掛かる、また、魔炭石という燃料を用いている
から重量が重い
などという欠点が羅列され、

まったくもって、現実的ではない

そり、専門家からは貶されてばかりであった。

彼が勝つたのは偶然でしょう。そうでなければ、新人がまして
やオーバーランで勝つなんてありえないでしょう

「なんだとおお……」

「まったくしつれいしちゃうのよ」

「一人は息巻いてテレビに囁り付く。」

その後、テレビの特集は、

では、次回の『ディーゴ』の飛走に期待しましょう

そつ当たり障りの無い台詞で終わりを告げた。

「どうでもいいから……」

テレビの横で椅子に座っていたサリナがワナワナと震えだす。

「ばっちりからさつさと風呂に行けええええ……」

汗で汚れた男と煤まみれの少女は居間から追いで出された。

「せなかをながしてあげるのよ」

そう言われてクリュウとメーメは一緒に風呂に入る」となった。メーメの服は借り物なのでアドウ家と同じ洗濯物入れに、クリュウのは後で自分で洗濯するので端のほうに避けて置く。

「オレより先にお前の髪を洗おつ

メーメは亞麻色の髪がまるで錆びたかのように薄黒くなっていた。

「ほら、田瞑つてろ」

そういって頭からお湯をぶつ掛ける。

「む～～」

クリュウは石鹼を手に取りわしゃわしゃと泡を立てる。

こうしてメーメを見ているととても彼女が作りモノだとは思えなかつた。

田じりに皺を寄せて必死に田を瞑る姿は年相応に見えるメーメだが、『ディーゴ』に乗っている間はその有能さが良く分かる。

例えばライナーとOSが3秒かけて行うアクションがあるとしても、メーメならば単独で1秒でやつてのけることが出来る。彼女はそう言う存在だった。

事実、今回の2RBにおいても本来ならば唱えなければ発動出来ないスペルを 単に命令するだけで素早く発動することが出来た。

それは、彼女が状況からどのEOMを使うか自ら考へる」ことが出来、準備をしていったからだ。

（意思を持ち、自立している〇〇……）

「まだなの～？」

必至に耳の穴を押さえている姿は、本当にただの幼女なのが。『メーメ？ 一人で入つてるの？』

考え方をしていたので、そんな声に気がつくのに遅れた。ガラリとドアが開きサリナが……、

「ちよつ」

「待て」そんな声も出すことが出来ず……顔だけ振り向くと、赤面しているサリナと目が合ひ。

「いやあああああああ……」

「おぶらあ！……」

回し蹴りが顔面に炸裂。クリュウはキリモリ状に回転し、壁に激突してそのまま湯船にダイブした。

彼女の怒りを表すようにバタンと乱暴にドアが閉められた。

「ちよつと……」じゅじんさま？ 何があつたの？』

泡だらけで目を開けられないメーメが戸惑いの声をあげる。

「誰か……助けて……たすけてなのおお！」

メーメの叫びが、虚しく風呂場にこだました。

オフィスの一角。退社時間も過ぎた中、トチは椅子にふんぞり返つている。

「それで準備は済んだのか？」

「は、はい万事終わりました」

とてもじゃないが、他の社員には聞かせられない内容が報告されていた。

「ヴァインと言つ賞金稼ぎが乗るHSAと良く似たHSAをじゅぢりで用意し、彼にそれに乗るよう契約しました」

「もちろん勝てるHSA^{ハイサ}を用意したんだろうな?」

トチの丸い顔が悪人顔になる。

「も、もちろんです。一課に要請して、最新鋭の技術を搭載しました」

「ふん、一課か……。あんなオカルト技術ばかり研究している所か」

「役に立つのか?」

「M.D^{エムディ}は、『まず、並みのHSA^{ハイサ}には負けない』と言つていまし

た」

トチは、鼻の穴から鼻毛を千切るとフウッと部下に向かつて飛ばす。

「まあいい。賞金稼ぎが勝とうが爆発しようが、うしを口無しにしてくれれば問題は無い」

WCにおいてギドレーの勝利は揺るぐことは無い。彼は今日も快勝を遂げていた。この点は問題ない。

それよりも気に入らないことがあるとすれば、今日のコースの内容だった。

「なんだあ……アレは……」

「ひ、ひい」

丸い顔が四角く見えるほど、トチは怒りを表す。

怒りの原因は特集まで組まれるほど『ディーゴ』の活躍だった。新聞の夕刊も……テレビも……36年ぶりに達成された、オーバーランの記事でいっぱいだった。

「あ、あれは仕方の無いことで……」

そこにはギドレーもアイザも関係ない、無名だったライナーの名がでかでかと報道されていた。

「クリュウ・イワザキ、こいつは何者だ!」

「それが、本当に無名の新人でして」

ギドレーならば知るその人物であつたが、この部下が知らなかつた。

誰もが、アレはただの奇跡だ偶然だと呟づいた。

「気に入らん」

だが、この時このトチだけは……いや、2RBを貶しているトチだからこそかもしれない。

何か嫌な予感を感じていた。

クリュウは湯上りに《ティーポ》のいないハンガーに来ていた。いや、来ていたというより、見えなくなつた彼女を探しに来たというのが本音だった。

「なんで、アンタこんな所に……」

突然現れたクリュウを前にサリナがたじろぐ。

「なんとなく、ここかなつと思つて」

湯当たりした体には、ハンガー内のひんやりした空気が気持ちよかつた。

「そういえば、今日の飛走り、どうだつた?」

ルリの話によれば大層、テレビに囁り付いて(壊しそうなほど)応援してくれた、と聞いていた。

だからこそ、この天邪鬼な本人に聞いてみたくなつた。

「アンタらしい、無謀で無茶で無茶苦茶で……フン、負けるかと思つたわよ」

サリナは「負ければ良かつたのに」とは言わない。

(やつぱり応援してくれてたつてことか)

決して口にはしないだろうが、ヒヤヒヤしましたとまるで顔に書いてあるようだつた。

「……じゃあ、好きになつてくれた?」

「ふうあ!?」

真摯に見つめ、告げるその言葉はサリナを勘違こさせると十分

だつた。

「HSAを2RBを……どう?」

暗闇でクリュウの目には映らないが、サリナの顔は赤面していた。

「馬鹿、馬鹿じゃないの？」

フンとサリナは捻くれる。

「お生憎様。私はアンタと違つて、HSA^{ハイサ}が好きでも嫌いでも死はないのよ！！」

サリナはあつかんべえをするとハンガーから姿を消した。

「はあ、まだ駄目か」

クリュウは深く、深く、ため息を付いた。

「んばんは、呉靈立児です。

今日は前回の話からの勝利の余韻が冷めない、といった話になりました。

最近キャラがあまり喋つていらないなあと感じこんな感じになりましたがいかがでしょうか？

「意見」「感想お待ちしております。

スカイレールカップはワールドチャンピオンカップと競合して行われている。

そもそもWCCは、建国記念週間の連休に行われている。もちろん、それに平行して行われているSCは休日に専り観客が多い。

スタジアムの観客の数は外に溢れる程であった。

WCCも、SCも複数日程で行われている。連休の最終日には、WCCで決勝戦、SCにおいてアイザとのHキシビジョンが行われる。

そのSC一四三、トーナメント一回戦の一回目が行われる。

クリュウは今日自宅でのテレビ観戦をしていた。

本当は大会会場で生で見たかったのだが、

HSA 馬鹿！

と、言われ監視付きで外出することを禁止された。

対して相方のメーメは機体調整の為にスタジアムに行っている。観戦しに行っている訳ではないのに、少しうらやましかった。

「なあ」

「駄目」

看守はそう一蹴する。

「いや、抜け出さないけど……そんなことに立つてないでここ、坐つたら？」

クリュウを居間に押し込んでからサリナはドアの前で囚人番をしていた。

「いや……別に、私は、2RBなんて興味ないし……」

「まあまあ、教えてやるからさ」

いまいち気乗りしないと文句を言いながらもサリナはクリュウの横に腰かける。

(口で言つほど興味が無いつて訳じやないんだよな)

話をしていれば分かる。

サリナの（たまに）口から出る HSA ハイサ 、 2RB の知識は一般人のものよりも高度だ。

クリュウは昔彼女が HSA ハイサ をそれほど嫌いではなかつたと確信しつつあった。

（何がサリナをこんな HSA ハイサ 嫌いにしてしまったのだろう）

クリュウが好きすぎる意味で HSA ハイサ 馬鹿だというなら、サリナは真っ向から逆な HSA ハイサ 嫌いである。

「……そんなに私が HSA ハイサ 嫌いなのが気になる？」

クリュウは驚いた。

「顔に書いてある」

「そんなに分かりやすかつたか？」

「ば～か」

理由は絶対に話さない。サリナの言葉はそつと言つていいようだつた。

「私は HSA ハイサ も、ライナーも嫌い。アンタがいくら私に好きになつて欲しい、と思おうが嫌いなものは嫌い、好きになんてなつてやるものか」

その言葉はかたくなな拒否。

しかし言葉は続く。

「まあ、でも……夢をかなえようと必死に頑張つてる 馬鹿ぐらいなら応……気に掛けてあげてもいい」

サリナの言葉の後ろは小さくなつていた。

「――シフトカラーズ――

空気を読んでか読まぬか、テレビで一日目の第一戦が始まった。氣まずい雰囲気はぶち壊された。

5番と6番の試合が行われる。

「ひとまずは堅実に攻めるみたい。どつかの誰かと違つて「応援するとか言つ割には……やつぱオレのこと嫌い?」

「それとこれとは別、馬鹿じやないの。開幕から大業ぶちかますのなんて、我慢が出来ないただの子どものすることじやん」テレビの中ではお互い先にも後にも出ずという展開。両機とも出方をうかがつている。

(これはブラフ……)

クリュウはそう睨んだ。

HSA ハイサ に乗る者と乗らないものでは、見方一つひとつ違う。

「何やつてるのよ……早く攻めなさいよ

サリナはじれつたそうにしている。

見るのは派手で、予想できない展開を待つている。

だから演じる方は相手との戦闘に集中力を裂きながらも、この観客の期待に答えなくてはならない。

「そろそろ、動くな

動くとすれば6番が先ではないかとクリュウは考える。クリュウがソーサラーではないかと思っているHSA^{ハイサ}だ。

「ホントだ」

クリュウが呟いた直後6番が加速を始めた。

ソーサラーの戦術は、加速したふりをして相手の加速を誘う、そして宙返りを行つ、後ろを取つた6番機は後ろからE.O.Mによるドッグファイトを仕掛ける、のではないかとクリュウが予想する。ライナーは人気商売である。

人気と一重に言つても、スポーツであり賭け事でもあるRBは、人気にも種類がある。

まず、"勝つ"人気。これはどちらからも応援される。

また、”魅せる”人気というのもある。スポーツとして観戦する側の人間からすれば見ていてワクワクする試合というのは受けがい。そして派手な演出は私設大会等でも良く好まれる。

この大会において、賭け事としての人気はあるのに、嫌われているライナーがいる。

ヴァインのという名のライナーがそつだつた。ヴァインは賞金稼ぎとして悪名が高かつた。金の為なら、勝ちも負けも関係無い、という姿勢がライナーとしての株を下げていた。

ヴァインの飛走は一日目の第一二RBだ。

第一二RBも終わりが近い。

戦いは、ファイターの5番機よりも6番機が有利であつた。ソーサラーの6番機は巧みな E.O.M エオム が5番機を翻弄していた。

5番機はドックファイトを仕掛けているのに、トラップ型 E.O.M エオム ”火罠” によつて逆に追い込まれていた。

5番が”火罠”を避けた瞬間、形勢が逆転する。

「これで、終わりかなあ」

ため息をつくようになサリナが言つた。

6番機が宙返りで後ろを取る。

ソーサラーの本領発揮とでもいうよつな、”火射”と”炎射”の追撃により……ついにダメージが限界を向かえた。

脱線後落下、5番機は海に波紋を作り上げた。すぐに救出用に待機していた3機の H.S.A ハイサ が出動しクレーンで5番機を引き上げる。

「割と普通の試合じゃん」

ギリギリの戦い、冒險心のある改造とかが特にあつた訳でもなく、凡庸な2RBだつたとサリナは評価する。

「いい戦いだつたじやないか、危なげなくないし」

古い機体に戦術は危険極まりない、そんな戦いが評価されているライナーが口にする言葉とは思えなく、

「ふつ」

サリナが噴き出す。

「ちょ！そ、それって、クク。ア、アンタが言つセリフ？」

「わ、笑うなよ！」

空に描かれていたスカイレールが消え、準備が整つた。第二戦が始まろうとしている。

田玉はやはりヴァインが駆る8番である^{オーツク}。

だが、その紹介をされても7番機の紹介に比べて歓声はない。

「露骨ねえ」

「まあ、賞金稼ぎだし」

ヴァイン自身も観客なんていないものだと考えている素振りで、^{ハイサ}HSAに乗り込む。

その行動にブーイングすら起きる。

だが、現在の一一番人気は伊達ではない。

対戦相手は《283系》という主流HSAであるのに対し、《オーツク》は《183系》という2世代以上も古いHSAである。だが、《オーツク》のオツズは0・2倍 すなわち、《オーツク》に100ウエン賭けても120ウエンにしかならない。それほど、賭け事上でヴァインは搖ぎ無い人気を示している。

「ああ、空の色を変える。ゴーーシフトカラーズ！！

掛け声と共に、2機のHSAが走り出す。

グンと《オーツク》がスピードを上げる。

「速い！！」

その加速性能は群を抜いていた。あつという間に7番機と差を着ける。

「ちょっと、今EOM^{エオム}でも使つた？」

「使つたんじやないかな」

クリュウも自身がない。だが、初速というにはとても速い。

7番機は慌てて、E^{エオム}OMを使用して、加速する。

だが、距離は縮まらない。

「てっきり、旧世代の機体を腕でカバーするタイプのライナーだと
思つてたけど、違うみたいだな」

確かに圧機体性能は高い、だが機体に振り回されているようにも
見える。

ヴァインの2RBは蓋を開けてみれば、機体性能の暴力。

2RBは、『オーツク』のE^{エオム}OMが吹き荒れる、凄まじいスピードで切り抜ける、たとえ被弾しても傷一つ負わない。

そんな一方的な試合だった。

戻ってきた『オーツク』に与えられたのは大きな罵声。

それは一方的な試合に対することであり、ヴァインの2RBに対する態度であつた。

だが、クリュウは別な見方をしていた。

（すごい試合だった）

『オーツク』に違和感を感じる。観客とは違う、ライナーだから

こそ分かる感覚だった。

それは、全てのステータスが高いこと。2RBのHSA^{ハイサ}独特のい
ずれかのステータスに裂いたという改造が見られないことだつた。
(どうやってるんだ)

疑問と好奇心が沸いてきた。

「んばんは、呉立児です。

今回の内容は前回の話で本当は書いつて思つていた、裏の内容となりました。

短いですが不気味なHSAの登場です。
このHSAがどのようなHSAなのかといつのが、SCの鍵となります。

ご意見ご感想を募集しています。また、分かりにくい箇所等ございましたら是非是非教えてください、加筆したいと思います。

最後に、レビューを書いて下さった上沢様、お気に入り登録して下さった皆さん、大変ありがとうございました。自身と書き続ける勇気をいただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3223v/>

空闘飛走スカイライナー

2011年11月20日03時21分発行